川田順著

新古今集の鑑賞

立命館出版部

序

新古今和歌集は私が年少の頃に親炙した古典の一つで、言はば初戀人である。五十歳の今日に於いてもその蠱惑的な美しさを忘れ得ない。

大正に入つてから、歌壇は擧つて萬葉集を偏重し、他の時代の作物を不當に輕侮するやうになつた。それに對して私は義憤の念を禁じ得なかつた。大正十一年頃から最近に至るまで新古今集の爲めに辯ずる愚文を折にふれては專門の諸雜誌に發表したのであつたが、それらを集めたのが此の小著述である。

昭和の歌壇は漸くにして新古今集への關心を持つに至つた。私は此の現象を微笑しつつ眺めてゐる。

私は歌の作者であつて學徒で無い。書中の考證には不備の點があるであらう。乍併、鎌倉初期の文學を如何に觀察し、批判し、玩味すべきかに就いては、私の力を打傾けて書いたつもりである。

昭和七年五月

川田順

目次

第一篇　新古今和歌集の鑑賞

第二篇　新古今時代の諸歌人

第三篇　雜稿十一種

第四篇　藤原定家歌集講話

第一篇　新古今和歌集の鑑賞

序説

萬葉にあらざれば實朝、實朝にあらざれば良寛。斯うした歌壇近來の傾向は、古典文學の研究と鑑賞とを非常に偏頗ならしめた。偏頗な研究は學徒として罪惡、排他的の崇拜は作者にとつて有害である。

私は年少の頃から新古今和歌集に親しみを持つてゐた因縁上、これから自分の作歌の余暇を捧げて、此の一勅撰集の爲め辯護の筆陣を張らうと決心した。

元久の勅撰集や其の當時の諸歌人に關しては、先づ鎌倉時代の抄物、髓腦物の類にいろいろと書いてはあるけれども、後鳥羽院口傳を殆ど唯一の例外として、その他の所說は皆採るに足らない。それは無條件の崇拜か若しくは不徹底の感想漫談に過ぎぬからである。

徳川時代、元祿の國學復興以後には勿論種々のものが出たけれども、一言にして盡くせば、これ等も亦批判としては概念的であるのと、觀方や褒め方が皆紋切型であるのとで物足らぬ。此の時代の國學者や歌人等が新古今集に對して行つた批評は、非難する方に在つては「華に過ぎて實少し」と言つただけである。讃美する方の側に在つては、例へば國歌八論の荷田在滿は單に褒めちぎつただけである。美濃の家苞の本居宣長は、集中の各首に對して「めでたし」「詞めでたし」と何の役にも立たぬ言をくりかへしただけである。尾張の家苞の石原正明だけはその著書の序文に於いて相當の見識を述べてゐる。「新古今集の頃の歌は、一首の口調をめでたく整ふる事を本意として、詞の上に心を殘して餘韻を深くこめ、一首の續けさま幽玄にして、あらはに淺まなる所なく、情を深うし、語勢をいたはり、たけ高くも、しめやかにも、强くも、やはらかに、百般の姿あり。唯しほしほくだくだとするを嫌ひて、詩人の所謂雄偉流暢豪壯新奇といふ調べを常には思ひためり。かの新奇なる余りに、濃やかに理を言はば、

少し如何にぞやと思はるゝふし無きにしもあらねど、それはた瑕ありとも玉とならむ事を願ひて、歪き疵を思はざりし物なり。」とあるは概評として極めて適切、要領を得てゐる。

明治以降では鹽井雨江の新古今和歌集詳解を讀まねばならぬ。その「總論」は懇切である、たとひ創意に乏しとするも。又、その一首一首の批評中に傾聽すべき言がある。津田左右吉氏の我が國民思想の研究と題する著述中にも新古今集に對する概評がある。津田氏は歌學の專門家では無けれども、その史的觀察は確かである。此の時代の和歌の特色は技巧本位である事を調强してゐる點は「華に過ぎて實少し」と大同小異であるけれども、「歌の風情に着眼したのは面白い」と言ひ、或は「なるべく具象的に觀相らしくいひ表はさうとする傾向がすべてに見える」と述べてゐるのは大に頷かれる。佐々木信綱先生の和歌百話中にも、新古今集に關する卓見を一二發見する。その「和歌概說」の章に「藝術的發達の極致として、和歌に於ける象徵的作風は、新古

今集にその發達を見た事である。」と說かれてゐる。俊成定家等の象徴的手法を見出だしたのは蓋し先生が最初である。又その「八代集解說」の章中に「殊に千載新古今の時代は、平家滅亡源氏勃興の兵亂時代である。觀來れば散文は文明の盛熟期に盛んであつて、詩歌は文明の變動的機運に乘じて榮えるの傾ありと言ふべきであらうか。」と言はれたのは、亂世の時代相と新古今集とを不可分に觀察する私に取つては、格別意味深いお言葉である。

要するに、鎌倉以來の諸說中には採る可きものも相當あるけれども、その多數のものはややもすれば概念的である事、譽めるにも譏るにも熱情の乏しい事、時代の背景を深く考へての上の批評が少い事、各歌人に就いてその生活や態度を考察してゐない事等の不滿足がある。先づこの位の事を腦裏に入れておいて、私の管見を述べて行かうと思ふ。(大正十一年三月稿)

俊成、定家、家隆、良經等の和歌が如何なる態度で制作せられたかに就いて、そのあらましを述べようと思ふ。ことわつて置くが彼等の自然觀は別個の問題とする。言ひ換へれば、彼等が如何に作つたかを考察するのであつて、如何に觀たかを論究するのではない。

彼等はいつも構へて詠んだ。歌を作るといふ事の、或はおのれが歌人であるといふ事の、强い自意識の下に制作した。偶然の興味や天籟の靈感に因つておのづから漫吟するといふやうな事は殆んど無かつたのである。彼等は左樣な當てにならぬものに信賴してはゐなかつた。彼等はみづからを固く把握してゐたのである。俊成父子が住吉明神に祈願したといふ徹書記物語の記述も、畢竟は自覺の極の他力に外ならない。或

は宮内卿の如く一首の歌に命を賭けた者さへある。

つまり彼等の和歌はいつも藝術家の態度を以つて制作せられたのである。ざつくばらんは彼等の最も忌み嫌ふ處である。又歌は餘技なりとか生活あつての藝術なりとかいふやうな氣取つた事を口にしつつ拙惡極まる歌を臆面も無く吐き散らす處の後世の非歌人や和學者流の態度は、彼等に於いて夢想だもしなかつたのである。彼等は至極一途な正直者であつた。

彼等の作歌は自覺的から專門的に、更に突き詰められては世襲的にさへ成つて行つた。一首の歌を工夫するに就いても、研磨彫琢といふ位の言葉では形容しきれない程に苦心慘憺、估倨經營する。秀歌が出來たと言つては悦び驕り、思ふやうに詠めぬ時にはおのれの力を疑ひ失望の叫びを放つ。嫉妬排擠の暗鬪さへ行はれた事は定家の明月記などからも推定出來るのである。

和歌の浦や沖つ潮合に浮びいづるあはれ吾が

身の寄るべ知らせよ(家隆)

敷島の道に吾が名はたつの市やいさまた知らぬ大和言の葉(定家)

斯うして、他の一切に無氣力であつた平安朝末期の貴族等が、三十一文字の中に彼等の生命を投げ込み、憂身をやつし、そこに現當の諸願を掛け盡したのであつた。彼等の作品が京洛の長閑やかな花鳥風月裏に長閑やかに制作されたものと思つたら大間違ひである。世相の變轉極まり無く、わけて貴族の榮華の凋落し行く時、和歌所といふ織殿の庇かげに閑ぢ籠つた彼等の多くは、右のやうな內的苦患を續けながら、絢爛無比の錦繡を傍目もふらずに織り出して行つたのである。私が新古今時代の歌人に深い同情を持ち興味を感ずるのは、主として此の點に外ならない。(大正十二年一月稿)

集中の萬葉歌に就いて

新古今和歌集に眼をさらして行つて處々人麿や赤人などの萬葉歌に出會すると、上米の飯の焚きたてを食べて石に嚙み當てたやうな、錦繡をまき返して行つて思はざるに粗布のつぎあてを見出したやうな感じがするのである。腹が立つて泣き度くもなるのである。斯う言つたところで人麿赤人などの歌の絶對價値が石や粗布に等しいと申すのでは勿論無い。定家家隆式子内親王宮內卿達の歷々が衣冠束帶玉の沓、十二單で居流れた新古今御殿のただ中に、四世紀前の萬葉人等が天眞流露の浴衣がけで、毛脛をむき出して割込んでは、如何にも御殿の空氣を險惡にする事ではないか。この不調和の不快感に於いて、相對價値の關係に於いて、私は集中の萬葉歌二十餘首を悉く抹殺し去り度いと希求するのである。撰集にせよ、家集にせよ、雰圍氣の統一を欲し度

いから。

古今集はその序に「萬葉集に入らぬ古き歌云々」とある通り、人麿赤人等の名前を見せてゐないから、全體の雰圍氣が亂されないので非常に讀み心地がよい。讀人不知の歌の中に萬葉人の作と推定出來るものが少しはあるが、目ざはりになる程ではない。後撰集に就いても凡そ同じ事が言へようと思ふ。拾遺集になると、人麿はじめ萬葉人の作をかなり多く採錄し、しかもそれ等がよりもよつて二等品又は贋造品の程度のものばかりだからたまらない。撰者公任の識見の程も疑はれる。後拾遺、金葉、詞花、千載の四集は幸にも皆古今集の例に倣つて萬葉人の援兵を謝絕してゐる。然るに我が新古今集に到つて不見識な拾遺集の蹤を追つたのは何故であらう。

抑も定家等新古今集の撰者は如何の必要あつて、如何なる標準を以つて、如何なる撰者良心に於いて萬葉人の作を採錄したのであるか。我より古をなす主義の、自信力の强い定家等が何の物好きで這種の道樂を敢へてしたのであるか。私はその動機を追

窮して見度い氣持になつた。動機はいろ／＼に臆測出來る。

（一）集の序に「昔今時を別たず、高き賤しき人を嫌はず、目に見えぬ神佛のことのはも、烏羽玉の夢に傳へたるまで、廣くもとめ、普く集めしむ」とある精神によつて、平安朝以前奈良朝のものまでも漁り盡し、大歌集たるの形式を整へようとしたのであるか。これなら極めて平凡な動機である。

（二）定家は元來萬葉を崇拜し、爲めに撰集の機會を利用して人麿赤人等に敬意を表したのであるか。これは現代の人々から喜ばれさうな動機であるけれども、私はこれを否定する。あいにくと定家はそれ程までに萬葉を崇拜してはゐなかつた。それは苟も歌人の身として、萬葉を一通り（傳統的の心持で）尊敬しない者は古來一人も無かつたであらう。新古今時代にも人麿影供が行はれてゐる。佐佐木信綱先生の「和歌百話」によれば、後京極攝政良經は實朝と同じく萬葉集の崇拜家であつたとある。定家も無論一通りは萬葉を崇んだであらうが、それは決して深い信仰では無かつた。この

事は、彼れの作品が萬葉の感化を殆んど被つてゐないのでもわかる。又彼れの歌論として信ぜらるる詠歌大概、近代秀歌等の著述の中にも殊更に萬葉を崇敬し推賞してゐるふしは見えない。彼が實朝に萬葉集を贈呈した一事實だけでは未だ以つて彼を萬葉黨と斷ぜしむるには足りない。私の觀るところでは定家は大の業平黨であつた。新古今集中に伊勢物語の歌を採錄すること枚擧に遑ない程である。又定家の天福本（伊勢物語を校正奥書せるもの）といふのがある位である。古今集や源氏物語も亦彼に取つては萬葉集よりは遙かに親しいものであつたらしい。古今集に就いては顯註密勘があり、源氏物語に就いては定家本（青表紙）がある。彼は到底萬葉黨では無かつた。

（三）誇學的の氣分に成つてうつかりと萬葉歌を取入れてしまつたのでは無からうか。「世は末世に及ぶといへども麻呂等萬葉通なほ控へたり」といつたやうな自意識が博學な定家にわづらひしなかつたとは何人か斷言し得よう。

（四）それとも、萬葉歌に遠慮無く斧鉞を加へて後世に威を示さうとしたのでもあら

うか。新古今集の撰者等は無鐵砲に、横暴に、否むしろ痛快な位に萬葉歌を添刪してゐる。人麿赤人等を遇すること昨日弟子入りした鼻垂れ小僧を視る如き始末である。

風まぜに雪はふりつつしかすがに霞たなびき春は來にけり

岩そそぐたるひの上の早蕨のもえいづる春になりにけるかな

いざこどもはや日の本へ大伴のみつの濱松まち戀ひぬらむ

ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にあるらし

これ等はまだ比較的優遇されてゐる方の歌である。

田子の浦にうち出でて見れば白妙のふじの高

根に雪はふりつつ
久方の天にしをるる君ゆゑに月日も知らで戀
ひわたるらむ

ここに到ると虐待も甚しい。むしろ人權蹂躪である。地下の萬葉人等の呆れた顏が見度い。剛情な人麿は切歯扼腕し、内氣な赤人はさめざめと涕泣してゐる。さうして定家は朱筆をくはへながら泰然としてみづからの頰を撫でて御座る。これは定家が淺學で萬葉集を本當に讀み得なかつた結果であるとするのは下凡の俗論に過ぎない。何ぼう代匠記や古義の出現せざりし昔時といへども、斯樣に明瞭な皮肉な讀み間違ひは出來ないのである。言ふ迄もなくこれは定家がおのれの時代の趣味に投合せしめる爲めか、又は新古今集の雰圍氣の統一を出來るだけ亂すまいと努力した結果の改作たるに相違ないのである。以舊歌爲師染心古風習詞於先達（詠歌大概）とか何とか神妙な事を口にこそしてゐるけれども、定家の肚裏はそんな甘いものでは無い。道に當る者が

あれば萬葉人だらうが何だらうが撥ね飛ばして行く。尤もこの萬葉歌添删に於いては一人の先輩が有る事を見落してはならない。それは前述の公任である。彼が拾遺集に採錄した人麿の歌の中に

おふの海に船乘すらむ我妹子があかもの裾に潮滿つらむか

飛鳥川しがらみ渡しせかませば流るる水も長閑からまし

足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ

その他にも改惡の例が幾らでもあり、殊に吉野の宮に奉る歌（長歌）に到つては殆んど原形を存しない程に加筆の暴威を振つてゐる。公任は此の點に於いて定家に疋をかけた先輩である。

以上いろ〳〵臆測した動機のうち果してどれが當つてゐるだらうか。假りに（四）が當つてゐるとすれば、大分おもしろい。それはともかく、新古今集の二十餘首の萬葉歌は、どう見ても目ざはりでたまらないのである。（大正十二年二月稿）

述懷の歌

爰に述懷の歌といふは花鳥風月の諷詠で無くつて、作者の或る感慨を主觀的に發表した種類のものを指すのである。もう少し詳しく述べれば、四季羇旅戀愛以外の作で、作者の內觀乃至對世間觀を直接に言ひあらはした歌をいふのである。新古今時代の歌人には斯うした述懷の歌が甚だ多く、それ等を分類し綜合して視ると、此の時代の人達が世間及び自己に就いて如何なる事を思念してゐたかが分明になり、從つて又當時の世相が朧氣ならず浮かんで來る。それで此の種類の歌は新古今研究者たる私に對し

ては格別の興味を唆るのである。

新古今集そのもののみならず汎く當年の主要作家の家集などをも漁つて、私は述懷の歌におよそ八種ある事を見出した。

その一は過去追慕の歌である。華やかなりしにつけ憂かりしにつけ彼等に取つて『昨日』ほど戀しいものは無かつたのである。

その二は頽齡を嘆く歌である。唐の劉廷芝が代悲白頭翁の詩とおなじ心持は爰にも繰り返し繰り返し歌はれてゐる。

その三は萬法の流轉を觀ずる歌であつて、西行慈鎮等の僧侶はいふ迄もなく、定家家隆その他いづれの作家にも諸行無常の思想を歌はざる者は一人も無いと言つてよい。『今日は、よいお天氣で』といふ我等の挨拶の如く平凡に彼等は『浮世のはかなさ』を歌つてゐる。

その四は婆婆厭離の歌、遁世の歌である。聚洛を捨てゝ深山に入るの歌、所謂やま

ざとの歌である。

その五は、さて山里の柴の庵に浮世を厭ひながらも、とゝすればその寂寥に堪へかねて俗界の音づれを戀ひわびる歌である。深山から聚洛への愛著である。此の種の歌は西行などに殊に多い。

その六は不遇をかこち官位の卑きを訴ふる歌である。かつて唐宋八大家の文章を讀まされた時分、韓退之蘇老泉等の名文と稱するものに薦聞抽擢を哀願し或は露骨又は婉曲に自己推薦をしてゐるなど心事の陋とすべき内容のものゝ多いのを見てうんざりしたのであつたが、その低劣な内容を極めて立派な文字に捏ね上げてゐる腕前にも驚かされたのであつた。それで、藝術は内容で無くつて表現では無からうかといふ私の心の奥底の信念を裏書された心持がしないでも無かつた。今、新古今時代の述懷の歌を検討するに類似の感がして來る。

澤に生ふる若菜ならねどいたづらに年をつむ

にも袖は濡れけり　（俊成）

春をへてみゆきになるる花の蔭ふりゆく身をば哀れとや思ふ　（定家）

春の雨のあまねき御代を頼むかな霜に枯れにし草葉もらすな　（有家）

春日山みやこの南しかぞ思ふ北の藤浪春にあへとは　（良經）

君が代にあへるばかりの道はあれど身をば頼まずゆくすゑの空　（雅經）

これ等の歌を誦してゐると、煩瑣な内容論に立ち入る前にその美の魅力を感ぜずにはゐられなくなる。定家の明月記を通覧した人はすぐに氣の付く事だが、歳末年始の條には必ず除目に關する詳細の記録があるのみならず、その他の條にも自己の官位の

不足に對する泣言が韓退之そつくりの心理狀態で屢々くりかへされてゐる。平安朝末期の無實力な貴族階級に取つては何よりも此の形式上の出世が彼等の野心を占有する最大の問題であつたに相違ない。して見ると此の種の述懷の歌を强ちに內容空疎と貶し去るわけに行かなくなる。何となれば、それは現代の常套語を借りて言へば生活の最も僞らざる告白なのだから。えらさうな事をほざく現代人だつて、肩書と月給との問題なのではないか。私が前揭の美しい述懷の歌に共鳴したからとて何の不思議でもなく時代錯誤でもない。その七は歌人としての自覺の歌である。

和歌の浦や沖つ潮合に浮び出づるあはれわが

身のよるべ知らせよ　（家隆）

たらちねの及ばず遠き跡すぎて道をきはむる

和歌のうら人　（定家）

歌人たる事をみづから卑しんだり又は歌を餘技として考へる事は當時の作家達の夢

にも知らなかつたところである。歌人たる事に無上の光榮を感じ秀歌の詠出を人生の意義なるかの如く信じつゝ彼等は斯道に經營慘憺したのであつた。神と佛と和歌といづれが至高のものなるかを彼等は思ひ定め得なかつた。まことに敷島の道は彼等に取つて儼然たる一宗教を形成してゐたかの觀がある。其處に此の時代の特色と生命とが存する事を見逃してはならぬ。儒教が思想の基調と成つた後世の我が國にはこの藝術至上の麗髓の匂ひは全く地を拂つたと言つてよい。

その八は簒奪者北條氏を呪咀し給ふ太上天皇の御述懷である。

奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと
　人に知らせむ

ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を
　いでむ月影

以上八種の述懷の歌を綜合して觀察すると其處に時代の色彩が分明に浮かんで來

る。さうして其の世相を背景に置いて述懐以外の四季や戀愛の歌を玩味するならば、悲哀な美しさをしみじみ感受し得るであらう。（大正十二年十二月稿）

漢詩の影響

和歌に對する漢文學の影響は憶良旅人等が萬葉の昔からの事である。人麿赤人等の長歌の形式が四六駢驪體の模倣から發達したものなる事は疑を容れる餘地が無い。白氏文集と我が王朝文學との交渉は事新らしく云々する迄も無からう。

新古今時代の和歌と漢詩との關係も形式內容兩面から觀てかなり密接なものがある。彼の幽玄とか有心とかいふ觀念に漢文學臭味の多分に存する事は何人も拒み得ないであらう。石原正明の『尾張の家づと』に『新古今集の頃の歌は一首の口調をめでたくととのふる事を本意として、詞の上に心を殘して餘韻を深く籠め、一首のつづけ

さま幽玄にして、あらはに淺まなる所なく、情を深うし、語勢をいたはり、たけ高くも、しめやかにも、強くも、やはらかにも、百般の姿あり。唯しほ〳〵くだ〳〵とするを嫌ひて詩人のいはゆる雄偉流暢豪壯新奇といふしらべを常には思ひためり』と論じてゐるのもおのづから這般の消息を物語つてゐる。津田左右吉氏の言をそのまま借りれば、俊成は常に漢詩を耽讀し、歌合の判にも衒學的と見えるまで屢々それを引用して、詩の風情に似通つたのを讃めてゐる。定家も歌をよまむとする時には先づ白樂天の詩の句などを吟じたといふ。まことに多藝多才の彼は漢詩を作ることにも亦堪能であつて、明月記の中にをり〳〵出て來る絕句には吟誦に値するものが少くない。當時は又內裏に於いて詩歌合の催が屢々行はれ、月卿雲客の中に作詩を專門とする一かどの人々が七八人はゐたやうである。奈良朝の古から當時に至るまで、國文學は常に漢文學からの刺戟と影響とを被りつつ進步し變化し來つたのであつた。

新古今時代の和歌で、先づ、漢詩の直譯に屬するものを三つ四つ例示して見よう。

昔おもふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山ほとゝぎす（俊成）

樓のうへの秋の望みは月のほど春は千里の日ぐらしのそら（定家）

蘭省の花のにしきの面影にいほりかなしき秋の夜の雨（おなじく）

釣月のうかぶ浪路に月老いて人と秋とのわかれをぞ思ふ（おなじく）

それから

山おろしに鹿の音たかくきこゆなりをのへの月にさ夜やふけぬる（入道左大臣）

は猛虎一聲山月高の和譯に違ひなく、

かへるべき越の旅人まちわびて都の月に衣う
　つなり　（良經）

はいゝ歌に違ひは無いけれども、直ちに李白の子夜呉歌を聯想せしめる。
　斯様な詮議をすれば數限りない事であつて、それは此の一篇の目的で無い。私の主として述べようとする處は、新古今の歌の旋律格調の上に於ける漢詩の影響である。此の時代の歌の最も代表的の形式なる體言どめは、その由來に就いていろ〳〵の説があるけれども、私の斷案に依ればそれは漢詩の絶句から來たものに相違ない。あの體言どめのすわりのいゝ均齋的な格調、あの餘韻の深くこもつた旋律はどう考へても絶句形式の姉妹としか思はれない。それから又、新古今の歌には古今集以降の平安朝の歌に見出し得ない簡潔遒勁な語法がある。句々きりゝと引き締まつて、彈(はじ)きかへしさうなものがある。これも必ずや漢詩から學んで造り上げられたものに相違ない。例へば、

人すまぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後は
たゞ秋の風　（良經）
あけばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の
すゑの白雲　（家隆）
あけわたる雲間の星の光まで山の端さむき峯
のしらゆき　（おなじく）
うつりゆく雲にあらしの聲すなり散るかまさ
きの葛城の山　（雅經）
拂ひかねさこそは露のしげからめやどるか月
の袖の狹きに　（おなじく）

これ等の歌の旋律の持つ强さは萬葉の歌の格調の持つ强さとは趣を異にしてる事を注意せねばならぬ。萬葉の雄大は曲線を以つて描かれ、新古今の勁拔は直線を以つて

引かれてゐる。

要するに、新古今時代の和歌にあの完全な體言どめの形式と簡潔遒勁の語法とを寄與した事は、我が短歌に對する漢文學の功績の最も著しいものであつたと言はねばならぬ。（大正十二年十二月稿）

雜考

一

藝術品を鑑賞するに當つてその作者の年齡を知つて置くといふことは肝要な事である。推理や考證で明らめ難い秘密を作者の單なる年齡が屢々雄辯に物語るから。現歌壇の傾向と主要作家の年齡との間に關係を結び付けて論述した今村沙人君の文章を先頃某誌上で拜見したのであるが、それは何でも無い事のやうで實は頗る要領を得てゐ

ると思ふ。私は沙人君から暗示を得て新古今集の代表的歌人達の年齢を事新しく調べて見たが、私の參考書の貧しい爲めか、依然として生年月の不明な作者の尠くないのは遺憾に堪へない。ともかく今迄に知り得た處だけを披露しよう。

私は新古今集撰進の年すなはち元久二年を標準に置いて主要歌人の年齢をくらべて見ようとする。おもふにそれが最も適當であり且つ最も簡明な方法でもあるから。元久二年に於いては先づ撰者五人のうち定家が四十四歳、家隆四十八歳、雅經三十六歳、通具は未詳であるけれども、建仁二年五十四歳で薨去した通親を父としてゐる事實から推せば、定家などよりもずつと弱輩であつたらしい。太上天皇二十六歳、惟明親王二十七歳、慈圓五十一歳、それから公經三十五歳、公繼三十一歳、忠良四十二歳、秀能二十二歳、通光は通具の弟であるからまだ若い人であつたに相違ないのである。

これだけが私の今迄に知り得た事實なのであるが、これを綜合して考へて見ると我が新古今集の主要作者達は一二を除くの外は壯年者であると言つてよい。撰進の時期

を標準にしてさへ斯うなのである。歌集の内容を成す處の個々の歌は一層少い年齢の時の作なるに相違ないのだから、大摑みに押しならして言へば新古今集は三十歳を幾らも踰えぬ人々の創作であると言つてさしつかへ無い。定家等はまさしく夏の眞盛りに居り、太上天皇や秀能などの生命には未だ春の匂ひさへ褪せ去らなかつた。

巾幗歌人の春秋こそさつぱりわかつてゐないが、女性は早熟のものといつの世にも定まつてゐるから、彼等の平均年齢は一層低かつたに相違ない。俊成女は定家の異母妹であるし、高倉は定長（後の寂蓮）の女とあるから更に若かつたであらう。宮內卿の早世は増鏡や明月記の文句に照らして疑の無い事實である。新古今女流の第一人者式子內親王は後白河法皇の皇女で平治元年に賀茂齋院と成らせられてゐる程だから、此のおん方だけは定家よりも大分年長であらせられたらしい。

撰進の時に旣に亡くなつてゐた西行、俊成、寂蓮などは論旨を簡明にする爲め省いて置く。

戸籍しらべに興味を持ち過ぎるきらいが無いでもないが、作者間に於ける血族姻戚關係の判明してゐるものをついでに披露しよう。

二

俊成定家が父子であつて、太上天皇と惟明親王とが御兄弟であらせられる位の事は何人でも知つてゐる筈。寂蓮法師(藤原定長)は俊成の養子であつたが、定家出生の後避けて遁世したのである。攝政太政大臣良經は月輪關白兼實の子であり、從つて大僧正慈圓と叔姪の間柄である。左近中將良平はその良經の弟。右衞門督通具と左衞門督通光とは兄弟であつて共に土御門内大臣通親の子、俊成女はその通具の妻。源具親と宮内卿局はなまけ者と勉強家の不似合な兄妹。藤原有家、保季も兄弟であつて大貳重家の子。春宮權太夫公繼は郭公の後德大寺實定が子、八條院高倉は藤原定長の女。沖の石の讃岐は源三位賴政の女であり、異浦の丹後はその讃岐の從妹。藤原隆信、信

實は父子にして共に畫工兼歌人、さうしてその隆信は定家の同母兄。

先づこの位の事しかわかつてゐないが、これだけでも知つて置くと集を讀む場合の興味がそれだけ深くなる。

三

明月記承元元年四月の條に斯ういふ意味の事が書いてある。城南鳥羽に參つて後鳥羽院に伺候すると、和歌所開闔源家長を以つて自讃歌十首を召された、卒爾旅所の間歌稿も何も持ち合せないので唯思ひ出づる儘に書いて上つた、すると翌日家長を以つて仰せらるゝには、あの十首の中に

待つ人の麓の路は絶えぬらむ軒端の杉に雪おもるなり

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山か

の二首の見當らざるは如何、これ等は當然汝の自讃歌に入るべき佳調と思はるゝに、とのおん事であつた云々。

私は、先年某誌に寄せた愚稿『自讃歌僞作論』に於いて、世間に流布されてゐる新古今歌人十七人の『自讃歌』なるものは後人の頗る巧みな假托に過ぎないと斷定したのであつたが、今日偶然目に觸れた明月記の右の記事によつてさきの愚説の略謬らなかつた事を裏書されたやうな心持がする。

承元元年春某日に院の召された自讃歌は定家一人のみである事は日記の書きぶりによつて容易く推測される。百首歌を召されたり御障子の歌を書かしめられたりする場合の如きは勿論、普通の歌合詩歌合連歌などの場合に於いてさへ、我が定家はこまぐ〵と作者一同の名を列記するのならはしである。然るに此の自讃歌の條には自分以外の作者のあるやうな事は少しもうたつてゐない。若しも當時の代表的歌人の全部か

ら自讃歌を召されるといふやうな盛儀であつたとしたら、斯んな粗略な日記の書き方は決してしなかつたに相違ない。

それはともかく、あの『自讃歌』なるものゝ作者は明月記の此の條から假托の動機を摑んだものには違ひない。乍併、承元元年四月を期日とする場合には西行、俊成、寂蓮、良經の四人は既に亡くなつてゐたから此の人々の歌は省かれねばならなかつた筈である。假托者は斯んな事からも馬脚をあらはしてゐる。

家長日記といふものがある。それでもあさつて見たならば、私の所説は更に一層確かになるか或は反對に根本からひつくりかへされるかも知れない。私は未だそれを讀んでゐないのである。

四

新古今集の註解評釋では本居宣長の「美濃の家づと」及び石原正明の「尾張の家苞」

の二著を最も有名とし、それから市岡猛彦の「新古今もろかづら」や千葉葛野の「科野の家づと」などがある。猛彦、葛野は共に宣長の門流に屬する人々であつて、昔時に於ける新古今研究は主として鈴屋系統の仕事であつたと言つてよい。近來では鹽井雨江の「新古今和歌集詳解」、鴻巣盛廣氏の「新古今集遠鏡」、佐々木信綱先生の「新古今集選釋」などが記憶に存する。これ等の研究や著述はおのおの長短あるけれども、何人にも推奬出來るのは雨江の「詳解」である。それは最も懇切な全解(選註で無く)であるのみならず、なかなか卓拔な批評眼を具へて作品の眞の生命を捉へてゐる場合が尠くない。二三の例を擧げて見よう。

忘れめや葵を草にひきむすびかり寢の野べの

露のあけぼの　(式子内親王)

雨江曰。本居翁も石原主も共に三の句四の句詞使ひ整はずといはれ、本居翁は、ひき結ぶかりねの野べにあらず、ひき結びしかり寢の野べといはでは叶はず、さなくは

かりねせし野べとなくては整はずといはれたれど、皆、詩調の妙を忘れたる難なり。かくいはむには、調は平凡となり、また文章の如くなりて、詩趣を缺くべし。歌は文法を以つて説くべからず。詩趣を以つて味はふべきものゝみ。

床の霜枕のこほり消えわびぬむすびもおかぬ
人のちぎりに　（定家）

雨江曰。石原主は又むづかしき歌なりと言はれたれど、霜の如く氷の如くなどの意に見る故にむづかしくもなるなり。上の句より、一句一句よく吟じ見られよ。少しもむづかしき所は覺えざるにあらずや。その情景は一句一句にありありと浮びきたるべし。なるべく細に複雜にと構ふる詩想を短き詞に言ひまはさむとする此の時代の歌を見るには、單に詞の上のみを辿りては得難し。吟じてその調を味ひ、また自からの感情想像を充分に活かして而して後にその詞をも考へて見るにあらずば、その眞の心を得難きものなれや。

あぢきなくつらき嵐の聲もうしなど夕暮に待
ちならひけむ　（定家）

雨江曰。つらき物と定まりたる嵐、そのつらき意は、あたりまへの事と聞き棄つべき嵐の聲までが、わけもなく身にしみてつらく思はる。これも人を待つて居るからである。夕暮に人を待つ癖のなくばと幼く思ひよりたる意なり。本居翁は『つらき嵐と言うて、又憂しとは、煩はしき言ひ樣なり』と難じ、石原主も『此の難は言はれたり』と賛成せられたれど、また例によりて目のつけ方淺し。單に嵐のつらく思はるといふに止らば、誠に重複したりと嫌ふべし。されど、此のつらき嵐の憂しといへるは、さる平凡なる普通なる意にはあらざるべし。つらきはあたりまへの嵐が、あたりまへの事と聞き棄てられずして、殊更に耳につきて、つらく覺ゆる意なり。さればこそ上に『わけもなく』と言へるなれ。此の時代の歌、しかも定家の歌、さる普通なる平凡なる淺薄なる意を以つて見るべきにあらず。

右例示の中でも殊に『あぢきなく』の一首の評釋は徹底してゐる。雨江はまことに一隻眼を具へた批評家である。『詳解』の到る處で宣長及び正明の註釋に對し異存を唱へてゐるが、私の観る處では、常に雨江の說の方が尤もであるやうだ。

雨江に關係して思ひ出されるのは鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三氏に依つて『國文學大綱』といふ十二文豪評傳の刊行が明治三十一年頃にもくろまれた事である。此のもくろみは甚だ遺憾ながら斷篇に終つたのであるが、若しも當時の豫定の如く桂月の『藤原定家』が世に出たとしたならば、新古今研究者の私共はどの位便宜を得たか知れない。少くとも私が彼の難澁極まる『明月記』を通讀するの勞力は半ば省かれたであらうに。（大正十三年二月稿）

象徴的傾向

古今集その他王朝時代の撰集を讀みつゝ慊らぬふしは幾らでもあるが、その不滿足の主なる一つは彼等の表現が常に餘りに常識的な事である。餘りに實際的な事、功利的な事、餘りに意譯し散文譯し易い事である。然るに新古今集に到つて、獨り、はじめて、此の不滿足が癒やされて、如何にも近代的な感じをさせられるのである。何故であらうか。それは、此の撰集のみが、摩訶不思議にも象徵的表現を多分に持つてゐるからに他ならない。

定家も家隆も象徵といふ文字の存在は無論知らなかつた。象徵の觀念の意識も、たとひ幽玄有心を彼等の信條としてゐたにせよ、さまではつきりした物では無かつたらしい。むしろこれは、七百年後の我等が我等の意識する象徵的手法を彼等の藝術の中に見出さうとする鑑賞態度の問題なのである。從つて、象徵の定義に關する煩瑣な議論や安價な學問自慢などは此處では必要としない。象徵とは物心一如、外形卽內容ぐらゐの大まかな考を前提として置いてそれで十分なのだ。

かきくらし猶ふる里の雪の中に跡こそ見えね
春は來にけり　（宮内卿）
春の夜の夢のうきはしとだえして峯にわかる
ゝ横雲のそら　（定家）
梅の花あかぬ色香もむかしにておなじかたみ
の春の夜の月　（俊成女）
あけぼのや河瀬のなみのたかせ舟くだすか人
の袖の秋霧　（通光）
床の霜枕のこほり消えわびぬむすびもおかぬ
人のちぎりに　（定家）
われながら思ふか物をとばかりに袖にしぐる
ゝ庭のまつ風　（有家）

これ等の歌の好き嫌ひは各人の勝手である。唯、これ等の歌の表現方法が王朝時代の他の撰集のそれと異なつて如何に凡庸ならざるかを注目しなければならぬ。その或るものは對象と我と渾一して些の隙間を示さない。或るものは一を語つて他を現はす暗示的效果を持つ。さうして、そのすべては外形の價値が同時に內容の價値を構成してゐて意譯も散文譯も許さない。言ひ換へれば、作者の幻想が最後の表現形式を適確に見出だしてゐて、これ以外の如何なる言ひあらはしをも絕對に不可能ならしめてゐるのである。

風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢　（俊成女）

春宵そのもの丶優麗無比な象徵である事は一首を讀み下して見ればすぐわかる。乍併、此の歌の解釋を書くつもりに成つて論理的に扱はうとすると句の續きあひすら、時制（テンス）すら、意味そのものすら殆ど捕捉する事が出來なくなる。老哲學者の冷眼に視据

ゐられて可惜美女の姿（それは蛇の化身の）が消え失せてしまつたといふ希臘の古い物語のやうに、象徴的詩歌の美しい幻影は論理や散文のあらつぽい手が觸れる瞬間に霧消し了るのである。その昔私共が大學の講堂で小泉八雲先生の英詩評釋を聽講した時、私共は屢々先生の譯文の方が原詩よりも更に美しいもののやうに思はせられたのであつた。けれども、唯今此處に八雲先生の天才的な散文を借りて來たとしても俊成女の一首を奈何ともする事は出來まい。所謂外丹成卽內丹成也といふ芥舟學畫篇の說は此の和歌に完全に當てはまると思ふ。

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまがふ床の月影　（定家）

從來の註釋家はいづれも此の作を目して暮秋の夜に山禽のわびしさを想ひやつた趣向であると片付けてゐるが、私はさう思はない。さう思ひ度くない。結局「床の月影」と擱筆した瞬間に於いて作者は客觀と主觀との差別を卒然瓚失し去つたのである。霜

月の夜の牀上に見出だしたのは作者自身のわびしい姿であつた。其處に象徴の深さを觀る。私は此の歌をさういふやうに解釋しつゝ鑑賞し度いのである。

淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹くあらしかな　（通光）

笑止や〳〵、上の句の難澁さ加減には何人も皆めんくらはされてゐる。實のところ私みづからもわからないのである。撫で育てたをさな兒などの亡くなつたのを詠んだのであらうと「尾張の家苞」の著者は言つてゐるが、さすがに眼の著けどころが非凡である。當否は作者を地下に喚び起して訊かねばわからぬ次第であるけれども、假りに石原正明の想像する如き意味であつたとしたならば、通光の此の歌はなんといふ象徵的な、又なんといふ獨創的な表現であらう。千何百年の短歌史上、前にも後にも、凡そこれくらゐ衆愚を寄せ付けぬひとりぎめの歌が又と一首見出だし得るか。

あからさまな象徵的作品に就いてはこれ位にしておいて、餘論に移らう。

新古今集の歌を一概に難解とするのはまんざらの素人か初歩の歌よみの苦情に過ぎないのであるけれども、ほんたうに晦澁な作も間々無いでは無い。つまり餘情とか風致とかいふものを遍重したり叉は辭句の彫琢に凝り過ぎたりする結果なのであるが、そこに何處か象徴の匂ひの絡まつてゐる事も見逭してはならない。

をしむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋を恨みて　（俊成女）

色かはる露をば袖におきまよひうら枯れてゆく野べの秋かな　（おなじく）

新古今集の作者達は叉しば〳〵誇張的修辭法を使用するけれども「いかづちの上にいほりせすかも」と言つたやうな原始的のものとは質を異にしてゐる。それは必ず洗練しきつた高級の誇張であつて、現實感を害するやうな蕪雜なものでは無い。さうして其處にも亦たくみに象徴的手法の働いてゐる事を忘れてはならないのである。

大空は梅のにほひに霞みつゝくもりもはてぬ春の夜の月　（定家）

花さそふ比良の山かぜ吹きにけりこぎゆく舟の跡見ゆるまで　（宮内卿）

枕にも袖にも涙つららゐてむすばぬ夢をとふあらしかな　（良經）

山人の折る袖にほふ菊の露うち拂ふにも千世は經ぬべし　（俊成）

王朝時代の和歌の唯美的傾向がその末期に到つて加速度で爛熟し其處に新古今集の絢爛瑰麗な黄金期を現出したものなる事は事新しく言ふ迄も無いのであるが、爛熟の極早くも頽廢の色を集中隨處に見せてゐるのは亦止むを得ない運命と言はねばならぬ。多くの人々は新古今集を貶しめて全卷頽廢の歌と批難するのであるけれども、そ

れはしかし無縁の衆生が妄語の破戒であつて佛の尊嚴を奈何ともするものでは無い。

鶯の涙のつららうちとけて古巣ながらや春を
知るらむ　（惟明親王）
難波がた霞まぬ浪も霞みけりうつるもくもる
おぼろ月夜に　（具親）
大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に絶えてか
へる雁かね　（定家）

「大淀の」の一首の如きはまことに特異な手法であつて、頽廢的の藝術も此の程度の技巧を持つとしみじ〳〵蠱惑的な匂ひを湛へて來る。

斯うした觀方をして來ると新古今集は不思議に近代的な色彩を持つてゐるのである。（大正十三年五月稿）

象徴の意味

「清巖茶話」を披いてゐたら、面白い辭句に出つくはした。それは、定家の作に對して感想を述べた條に、

作者の歌はことはの外に影そひてなにとなく詠するに哀におほゆる也

と書いてゐる、その辭句なのである。「言葉の外に影添ひて」とは上手な事を言つた。日本人の言ひまはしにしては珍しい、簡潔にして含蓄の多い表現だと思ふ。筆者の正徹を地下に喚びさまして訊く迄もなく、私はそれを「象徴」の意味と解釋する。定家の歌に象徴を見出だしたとするならば、徹書記はそれだけで具眼の批評家たるに十分である。つい先頃「新古今集の象徴的傾向に就いて」といふ愚文を某誌に寄せた私は、只今「清巖茶話」の此の辭句に出つくはして、いささかてれくさいやうな心持になつ

てゐる。徹書記の寸鐵で見事になぐり殺されたやうな圖だ。
英吉利の或る有名な露西亞文學通の著述の中に「物がその本體よりも一段と大きな影を投げた場合にそれを象徴といふ」と書いてあつた事を私は想ひ出す。二十世紀の歐羅巴人の喋りさうな事を東方栗散邊土の一貧僧がとつくの昔に言つてしまつて居た。（大正十三年十二月稿）

集の切繼に就いて

掲題の「切繼」とは、選集が上進せられてから後に至つて、その中の歌を拔き挿し、入れ替へするをいふのである。新古今集の切繼は隨分頻繁に行はれたものらしい。畢竟、これは善く言へば、上は太上天皇から下は和歌所の人々に至るまで、自分達の勞作の華であり當年の文學の萃である新古今和歌集なるものに對して、非常の愛着を持

つた、その凝性の發露であると言へる。たとへば金持が庭園を造營してから、五年たつても十年たつても、樹を植ゑ替へ石を動かしてゐるのと同一の心理であらう。すなはち、元久二年三月奏覧の際の新古今集はなほ未成品であつた譯である。これに反して、此の切繼を惡く言へば、皮肉に視れば、當年の勢力家や野心家が自分達に都合のよい樣に選集の內容を改變させた結果であるとも言へる。尤もこれは餘り穿ち過ぎてゐるかも知れぬ。とにかく、選者の隨一定家さへ「又しても新古今の取沙汰ばかりだ、うんざりする」と言つた樣な口吻を何處かで漏らしてゐる。

私の心附いた範圍で、切繼の痕跡の著しいもの二つ三つを擧げて見ると、先づ、集中に「最勝四天王院の障子の歌」と詞書してある十三首は全部、後から挿し入れられたものだ。此十三首は集中でもかなり粒の揃つた出來榮えのもので、就中

野邊はいまだ淺香の沼に刈る草のかつみるままに茂る頃かな　（雅經）

吹く風の色こそ見えね高砂のをのへの松に秋
は來にけり（秀能）
鈴鹿川ふかき木の葉に日數へて山田の原の時
雨をぞ聞く（太上天皇）
あじろ木にいざよふ浪の音ふけてひとりや寢
ぬる宇治の橋姫（慈圓）
大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に絶えてか
へる雁がね（定家）

の如きは新古今集愛好者の何人にも眼の着くものであらう。此の最勝四天王院は洛東白河村に在つた御鳥羽院勅願寺であるが、その御堂の名所御障子の和歌を召されたのは承元元年初夏（新古今集奏覽の翌々年）の頃であつて、事の委曲は明月記に誌されてある。歌の作者は太上天皇、慈圓、通光、通具、定家、家隆、雅經、具親、有家、

秀能、俊成女の十一人、畫工は尊智、兼康、康俊、光時の四人であつた。此の名所和歌は各人から四十六首宛を召されたのであつて、定家の拾遺愚草中卷、家隆の壬二集中卷などにも出てゐる。

それから、建永元年七月（新古今集上進の翌年に當る）の三十番歌合の作が集中に收められてゐる。これも勿論追加したのである。それは集中には單に「和歌所歌合に云々」と詞書してあるのみで、一見してはわかりかねるが、左の九首である。

あけぬとて野べより山に入る鹿のあと吹き送る萩の下風　（通光）

秋の夜の月やを島のあまの原明方近き沖の釣舟　（家隆）

ふるさとも秋はゆふべを形見とて風のみ送る小野の篠原　（俊成女）

いたづらに立つや淺間の夕けぶり里とひかぬ
る遠近の山　（雅經）
都をば天つ空とはきかざりき何眺むらむ雲の
はたてを　（丹後）
草枕ゆふべの空を人とはばなきても告げよ初
雁の聲　（秀能）
和歌の浦に月の出潮のさすまゝに夜啼く鶴の
聲ぞ悲しき　（慈圓）
もしほくむ袖の月影おのづからよそにあかさ
ぬ須磨の浦人　（定家）
明石潟いろなき人の袖を見よすゞろに月も宿
るものかは　（秀能）

參考までに言ひ添へて置くが、群書類聚に「卿相侍臣歌合」と題して收められてゐるのは右の歌合の事である。

北面の歌人藤原秀能に就いて私は先年某誌に書いた事があるが、彼は頗る早熟の才であつて、新古今集上進の時には僅に二十二歳であつた。それでゐて集中に優秀な作をかなり多く見せてゐるのであるが、これは或は切繼の結果、後年の成熟期の作を挿し入れたのかも知れない。恁うした疑問も切繼の詮索の結果必然起つて來るのである。

挿し入れられた歌は或る程度まで詮索可能であるとしても、拔き取られた方の歌は永久の謎である。奏覽當時の、すなはち初稿の新古今集が奇蹟によつて我等の面前に現はれて來ない限り、それはわかりかねるのである。唯一つ、明白な例としては、鴨長明の無名抄に新古今戀歌の三秀逸の一つとして擧げられてゐる

かくてさは命や限り徒らに寢ぬ夜の月の影を

のみ見て

といふ歌が流布本に載つてゐない事だ。これは、長明ほどの達者に見抜かれた丈けの値あるか否かは別問題として、とにかく佳什には相違無い。これが後の切繼によつて省かれたとしたら、切繼の態度なるものも疑問に成つて來る。

切繼が奏覽の後幾年ぐらゐの間まで行はれたかは無論はつきりしない。唯、承元元年の十一月までは確かに行はれた事が、これも明月記から證據立てられる。その時、定家記して曰く、

依仰又切新古今、出入如反掌、以切繼爲事、於身無一分面目。（大正十三年十二月）

非個性的の藝術

萬葉集の遠い世はさて措き、延喜以降宮廷文學の和歌を鑑賞して最も物足らぬ感じ

がするのは、各作者の個性の概ね稀薄な事である。代々の特質は相當に窺はれるけれども、作者各自の個性はそれ〴〵の時代の光彩裡に紛れ去つて、譬へば銀河はほのぼのと眼に映ずるけれどもそれを凝り成せる各個の天體はいづれも唯一様に白く輝く星屑とのみしか見られないのと一般である。此の傾向は我が新古今時代に至つて極まり盡した觀がある。これは主として、和歌が徹底的に專門化し、一派一流が斯界を風靡し了つた事の當然の結果であると言へよう。

新古今時代の作物は和歌史上最も鮮明な、さうして最も特異な色彩を持つてゐる。新古今調なるものは、知るも知らぬも、好くも好かぬも、その儼然たる存在を拒否出來かねる種類のものであつて、萬葉調といつたやうな茫漠たる觀念とは質を異にしてゐる。萬葉の歌を「ますらをぶり」と道破したのは縣居大人の偉大な獨斷に過ぎぬのであつて、實は手弱女ぶりも手童ぶりも多分に夾雜してゐるのである。これに反して、新古今調といふと内容形式を通じた特異な或る物が何等の紛雜もなく眼に映り耳に響

いて來る。さうして愢かる濃厚な時代特色の裡に作者各自の個性は、勿論それが無いとは言はぬが、一見甄別し易からぬ程度の稀薄さにぼやけてしまつて居る。

定家家隆全盛期の和歌界には黨同伐異といふ程のものは跡を絕つた。少くとも表面にはそれが現はれてゐない。俊成父子の築き上げた風體に對して異を樹て得る程の人間は見當らなくなつた。六條家の才人有家さへも、二條家の流を追うて巧みに有心麗樣の歌を作り、かくして新古今集の撰者にも成りすました。顯昭の獨鈷も最早寂蓮の鎌首をうち据ゑる法力を失つてしまつた。金葉詞花の時代には散木弃歌集の俊賴と悅目抄の基俊とが、更に遡つては曾丹の輩が、たとひ規模小く粒は揃つてゐないにしても、ともかく歌壇に異を樹てゝ面々の個性を露骨に出してゐたので、其處に尠からぬ面白味があつたが、後鳥羽院の和歌所にはそれが無い。歌風は統一せられ、藝道が固定した。光彩陸離の美はあるけれども、對照の刺戟が失はれてしまつた。

愢う言ふと「それは君、新古今集は撰集であるから撰者の標準で統一せられたのだ」

と諸君は反駁するであらう。私は元久の勅撰集のみから演繹したのではない。拾遺愚草、壬二集、月清集、式子内親王集、その他當時のあらゆる家集を採つて見ても、物の觀方、感じ方、現はし方が概ね同一又は類似である。「山家集も金槐集もか」と諸君は反問する。西行は定家家隆の輩とは似ても似つかぬ人間のやうに昔から思はれてゐるが、大した見當違ひである。彼も亦新古今調の洗禮を受けた一歌僧に他ならない。鎌倉右大臣もその作の過半は當時の京方の模倣であるが、一部分は全く異なつた光彩を放ち、後世をしてこれこそ眞個の實朝と尊崇措く能はざらしめた。乍併、後世の尊崇する此の實朝は愚見によれば「時代の私生兒」であつて、問題の圈外に屬する。ともかく少々ばかり考へさせられるのは此の二人位であらう。その他十餘人の代表的歌人等は微に入り細を穿つ底の巧緻な研究によらざる限り、同一の類型に篏まつてゐるものとしか見えない。後鳥羽院御口傳、歌仙落書、その他の髓腦物に各作者の特色を一應評言してゐるやうであるけれども、多くは不徹底であり當つてゐもしない。

彼等の歌からは職業上の區別などは少しも現はれて來ない。例へば、北面の武士秀能も水無瀨の釣殿に召されては長袖者流の優麗な歌を上つた。僧俗の區別も見えてゐない。慈圓や寂蓮の厭世觀は時代思想の反映に過ぎぬのであつて、それは當時の何人の歌にも共通してゐる。甚しきに至つては作者の男女の區別さへ歌柄の上では大抵の場合判然しない。例へば、男子も美しい、纖細な、女性的技巧を弄び、婦人も漢詩めいた體言止の、緊張し切つた男性的作風を喜ぶ。

恁うした觀方で新古今集を通讀すると、大なる集團の、少しも擾亂されない、調子のよく揃つた合唱を聽く心持がする。時代特色の濃厚さと俊成父子の同化力の偉大さとは眞に國文學史上の驚異であらねばならぬ。（大正十四年一月稿）

本歌取りの技巧

本歌どりといふ事は新古今集に始まつたのでないのは勿論である。例へば清原元輔の

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山

浪越さじとは

が古今集の

君をおきてあだし心をわが持たば末の松山浪

も越えなむ

を本歌に取つたものなる事は何人でも承知してゐる。本歌どりの歌は堀河百首、金葉集、詞花集などにも決して尠くはない。唯此の本歌どりといふ一種の技巧が鎌倉初期の和歌界に至つて特別に流行したといふまでの事なのである。さらば何故に此の技巧がさまで流行するに至つたか。當時の風尚の一つとして、三十一文字の短詩形に成るべく複雜な內容を盛らうと試みた。言ひかへれば、含蓄を出來るだけ深くしようと

構へた。それが爲めに　いろ〳〵の苦心をしたのであつたが、その手段の一つとして本歌どりの技巧を盛んに利用したのであつた。畢竟、此の技巧に依る時は、おのれの歌とその本歌たる古歌とを併せて其處に複雜な幻想を描き出したり、或は少くとも一種の聯想を齎らす効果があるからである。もう一つの原因としては、當時の歌人等は著しく溫故知新の念に富んでゐた。故きを溫ねるの結果はやゝもすれば古歌の知識を誇りもし、弄ぶ事にもなる。其處からして本歌どりの歌がおのづから流行を來したのであらうと思ふ。

新古今集を繙くと開卷第一から本歌どりの作に逢著する。すなはち、

みよし野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は來にけり　（良經）

春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆらむ　（本歌、拾遺集）

一々調べてゆくと應接に遑なく、五月蠅いほど澤山に此の種の歌を發見する。少しばかり例示すれば、

大空は梅のにほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月　（定家）

照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき　（本歌、大江千里）

散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風のふく　（有家）

折りつれば袖こそにほへ梅の花ありとやここに鶯のなく　（本歌、古今集）

さくら花夢かうつつか白雲のたえてつれなき峰の春風　（家隆）

風ふけば峰にわかるる白雲の絶えてつれなき人の心か（本歌、古今集）

折ふしもうつればかへつ世の中の人のこころの花染の袖（俊成女）

色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（本歌、古今集）

夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜やふけぬらむゆきあひの空（慈圓）

夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへ涼しき風や吹くらむ（本歌、古今集）

昨日だに訪はむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり（家隆）

君すまばとはましものを津の國の生田の杜の
秋のはつ風　（本歌、詞花集）
ながむれば千々に物思ふ月にまたわが身一つ
の峰の松かぜ　（長明）
月みれば千々に物こそ悲しけれわが身ひとつ
の秋にはあらねど　（本歌、古今集）

本歌を一首取る事で滿足せず、二首までも取つたものさへある。實に凝つたものと言はねばならない。

谷河のうち出づる浪も聲たてつうぐひすさそ
へ春の山かぜ　（家隆）
谷風にとくる氷のひまごとにうち出づる浪や
春のはつ花　（本歌、古今集）

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる　（本歌、古今集）

深草の露のよすがをちぎりにて里をばかれず秋は來にけり　（良經）

年をへてすみこし宿を出でていなばいとど深草野とやなりなむ　（本歌、伊勢物語）

今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり　（本歌、伊勢物語）

此の「深草」の歌の本歌を二首と解釋する事に對しては異論が出るかも知らぬが、私はどうもさう思つてゐるのである。本歌を三首まで取つた例はさすがの新古今集にも見當らないやうだ。若し探し出した人があつたら、敎へて貰ひ度い。

本歌の出處としては古今集と伊勢物語とが最も多く、さうして前者では「末の松山

浪も越えなむ」の歌、後者では「月やあらぬ春や昔の」の歌が本歌として一番人氣があつたやうに見える。すなはち、此の二首から産み出された歌が最も多いのである。

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春や昔の月に問はばや　（通具）

里はあれて月やあらぬとうらみてもたれ淺茅生に衣うつらむ　（良經）

身のうさに月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞもり來る　（讃岐）

おもかげの霞める月ぞやどりける春や昔の袖のなみだに　（俊成女）

老の浪こえける身こそあはれなれ今年も今は末の松山　（寂蓮）

故郷にたのめし人も末の松まつらむ袖に浪や越すらむ　（家隆）

松山とちぎりし人はつれなくて袖こす浪に殘る月かげ　（定家）

萬葉集に本歌を仰いだ例はないではないが、餘り多くない。

笹の葉はみ山もさやにうちそよぎ氷れる霜を吹くあらしかな　（良經）

駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ　（定家）

源氏物語花宴の歌から取つたものに、

霜がれはそことも見えぬ草の原たれに問はまし秋の名殘を　（俊成女）

といふのがある。かうして觀ると、如何なる古典が當時の歌人達に最も多く親しまれたかもわかるやうに思はれる。

本歌どりの歌はこれを鑑賞する方の側から視て二種類に分つ事が出來る。その一つは、鑑賞者が本歌の存在を全く知らなかつたとしても十分にその歌を味得する事の出來る種類のものである。前掲諸作の大半は此の種のものであつて、その他にも

いそのかみふる野の櫻たが植ゑて春は忘れぬ形見なるらむ　（通具）

いそのかみふるの山邊の櫻花うゑけむ時を知る人ぞなき　（本歌、後撰集）

櫻さく遠山どりのしだり尾のなが〳〵し日もあかぬ色かな　（後鳥羽院）

足引の山鳥の尾のしだり尾のながき長夜をひ

とりかも寝む　（本歌、萬葉集）

いかにせむこぬ夜あまたの時鳥またじと思へばむらさめの空　（家隆）

頼めつつこぬ夜數多になりぬれば待たじと思ふぞまつにまされる　（本歌、拾遺集）

あじろ木にいざよふ浪の音ふけてひとりや寝ぬる宇治の橋姫　（慈圓）

さむしろに衣かたしき今宵もやわれを待つらむ宇治の橋姫　（本歌、古今集）

大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に絶えてかへる雁がね　（定家）

大淀の浦に生ふてふみるからに心はなぎぬか

たらはねども　（本歌、伊勢物語）

これ等の本歌の取り方は言はゞ極めて淡泊であつて、單に古歌をふまへて詠むか、又はその成語を引用してゐる丈けの程度である。隨つて、これ等の作はその本歌の知識を持たない讀者に對しても美しい幻影を無條件で見せてくれる。

その二つは、これに反して、本歌の豫備知識のない讀者には何の事やら全く理解しかねる種類のものである。

今日だにも庭を盛りとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ　（後鳥羽院）

今日來ずばあすは雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや　（本歌、伊勢物語）

時鳥なほうとまれぬ心かな汝が鳴く里のよそのゆふぐれ　（公經）

時鳥ながなく里の數多あればなほうとまれぬ
思ふものから　（本歌、古今集）
志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りていづ
る有明の月　（家隆）
さ夜ふくるままに汀や氷るらむ遠ざかりゆく
志賀の浦浪　（本歌、後拾遺集）
忘れなむまつとな告げそなかなかにいなばの
山の峰の秋風　（定家）
たち別れいなばの山の峰におふるまつとしき
かば今歸りこむ　（本歌、古今集）

これ等は本歌にすがりきつてゐるのであつて、獨立した歌の資格を持たない。歌と
いふよりも寧ろ古典の知識の遊戯である。

たへてやはおもひありともいかがせむ葎の宿の秋のゆふぐれ（雅經）

おもひあらば葎の宿に寢もしなむひしきものには袖をひづつも（本歌、伊勢物語）

これは「君は伊勢物語を諳記してゐますか」といふ質問であつて、歌ではないのである。

楫を絕え由良の湊による舟のたよりも知らぬ沖つしほ風（良經）

由良の門をわたる舟人かぢを絕えゆくへも知らぬ戀の道かな（本歌、曾禰好忠）

傪うなつてはます〳〵極端であつて、しかもそれが戀の歌だといふのだからなほさら驚く。

みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ浪の
下にくちぬる　（讃岐）
汐滿てば入りぬる磯の草なれや見らくすくな
く戀ふらくの多き　（本歌、萬葉集）

ひどく無理な本歌の取り方ではある。「汐滿てば」を省略してしまつて單に「入りぬる磯」では何の事だかわからぬではないか。畢竟、此の第二の種類の本歌どりの技巧は新古今集の頽廢的傾向の現はれの一つと觀なければならぬ。

本歌どりと同じ意匠であるが、漢詩をふまへて詠んだのもある。

昔おもふ草の庵のよるの雨に涙なそへそやま
ほととぎす　（俊成）

白氏文集の句を心に持つて作つたものなる事は言ふ迄もない。此の歌は古來秀歌の中に數へられてゐるが、心持が借りもので、詞が詩の成句の直譯で、私には何の感興

もそゝらない。恁ういふものが名歌のやうに解釋されては新古今集が迷惑する。

思ひ出でよたがかねごとの末ならむ昨日の雲のあとの山風　（家隆）

楚王の故事朝々暮々陽臺の下といへる事を妹背のかね言に用ひたりと石原正明が說いてゐるが、五月蠅い謎だ、歌ではない。（大正十四年四月稿）

頽廢的傾向

爛熟と腐敗、その間は唯一步である。滿開の牡丹のやうな新古今集はその花瓣の緣が黑ずんで來てゐる。萬葉集の原野から所謂六歌仙時代の庭園に移され、やがて勅撰集の溫室に入れられた和歌は、三百年の後その行くべき處に行き著いて、姸麗の華の間に毒々しい花をも咲き交ぜるやうになつた。新古今集嘩々の裡に頽廢の陰翳の宿つ

てゐるのを見まいとしても見ぬわけには行かないのである。

をしむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋を
恨みて　（俊成女）

よくも恁うひねくり廻したものだと思ふ。本居宣長をさへ困惑せしめた程の難解の作だ。乍併、美しい言葉の滑らかなつづけ工合から、或る物を感じさせる丈けの生命を持つてゐるので、ひたすらに頽廢とのみ貶しめ去るわけには行かぬかも知れぬ。

逢阪やこずゑの花を吹くからに嵐ぞ霞む關の
杉村　（宮内卿）

み吉野のたかねの櫻ちりにけり嵐もしろき春
の曙　（後鳥羽院）

櫻色の庭の春風あともなし訪はゞぞ人の雪と
だに見む　（定家）

宮內卿の此の歌は、從來學者の異口同音に稱揚する處であつて、私も決して惡作とは思つてゐないが、ともかく「嵐ぞ霞む」とか「嵐も白き」とか「櫻色の庭の春風」といふやうな造語に興味の中心を置いたこれ等の歌が、頽廢の傾向に足を踏み入れてゐる事だけは論議を要せぬ。

玉ゆらの露も涙もとどまらずなき人戀ふる宿の秋風 （定家）

亡母の舊宅を訪うて詠んだ歌であるが、言葉の珠玉の象眼細工が精巧に過ぎて、些の哀音なく、とても挽歌の心持はしないのである。これも從來秀歌のやうに言はれてゐるが、それだから何時までたつても新古今集の長短が衆俗に了得されないのだ。

春風の霞ふきとくたえまより亂れてなびく青柳の糸 （大輔）

白雲のたえまになびく青柳の葛城山に春風ぞ

ふく　（雅經）

「春風が霞を吹き解く」とか「雲のたえまに柳が靡く」とかいふのは　つまらぬ虛構であつて、寫實の眞で無いのはかまはぬとしても、藝術的の眞でもなければ、想像上の眞でもない。生命無き言葉のつづれの錦であつて、まさしく技巧の頽廢である。

かさねても涼しかりけり夏ごろもうすき袂に

やどる月影　（良經）

秋をへてあはれも露も深草の里とふものは鶉

なりけり　（慈圓）

風ふけばよそに鳴海の片おもひ思はぬ浪にな

く千鳥哉　（秀能）

きくやいかに上の空なる風だにもまつに音す

る習ひありとは　（宮內卿）

こぬ人を思ひたえたる庭の面の蓬が末ぞまつ
にまされる　（寂蓮）

技巧本位の和歌は竟に駄洒落や、地口に墮落してしまつた。頽廢以上である。

白栲の袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋
風ぞふく　（定家）

「身にしむ色の秋風」は色と音との感覺の交錯であつて、佛蘭西頽廢文學の色彩聽覺の類に屬するものであらう。定家は眞に味な處をやる。

わが戀は松を時雨の染めかねて眞葛が原に風
騒ぐなり　（慈圓）

須磨の蜑の袖に吹越す潮風のなるとはすれど
手にもたまらず　（定家）

かぎりあれば忍の山の麓にも落葉が上の露ぞ

色付く（通光）

山賤の麻のさ衣梭をあらみあはで月日や杉ふける庵（式子内親王）

わが戀は庭の村萩うらがれて人をも身をも秋の夕暮（寂蓮）

これ等の戀歌には、作者の感情は少しも注入されてゐない。おのれの戀を客觀視して、言葉の遊戯で冷やかにこれを叙述したり、形容したりしてゐる。此の時代の和歌の客觀的傾向は、尾上柴舟氏や津田左右吉氏などの縷説した通りであつて、花鳥風月の自然を觀相として描寫するに至つた事は古今集以來の理智的傾向に比べて遙かに詩的であるに相違ないのであるけれども、主觀そのものなる戀愛までを客觀的に取扱ふに至つては、抒情詩の和歌としては矛盾であると言はねばならぬ。私は新古今集の戀歌の特徴を認め、その特異な持味を稱美する者であるけれども、右に掲げた如き頽廢

的のものも亦少からぬ事を默過するわけには行かぬ。

此の時代に特に流行した本歌どりの歌も亦頽廢的傾向の一つの現はれと見られぬ事はない。就中、

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りて出づる有明の月　（家隆）

たへてやはおもひありともいかゞせむ葎の宿の秋の夕暮　（雅經）

梶を絶え由良の湊による舟のたよりも知らぬ沖つ汐風　（良經）

の如く本歌にすがりきつて獨立の意味を持たぬものに至つては、之を病的産物と言はずして何であらう。

宮廷生活の溫室に入れられた和歌は、早晩かくの如き糜爛の花を見せねばならぬの

であつたが、又同時に鎌倉初期の無氣力、沈滯、厭世、獨善の頽廢的世相が文藝の上にその陰翳を投げかけたものとも觀られるのである。（大正十五年一月稿）

擬人的傾向その他

鳥や獸は勿論、山川草木乃至風月等の非情の自然物を作者自身と同樣の有心者と見做し、人間扱ひして諷詠する事は大倭歌の太初、萬葉集の時代から有つた事である。平安朝に入り六歌仙や古今集の人々にも漸次此の手法が普遍的になつて來た。これ等古き世の歌人達の擬人法はさすがに稚拙で、多くは自然の童心の發露と言つた程度のものであつた。それが追々と技巧的になり、その傾向は新古今時代に至つて極まつた觀がある。當時の歌人等は好んで此の擬人法を使用した。而かもその使用法が頗る知的、巧緻、複雜な場合が多い。例示して述べよう。

歸る雁今はのこころ有明に月と花との名こそ惜しけれ　（良經）

花月の姿のあはれを盡くした春夜である。それが曉方になると雁は心無くも見捨て立つて行く。花と月との名譽が損なはれる心地して惜しい、といふ意味である。此の場合、雁を有情の人間扱ひしたのは勿論、非常の花月までも擬人したればこそ、それらの名譽を云々してゐるのである。春曉歸雁の景を心眼に思ひ浮べつつ、作者の主觀を對象物へ投入してゐるので、純な叙景で無い事は言ふまでも無い。

梅が香に昔を問へば春の月答へぬ影ぞ袖にうつれる　（家隆）

本歌の「月やあらぬ」は情景一致の作であるが、これは月を擬人し、而かもそれに答へぬと作者自身の主觀を代辯させてゐるのだ。

秋風に思ひ亂るる刈萱のこやの寐覺に小鹿な

くなり　（家長）

思ひ亂れるのは實は刈萱では無くて作者自身の心なのである。

次に、純然たる叙景の歌までも擬人法で表現する事がある。

梢まで砧の音を誘ひ來てころも打つなり庭の

松風　（慈圓）

大淀の月にうらみてかへる浪松はつらくもあ

らし吹く夜に　（有家）

松風が庭さきで擣衣するといふ奇拔な擬人だ。「大淀の」は月夜の渚に寄せかへる波

浪と岸の松原に吹きすさぶ嵐とを結合した叙景で、「大淀の松はつらくもあらなくにう

らみてのみもかへる浪かな」の古歌を本歌としてゐる。月と松とが擬人されてゐるの

だ。

さらに、此の手法の最も微妙にして複雜なるものは次の種類である。

咲きにけり野べ分けそむるよそ目より蟲の音
見するる秋萩の花　（定家）
千里まで一つに見えし冬の色を垣根に殘す春
の雪かな　（家隆）
單に「さびしい」と叙すべき處を對象物が「さびしがらせる」と工夫し「うらがへる」を「うらがへす」と詠み「見える」を「見せる」とひねるのが一つの癖であつた。此の家隆の歌などは素直に詠むならば「冬の色の」「垣根に殘る」とすればよいのであるが、それでは滿足出來なかつた。對象の春雪を能働の本躰とし、すなはち擬人せねば滿足出來なかつた。
右僅少の例でもわかる通り、新古今歌人の擬人法は古代の童心發露程度のもので無く、所謂心深く幽玄にする所以の一手段として苦心した結果に相違無い。
擬人法のついでに、氣付いた事を追記する。當時の修辭上の技巧は萬葉古今以降の

それの一切を網羅した觀がある。枕詞、序歌、比喩、緣語、懸詞等を彼等が如何に驅使したかに就いては先人等が既に論じてゐるから私は省く。唯ここに氣付くのは彼等の疊音法の使用である。西歐の詩には頭韻を踏む手法があるが、大倭歌のは頭音を列ねるのである。

あれわたるあきの庭こそあはれなれましてきえなむ露の夕暮　（俊成）

それから普通の疊音法としては、

なにとなく物ぞかなしきながむればあなあぢきなの月の光や　（慈圓）

なれなれて見しは名殘の春ぞともなど白河のはなの下蔭　（雅經）

これ等は當時の歌人として自覺的にやつたのか否かは疑問であるけれども、音調の

上の效果は爭はれない。（大正十五年一月稿）

絢爛と枯淡と

頼むぞよ靈山海會釋迦大師たれゆゑとてか世
　に出で給ふ

最澄の「阿耨多羅」や實朝の「八大龍王」を聯想せしめる此の古拙な歌は慈鎭晩年の作厭離歌百首の中の一首である。

高砂のをのへの鹿の鳴かぬ日もつもりはてぬ
　る松の白雪

これは家隆六十二歲の時、仁和寺道助法親王會五十首の中の妙品である。美辭の連續に眩惑されないで、その底に潛める枯淡さを耽味して見るがよい。

知らざりき山より高きよはひまで春の霞の立つを見むとは

いたづらに松の雪こそ積るらめわがふみわけしあけぼのの山

誰ばかり山路をわけてとひ來らむまだ夜は深き雪のけしきに

谷ごしの眞柴の軒の夕煙よそめばかりはすみうからじや

吹きはらふ紅葉の上の霧霽れて嶺たしかなるあらし山かな

定家も七十一歳の關白左大臣家百首に至つてここまで澁く寂びて來たのであつた。「嶺たしかなる」の如きは上乘の水墨畫を髣髴せしめる表現と言つてよからう。

新古今集や六家集の歌を單に絢爛瑰麗といふやうな詞で形容出來ると思ふのは淺はかである。眼を開いてこれ等の集を讀む人ならば、必ずや其處に際立つた明暗の交錯を視、極めて美しいもののみの持つ寂しみを感じ、時として或は奇觚の極の平淡をさへ見出すであらう。くりかへして言ふが、洗練された美辭の連續とのみ考へるは此の時代の和歌の核心まで觸れてゐない觀察である。

鎌倉初期の文學が、世相の反映として、幽寂蕭森の一面を包藏してゐる事は私がここに更めて述べる迄も無い。新古今集の歌人達は初學入門の際から此の種の歌を作る事に馴らされてゐた。例へば定家の習作時代の歌の中にも、

秋の夜は雲路をわくる雁がねのあとかたもなく物ぞ悲しき

水の上に思ひなすこそはかなけれやがて消ゆるを泡と見ながら

いづこにて風をも世をもうらむまじ吉野の奥も花は散るなり

霜さゆるあしたの原の冬がれに一花さける倭なでしこ

おのづからあればある世にながらへて惜しむと人に見えぬべきかな

又は攝關家の良經が公達の時の歌にさへ、

野か山かはるかに遠き鹿の音を秋の寢覺にききあかしつつ

おのづからたよりに聞けば都にはわが住む谷を知る人もなし

百首歌や題詠が流行して、雙鬢の霜と成つた後でさへ水無瀨殿戀十五首歌合といつ

た類の遊戯に沒頭した人々の事であるから、二十歲前後で山林逸趣の歌を作つたとて不思議は無いと言へば言へよう。乍併、一概にこれを遊戯や模倣と片付けてしまへないのは、前述の如く、その背後に時代の相が反映してゐるからである。當年の和歌界の標語であつた「幽玄」とか「有心」とかいふ觀念の中にも清醇淡雅の心持を大切にする主旨がおのづから包藏されてゐるでは無いか。

かうして、初學入門の際から重厚な絢爛味の傍に瀟洒な枯淡味を加減する事に馴らされて來た人々は、新古今集に至つて竟にあの明暗交錯した特異な持味を出し切つたのである。

さて此の枯淡の一面が元久以後に於いて如何なる消長を遂げたかは私に取つて興味ある問題の一つと成つた。新古今集の後には反動として一般に平明の風體が尙ばれるやうになつたと學者達は言ふ。定家の著と俗に傳へらるる愚秘抄の中にも「歌をよむに大切の事あり、初心の時は淺より深に案じ入るべし、己れ達の時は深より淺に案じ

出づべきなり、これこそ年來の練磨のしるしにわづかに探り得て侍り」といふ頗る玩味に値した一節がある。ここまで悟入した定家であつたならば拾遺愚草の後半は平明枯淡な作で埋められて居らねばならぬ。乍併ありていに言ふと、私の期待は大き過ぎて半ば裏切られてしまつた。

定家一統の人々の歌の調子や色合は、元久から建保に、承久から貞永に、彼等の生涯を通じてさまで變化しなかつたと言つても大體間違ひは無からうと思ふ。唯さすがに時としては奇峭の極の平淡を見せてくれる事があるので、それを見逃がしてはならぬと私は强調するのである。例へば、此の一篇の書き出しに採錄した數首以外にも、彼等の晩年期の作の中から左の如きものを往々にして見出す事が出來る。

今はわれ都の春を厭ひ出でてみ山の秋にすむ心かな

人を見るもわが身を見るもこはいかに南無あ

みだ佛南無あみだ佛
あはれにも葉末こまかにさわぐなり籬の竹の
雨の夕ぐれ　（以上慈鎭）
水無瀨川氷をふみてつかへこしわが老らくの
道は絕えにき
たらちねの宿を隔てて桂川昔はたえず渡りし
をはや　（以上家隆）
春はただ霞むばかりの山のはにあかつきかけ
て月いづるころ
秋の月河音すみてあかす夜にをちかた人の誰
をとふらむ
風寒みみほの浦べをこぐ舟に山の木の葉のき
ほひがほなる

老らくは雪のうちにぞ思ひしるとふ人もなし

ゆく方もなし　（以上定家）

「文采絢爛、筆鋒崢嶸、漸く老い、漸く熟し、乃ち平淡に至る、平淡は實に絢爛の極に非ずや」と蘇東坡が言つたといふ事を、私は近刊の「闢雪隨筆」によつて敎へられた。それから又「外枯れて內に膏す」といふ支那の言葉のある事をもおなじ隨筆で知つた。さうして私はこれ等の金言を定家達の作歌道程に結びつけて深く考へさせられたのであつた。彼等が時として表出し來る枯淡味は絢爛の極のそれであり、外枯れて內に膏するものであつて、其處に言ひ盡くされぬ妙趣がある。それは後世の隱士等が拙惡な和易境でもなければ、現代の歌よみ共が一足飛びの平明調でも無い。それにしても六家集の巨匠達が深ょり淺に案じ入つた歌を餘り多く作らなかつた事は新古今集研究者なる私一人のうらみなるのみならず、國文學史上の一大損失であつたと言はねばならぬ。（大正十五年一月稿）

第二篇　新古今時代の諸歌人

時代の私生兒實朝

ここに私生兒といふのは侮辱の意味では無い。沙翁は、自分が私生兒であつたわけでも無からうが、屢々私生兒（バスタード）の爲めに氣焰を吐いた。例を擧げれば史劇「ジョン王」の主人公は英雄的私生兒である。「リヤ王」第一幕第二場でグロースター伯のわたくし子エドマンドは自己の身分を次のやうに讚美してゐる。

大自然よ、汝は乃公の神様だ。……何故劣腹だ？何が劣るんだ？　四肢五體に何の缺點も無く、心も高尙、姿や形も本妻腹同樣正しく生れついてゐるぢやないか？何で彼奴等はおれ達に劣腹などといふ烙印を押しやあがるんだ？　劣腹？　劣腹だ？何が劣る？　面白くもない、陳腐な、饜果てた床の中で、半分眠（ね）ながら拔作種を製造するのに比べりやあ、人目を竊み、好きこのんで製（こしら）へた子の方が、種が遙かに豐

富でもあり猛烈でもあるべき筈だ。……長びるぞ、出世するぞ。神様、どうか劣腹の肩を持つて下さい。

斯うなると私生兒も偉いもので、肩身の廣い事である。私がここで實朝を「時代の私生兒」と呼ぶのは、沙翁的私生兒觀の上から言ふのだと取る人は取つてもいゝ。偉い偉くないは今日私の實朝觀に取つて問題では無いからだ。さて鎌倉右大臣が時代の私生兒たる所以は如何に?。

古今集に始まつた王朝時代の和歌は八代集の終りなる新古今集に到つてその行くべき處に行き盡した觀がある。すなはち理智から出發して觀相に、冷索な描寫から情景一致に、それが屢々物心一如の象徵に、修辭及び技巧の單純から複雜の極致に、稀薄な色彩から廢頽のおそれあるまでの絢爛に、表面を浮動する感傷から裏面に瀰漫する寂しさへと到達したのである。

さてこの新古今時代といふ美しい母の胎內から出た美しい子供達が大勢ある。俊成、

定家、家隆、後鳥羽院、式子内親王、良經、慈圓、寂蓮、通具、通光、宮内卿、俊成女、有家、丹後、讃岐、雅經、秀能等がそれである。いささか變つてゐると思はれる西行、長明も能く視ればまがひも無く同じ母の子供達だ。そこで、どう見ても變つた顔した子供は萬葉模倣の鎌倉右大臣一人であるから、これを「時代の私生兒」と私が烙印するのである。繰り返していふ、ここに私生兒とは侮辱の意味では無い。俊成、定家、家隆、西行の面々はエドマンドの所謂陳腐な、腰果てた床の中で、半分眠りながら製造された拔作種であつて、實朝だけが遙かに豐富でもあり猛烈でもあるべき筈の種からこしらへられた健全な子供であるのかも知れない。

實朝も二十二歳以前には、言ひ換へれば定家から萬葉集を贈つてもらつた建保元年より以前には、時代の風體の歌ばかりを作つてゐたものに相違ない。私は數字的に調べた事はないけれども、金槐集の歌の大半は新古今風のものであると言へよう。乍併、我等が歌人としての實朝を檢討するに當つては、二十二歳以後の彼れを對象とすれば

足りるのである。それで、私は彼れを萬葉模倣の歌人と無條件に言ふ。

古今集以來の歌人の中に實朝と同じく「時代の私生兒」といふ烙印を押すに値する者が他にあるかと言ふに、どうも無いやうだ。新古今時代といふ大交響樂の眞ん中で他の樂器とはまるきり調子の合はぬ喇叭を平氣で吹き鳴らした實朝は、何と言つても、その私生兒振りに於いて古今獨步である。曾丹の好忠、「させもが露」の基俊、散木弃歌集の俊頼などが頭に浮んで來るけれども、畢竟彼等は彼等の時代の本妻腹であつて、私生兒たる名譽を荷ふに値しない。例へば彼等はその多くの兄妹達と比べて少々鼻が曲つたり吻が尖つたりしてゐる位のもので、すね者か新派とかいふ程度の者共に過ぎぬ。(大正十一年四月稿)

良經と萬葉集

佐々木信綱先生著「和歌百話」の第三十章に後京極良經と實朝との比較を述べられてあるのが私の眼にとまつた。

良經は千載集に左近中將良經として五首、新古今集に攝政太政大臣として七十八首出てゐる人である。この人は九條關白兼實の次男であつて忠通の孫にあたるのだが、建永元年三月（すなはち新古今集の成つた元久二年三月から頂度一箇年目）に暗殺せられた。齡三十八。刺客は北條氏の廻し者だとも傳へられてゐる。良經といふは私が歌を初めて以來最もなつかしい名の一つである。彼が如何に華やかで又聰く强い人であつたかはその歌柄から大方推定出來ると思ふ。

佐々木先生はこの良經と實朝との間に相似點を見出だされた。名門出の秀れた歌人なる事、刺客の毒刄で生涯を短く終つた事は先生の着眼せられた如く如何にも共通の事實であるが、更に先生は次の如く言つてゐられる。「彼は實朝と同じく萬葉集を崇んだ點に於いて當時の歌人と異なつてゐる。併し實朝の如く萬葉の歌風を消化し我がも

のとして萬葉風の歌をよみ出づるといふには至らなかつた。」彼は、私の觀る處では、最も濃厚に時代相でいろどられた、本妻腹のちやきちやきである。自覺し且つ徹底した「時代の子」である。萬葉の歌風を消化したり、況して萬葉風の歌をよみ出したりする事は良經の念頭には塵ほども無かつたに相違ない。彼がもう三十年生き長らへたと假定しても、彼は愈新古今體に徹底するのみで、萬葉模倣などの時代錯誤はしなかつたに相違ない。

併し乍ら良經も、定家その他の歌人等と同じやうに、萬葉集を讀み且つ崇んだには相違なからう。すなはち良經が萬葉集を崇んだといふ事實に就いては佐々木先生の權威に絕對に信賴してゐる。私がこゝに敢へて言はんとするのは、或る物を崇ぶ事とその或る物に成らうと意欲する事とは往々にして（或は大抵の場合に）別個のものであるといふことである。私は新古今を愛し且つ崇ぶけれども、今日まさかその通りに成つたり眞似したりしようとは意欲しない。良經は萬葉を崇んだでもあらうが、萬葉風

に成らうとは意欲しなかつた。

私のこの良經觀をみづから檢討する爲めに久しぶりで式部史生秋篠月淸集を繰りかへして見た。壹千六百首の歌の中で萬葉を聯想せしめる作は僅に次の數首ぐらゐであつて十指を屈するに足らない。即ち、

かづらきの峯の白雲かをるなりたかまの山の花ざかりかも

ふるき跡ぞ霞みはてぬる高圓の尾上の宮の春のあけぼの

誰を今日まつとはなくて山かげや花のしづくに立ちぞぬれぬる

ともしするは山しげ山里とほみほぐしもつきぬ明けぬこの夜は

わきもこが宿のさゆりの花かづらながき日くらしかけて凉まむ

山もとのあけのそぼ舟ほの〴〵とこぎいづる沖は霧こめてけり

さゝの葉はみ山もさやにうちそよぎ氷れる霜をふく嵐かな

草ふかき夏野わけゆくさを鹿のねをこそたてね露ぞこぼるゝ

きり〴〵すなくや霜夜のさむしろに衣かたしき一人かも寐む

右の中でも「ふるき跡ぞ」「誰を今日」「山もとの」「さゝの葉は」の各首は單に萬葉の歌の物や詞を借りて來たといふだけで、歌そのものには萬葉らしい處は少しも無い。

「かづらきの」「わきもこが」「草ふかき」の三首は歌全體としてちよつと萬葉らしく見えるけれども、讀み返して見るととても萬葉では無い。「きり〴〵す」は下句こそ萬葉の歌そのまゝであるけれども、上句が如何に新古今であつて、さうして歌全體の感じが如何に新古今に成つてゐるかを知るがいゝ。してみると先づ萬葉らしい歌は「ともしする」の一首だけである。萬葉集を一度も讀まず、まして崇びもしない歌人でも、一生のうちにはこの位の微量な萬葉影響は受け得るのである。要するに良經は歌を作るに當つては自己と自己の時代とを強く意識してゐた丈けであつて、古歌の模倣などは眼中に無かつた。

在滿はその「國歌八論」の準則論に於いて良經を賞し、宣長もその「八論評」の中で略同意を表してゐるが、この兩先哲の感服した意味と私の良經觀とは必ずしも一致しないらしい。言ひ度い事もあるけれども、拙文の題目と離れすぎるから擱筆する。

（大正十一年四月稿）

山家集の價値

一

西行法師の山家集と言へば知るも知らぬも和歌の聖典の如く心得てゐる。けれどもこれを通讀するには幾度か吹呿を怺へなければならない。ただ言か、若しくは出來そこなひの新古今流の、低調糢糊な凡作が山家集の過半を占めてゐるのは事實である。尤もこれは我が西行ばかりでは無い。定家の拾遺愚草に就いても、慈鎭の拾玉集に就いても乃至古今あらゆる歌人の家集に就いても同じ事である。中古傳說の錬金家で無い限り一切を黃金化するわけにはいかない。黃金と土塊とをしかと篩ひ別けて適當な價値判斷を下す事が吾人の役目なのである。斯う考へるものゝ、いざ山家集を繙いて見ると如何しても吹呿を怺へきれない場合が多い。

二

自然と西行——山家集の批判に當つて何人も先づ逢着するのはこの問題である。さうして、西行と言へば直ちに宗祇と芭蕉とを聯想し、自然詩人若しくは旅行詩人たる事に於いて彼れの特異の生命を見出さうとするのが普通の説であるが、私はこれに反對する。少くとも、この種の説を甚しく修正する必要があると思ふ。芭蕉に取つて自然は彼れの生命そのものであつたが、西行に取つては自然はその主觀の背景たるに過ぎなかつた。私の觀るところでは、西行は芭蕉よりもむしろ近松に比ぶべきものである。西行と近松——一見突飛な比べ物のやうであるが左様で無い。悟つたやうでゐて、實は大の苦勞性で、情に即して、さうして自然を使つて情を表はさうとした態度は西行近松に共通の重要な事實である。この明らかな相似點を、抒情詩人であり戯曲家であることとの差別に依つて否定してはならない。山川風月は西行の無二の友であつたや

うであるが、彼は案外にこれ等のものを善く眺めてはゐない。自然に對する彼れの凝視は澄徹を缺き、觀照は燃燒の力に乏しかつた。その數多い羈旅の作も大方は題詠式か、さもなくば實にたわいもない卽興的のもので、到底彼を旅行歌人として裏書する程度のもので無い。

はひつたひ折らで躑躅を手にぞ取るさかしき山のとり所には

瀨戸わたる棚なし小舟心せよ霰みだるるしまき橫ぎる

淡路島せとのなごろは高くともこの潮わだに押し渡らばや

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

山家集の中でこの程度に實感の滲み出てゐる旅行歌を十首と探し出す事は困難である。

斯くは言ふものゝ、これも亦我が西行一人の短所では無い。定家も家隆も慈鎭も寂蓮も、乃至古今あらゆる歌人も、その自然觀は大抵似たり寄つたりのものである。我が國には眞個の自然歌人といふものは古來無かつたと言つても誣ひまいと思ふ。

三

西行の無常觀も亦案外に淺薄である。僧侶たる彼に對して凡俗とはいさゝか異なつたものを求めようとするけれども、何物も見當らない。彼れの歌には僧侶としての深い哲理を求め得ない。

何事も變りのみゆく世の中に同じ影にてすめる月かな

年月をいかでわが身に送りけむ昨日の人も今日は無き世に

ささがにの絲に貫く露の玉をかけて飾れる世にこそありけれ

汀ちかく引きよせらるる大綱にいくせのものの命こもれり

惡い歌では無けれども、この類の無常觀ならば敢へて我が西行を待つまでもない。

新古今時代の他の歌人達の題詠の釋敎歌を覗けば幾らでも出て來る。

今さらに春を忘るる花もあらじやすく待ちつつけふも暮らさむ

散るを見て歸る心やさくら花昔にかはるしるしなるらむ

うき世にはとどめおかじと春風の散らすは花
を惜むなりけり
くもりなき鏡の上にゐる塵を目に立てて見る
世と思はばや

彼れの正覺もこの範圍を出でない。さうしてこれは釋阿の俊成や明靜の定家の悟入と軒輊し易からざる程度のものである。遯世解說といふも身を全うする手段に外ならす、圓頂緇衣の人となるのも尋常茶飯事に過ぎなかつた世相の下に於いて、これ以上の了得を要求するのは無理な事であらう。それから山家集雜の部に寂然、成通、爲業、兵衞局、堀川等との贈答歌が澤山に載せられてゐる。これ等の歌の上に西行の人間觀の閃めきを覗ようとするけれども、これ亦徒勞である。よくもこれだけ平々凡々な應酬が出來たものだと驚かされるに過ぎない。

歌僧西行とか西行法師とか言ふ呼稱は歌人としての彼を檢討する上に於いて不適當

である。西行の僧侶たる事は彼れの歌を幾何も深からしめてゐない。言ひ換へれば、西行も俊成も定家も家隆も彼等の無常觀乃至波羅密の深さ高さに於いて差別は無い。であるから私は彼を單に西行と呼び度い。或は、近頃流行の「人間」といふ言葉を冠して、人間西行と呼ぶのもいゝ。

四

私は山家集の作者を自然詩人とする事も、旅行歌人とする事も、歌僧とする事も否定し去つた。然らば何處に價値を見出さうとするか。その一は深く湛へられた寂寥味、その二は現實に對するやるせない愛着、その三は有情滑稽(ユーモアー)、その四は修辭の平易率直、その五は自然のありのまゝの描出である。さうして、これ等五個の特質を綜合して其處に作者その人のあり〳〵と見られる事が、山家集の價値の總計算である。以下節を分つて述べよう。

五

鈴鹿山うき世をよそにふり捨てていかになりゆく我が身なるらむ

いづくにもすまれずば唯すまであらむ柴の庵のしばしなる世に

ここを又我が住みうくてうかれいなば松は獨りにならむとすらむ

ひとり住む片山かげの友なれやあらしに晴るる冬の夜の月

あらし吹く峯の木の葉にともなひていづちうかるる心なるらむ

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵をな
らべむ冬の山里
誰すみてあはれ知るらむ山里の雨ふりすさぶ
ゆふぐれの空
とふ人も思ひたえたる山里のさびしさ無くば
住みうからまし
谷のとに獨りぞ松も立てりけるわれのみ友は
なきかと思へば
霜さゆる庭の木の葉をふみわけて月は見るや
ととふ人もがな
霰にぞものめかしくは聞えける枯れたる楢の
柴のおち葉は

これ等の歌の持つ寂寥味は眞に特異なものである。五百年の後唯一の知己芭蕉に依つて見出されたのも此の寂寥味の價値であるのは言ふまでも無い。新古今時代の和歌の本質は「絢爛裏の寂しさ」であるとは私のかねてから主張する處である。極めて美しいものゝ裡に瀰漫した寂滅の觀念――これがすなはち定家家隆等の作品の最佳境である。ところが我が西行の歌の佳境はその「寂び」を絢爛なものゝ裡に求めずして、直ちに索寞蕭條なものゝ中に見出してゐる。彼れの寂寥味はせつぱ詰つて表面まで押し出されてゐる。底の深みに沈潜するの餘裕を持たない。例へば定家等の寂しさは春の寂しさであるが、西行のは冬のものである。

六

斯くまでに閑寂を耽味した彼も、なほ一面に於いて、厭離した筈の現實に對し終生愛着の絆を斷ち得ず、迷悟の間から折にふれつゝ遣る瀨無い哀吟を吐露したのである。

すなはち、花鳥風月の自然に對しては、

うき身にてきくもをしきは鶯の霞にむせぶあ
けぼのの聲

柴の庵によるよる梅のにほひ來てやさしき方
もあるすまひかな

花見ればそのいはれとはなけれども心のうち
ぞ苦しかりける

佛にはさくらの花をたてまつれ我が後の世を
人とぶらはば

ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別れ
こそ悲しかりけれ

うちつけに又來む秋のこよひまで月ゆゑをし

くなる命かな
心をば見る人ごとに苦しめて何かは月のとり
どころなる

これ等を單なる詠嘆と觀過してはならぬ。普通謂ふところの風流心の發露とのみは見られぬほどねつく〵、粘り强く、主觀の味の勝つたものである。自然を自然として如實に觀察しその情趣を味はふといふ態度で無い事はいふ迄もない。自然は西行に取つて背景に過ぎないと前に述べたのも此の意味である。芭蕉は「虛栗」の跋の中で「侘と風雅のその常にあらぬは西行の山家を尋ねて人の拾はぬ蝕栗なり」と書いてゐる。芭蕉に喰つてかゝるのもをこがましいが、自然に對する西行の態度を風雅といふ概念で片付けるのは私は與しない。思ふに、風雅といふは人間社會から高脫した花月の天地に心遊するといふ事であらう。

いそぎ起きて庭の小草の露ふまむやさしき數

に人や思ふと（七夕）

この類及びこれ以下の數多の凡作は成る程風雅の所産として片付けて然るべきであるが、此の節の書き出しに引證した類の歌は謂はば命がけの、轉輾反側の、わめいてこそ居ないが苦しみの餘りの溜息である。人間社會を超脱し切れない人間の聲である。

もろともに影を並ぶる人もあれや月のもりくる笹の庵に

何事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとはしき

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ

月見ばとちぎりて出でし故郷の人もやこよひ

袖ぬらすらむ

數ならぬ身にも心のありがほにうかれては又

歸り來にけり

とめ來かし梅さかりなる我が宿をうときも人

はをりにこそよれ

山里は人來させじと思はねど問はるゝことぞ

うとくなりゆく

出離の身でありながら、世間とみづからとに對して斯くまでに彼は愛着してゐる。生一本の道を歩いた人に對しては敬虔の念を起し得るけれども、親しみを持ちにくい。殊に近代人の我々は、迷悟の間にさまよひつゝ結論を見出さない底の、懷疑的の藝術に對して强い引力を感ずる。西行の歌が今日なほ我々の胸奧に訴へる永遠性を持つ所以は眞に其處に在るのである。悟り澄ました行道者の文學は、少くとも私に取つ

ては別世界のものであらねばならぬ。

七

悲哀の側には諧謔のレリーフが欲しい。沙翁の悲劇には必ず道化があしらはれる。それ程の意味があるわけでも有るまいが、我が西行の口から折々左のやうな歌を聴く事の出來るのはうれしい事である。

小山田の庵ちかく鳴く鹿の音におどろかされて驚かすかな

初花のひらけはじむる梢よりそばえて風のわたるなるかな

ただは落ちで枝をつたへる霰かなつぼめる花の散る心地して

大方の野べの露にはしをるれど我が涙なき女郎花かな

里なるるたそがれ時の郭公きかず顔にて又名のらせむ

中々にとき〴〵雲のかかるこそ月をもてなすかぎなりけれ

古今集の俳諧歌のやうな空疎なもので無く、さりとて又後世の宗鑑守武宗因等の俳諧の如き卑俗なものでも無く、まことに細やかな静かな、上品な有情滑稽(ユーモア)である。當時の堂上歌人の持たなかつた此の一要素を我が山家集から見落してはならない。

八

修辭の平易率直な歌の多い事も亦山家集の一特質だと言へよう。桐火桶の俊成の如

く構へて自覺的の作歌態度を取つた當時の歌人達の中に在つて、我が西行だけは大抵の場合さら〳〵と口に任せて詠んだのである。(凡作の多かつたのも一つには此のゆゑであらう。)縁行道して嘯き詠むと愚祕抄に書いてゐる。この平易率直な修辭法に依つて、彼は稚拙な、のん氣な、淡い、しかも特異な情趣の歌を尠からず見せてゐる。

吉野山さくらが枝に雪ちりて花おそげなる年にもあるかな

菫さくよこ野のつばな生ひぬればおもひおもひに人かよふなり

春になる櫻が枝は何となく花なけれどもむつまじきかな

道のべの清水ながるる柳かげしばしとてこそたちどまりつれ

おぼつかな秋はいかなる故のあればすずろに
ものの悲しかるらむ
さらぬだに聲よわりにし松蟲の秋の末にはき
きもわかれず
はら〱とおつる涙ぞあはれなるたまらずも
のの悲しかるべし
後世の良寛などは西行の此の一面のみから暗示をうけたのに相違ない。
夜もすがらをしげなく吹く嵐かなわざと時雨
のそむる紅葉を
秋の月いざよふ山の端のみかは雲の絶間もま
たれやはせぬ
あだにちるさこそ梢の花ならめ少しは殘せ春

の山かせ

こゝろ待つたゞ一筋に今よりは花を惜まで風をいとはむ

夕立の晴るれば月ぞやどりける玉ゆり据うる蓮の浮葉に

斯様な平語や奇抜な句法の取入れも、彼れの自由な修辭法の自然の擴大として馴致されたものなのであるから、少しもいや味が無くつていゝ。

九

片岡に柴うつりして鳴く雉子たつ羽音してたかからぬかは

山がつの片岡かけて占むる庵のさかひに立て

る玉のを柳
なほざりに燒きすてし野の早蕨は折る人なくてほどろとやなる
山里の外面の岡の高き木にそぞろがましき秋の蟬かな
よこ雲の風にわかるるしののめに山とびこゆる初雁のこゑ
つらなりて風に亂れて鳴く雁のしどろに聲のきこゆなるかな
きり〴〵す夜寒に秋のなるままによわるか聲の遠ざかりゆく
いづれも正直に對象を視詰めた歌である。自然をありのまゝに描出してゐる處が値

打なのだ。この位の作がせめて百首もあつたら西行を自然歌人と呼んで差支ない事になるのだけれども、奈何せむまことにその數が尠い。案外に尠い。少いけれどもとにかく幾首でもある事は、作意偏重の當時の歌人の間に在つて異とするに足りる。

十

これと言つて明瞭な、深刻な動機は無しに出家を遂げ、遯世の後も佛道精進に苦行のありたけをするといふのでも無い。心の行くまゝに、或は京洛に留まつて權門の間に出入し、或は飄然として放浪の旅に上る。花鳥風月を友としては、口任せにやゝ氣樂な歌を吐き散らし、上出來の場合にはそれが相當に自然を凝視した作とも成る。寂寥に浸つて心鏡の澄み極まつた瞬間には天籟の哀音を響かせ、現實の愛着に搔き亂される折々は遣る瀨ない人間の溜息を吐く。時としては又頗る氣立てのいゝ滑稽も言ふ。これが山家集千五百餘首の歌から歸納される我か西行の價値のあらましである。

山家集の價値として數へた五個の特質に就いては、詳しく論ずれば限りの無い事であるから、これで筆を擱く事にする。なほ餘論として次に一二附言して置き度い。

十一

遥かなる岩のはざまにひとりゐて人目おもはでもの思はばや

人は來で風のけしきもふけぬるにあはれに雁の音づれてゆく

これは新古今集戀の部に出てゐる西行の作である。西行の戀歌には佳什が隨分と數多くあるけれども、それが果して本氣なのか何だかわかりかねるので私の興味をそそらない。

彼はまた詞花言葉を飾つた、燦爛たる、謂ふところの新古今調の歌を澤山に作つて

ゐる。

夕露をはらへば袖に玉消えて道わけかぬる小野の萩はら

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原

津の國の難波の春は夢なれや芦のかれ葉に風わたるなり

春風の花の吹雪にうづもれて行きもやられぬ志賀の山越

淡路潟せとの汐干のゆふぐれに須磨よりかよふ千鳥なくなり

彼は何處までも時代の産物であつて、晩年の實朝のやうに周圍から飛び離れてはゐ

ない。共處に或は金槐集の作者ほどの高さを見出し得ないかも知れないけれども、如何にも親しみが感じられる。西行は何處までもおのづからである。我等とおなじ人間である。彼を超人扱ひするのは飛んだ贔負の引倒しであらねばならぬ。(大正十一年十二月稿)

北面の歌人秀能

太上天皇を輝き繞る幾多の詩星の中に我が藤原秀能も居つた。二條殿の內に置かれたといふ當年の和歌所に出入する仕官の歌人達の中で、秀能は最も身分の低い者であつたらしい。建保二年九月水無瀨殿の淸撰の御歌合の時、北面の秀能の歌がやんごと無き人々にも立ちこえて九首まで召され、しかも院のおんかたてに參つて、末代までの面目をほどこした由を增鏡に書いてある。

藤原秀能の經歴に就いて今日までに私の知り得たところは甚だ乏しい。「鎭守府將軍

秀郷の後胤河内守秀宗の第二子なり。初め土御門内大臣通親の家に祗候す。年甫めて十六、後鳥羽上皇の北面に召されて堂上を聽さる。新古今集撰定の事あるや、和歌所寄人に加へられ、累進して承元四年廷尉に任ぜらる。建保四年出羽守に任じ、同五年正五位上に敍せらる。承久の變に追手の大將となり、亂平ぎて後、熊野山に入りて出家し、法名如願と號す。仁治元年五月二十一日卒す、年五十七。」日本百科大辭典第九卷に斯う書いてある。それから新古今集に彼れの熊野參詣の時の歌が載つてゐるのから推すと、建仁元年十月の太上天皇熊野御幸の供奉に加はつたものらしい。

この人の作は新古今集に十七首取られてゐる。同集春歌上、

花ぞ見る道の芝草ふみわけて吉野の宮の春の

あけぼの

の作者を流布本に正三位秀能としてあるが、それは正三位季能の寫し誤りであらうと私は推定する。新古今撰進の元久年間に我が秀能が三位であらう筈の無い事は、增鏡

の記事からしても、前述の百科大辭典記載の履歴からしても、疑の存せぬ事である。更に又、私の推定の確かな事は定家の明月記からも裏書出來るのである。明月記を開いて見ると通光、通具、有家、家長、家隆、具親、雅經等當時の主なる堂上歌人の名前は到る處に引合に出されてゐるにも拘らず、我が秀能の名前だけは稀にしか見當らない。僅に元久二年正月除目の記事の中に主馬首藤秀能といふ文字が見られるぐらゐのものである。これは多分我が秀能の事であらうと推測する。若しも彼が三位の身分の殿上人であつたならば明月記の中に始終引合に出されねばならぬ筈である。であるから私は流布本の正三位秀能を季能の書き損ねと斷ずるのである。正三位季能は冬歌の部に千鳥の歌一首の作者として載せられてゐるのみならず、明月記のところどころにも名前を見せてゐる。ついて乍ら千載集の作者に左京大夫秀能といふ名前の人があるけれども、これも我が秀能で無い事は同樣に身分の點から考證出來ると思ふ。

考證ついでに彼れの年齡と作品との關係をも調べて見度いと思ふ。仁治元年に五十

七歳で卒去したとすると、元暦元年の生れであつて、熊野御幸の供奉及び和歌所寄人の拜命が十八歳、新古今集撰進の當時が二十二歳といふ事になる。驚くべき早熟の才人である。尤も此の時代の歌人には早熟の人が多かつたので、大器晩成などいふ氣樂な者は藥にしたくも見付からない。定家の早熟は勿論として、新古今集の成つた元久二年に於いては太上天皇が御壽二十六、良經が三十七歳、雅經が三十六歳に過ぎなかつた。その中でも我が秀能の若いのには驚かされる。何から何まで型にはまつた平安朝の最末期、萎微沈滯の極にあつたと目せられる頽廢的貴族社會に於いて、これは又おどろくべき實力主義の實現では無いか。當年の歌人等が非凡なりし爲めか、それとも保護者太上天皇の聰明にあらせられた爲めか。蓋し兩つながら相俟つた結果であらう。

この藤原秀能に就いて一文を草する程私の興味をひいた所以は、彼が身分の最も低い作者であつた事と、極めて早熟の歌人であつた事と、さうしてその歌が十分光つて

ゐる事とに外ならない。

あしびきの山路の苔の露の上にねざめ夜深き
月をみるかな

山里の風すさましき夕ぐれに木の葉みだれて
ものぞ悲しき

新古今集中にはめづらしいありのままの歌である。しかも當時の作者の長所として、技巧にいささかのそゝつも無い。ありのままではあるけれども、ざつくばらんで無い。

おく山の木の葉のおつる秋風にたえだえ峯の
月ぞ殘れる

月すめばよもの浮雲そらに消えてみ山がくれ
をゆくあらしかな

二首共熊野參詣の時の作であつて、前者は晩秋蕭條の山景を如實にあらはし、後者

は巧妙極まり無いものである。桂園一枝に「てる月は高く離れてあらしのみ折々松にさはる夜半かな」といふのがある。秀能の「月すめば」とおなじ處を見付けたのであつて惡い歌では無いけれども、彼此くらべて見ると錦と布ほどの値打の差がある。今人は或は實用向な布の方を重寶がるかも知れないけれど、錦は何處までも錦である。

夕月夜汐滿ち來らし難波江のあしの若葉にこゆる白浪

この一首だけでも彼は新古今集中に儼として存在を認めしめる。

草枕ゆふべの空を人とはばなきても告げよ初雁のこゑ

袖のうへにたれゆゑ月は宿るぞとよそになしても人の問へかし

當時の和歌の弊たる「作意の勝ち過ぎた」ところはあるけれども、それはそれとし

て、右二首共に佳作たるを失はない。今人の喜ぶところの無爲の食客的凡作に比べれば、作意が有るだけでも取りどころである。

今さらに住みうしとてもいかがせむ灘のしほ屋の夕ぐれの空

すてばちな處がいゝ。鹽井雨江著「新古今和歌集詳解」に此の歌を註釋して「何事か決心する事ありて灘の鹽屋に世を思ひ捨てたる身の、夕暮の空にはいとど悲しく侘びしく思ひての述懷なるべし」と言つてゐるのは贊成出來ない。作者はまだ二十歳前後の執着の花盛りで、世を思ひ捨てるなどは思ひも寄らないのだ。これは題詠の歌に相違ない。題詠で遯世するぐらゐの事は當時の歌人等には朝飯前の仕事であつた。さうして、題詠の歌に十分な實感を持たせる事も彼等の容易く成し遂げた處である。新古今歌人の作歌態度を檢討すれば這般の消息はおのづから明らめられるのである。雨江は此の一首の實感味にごまかされてしまつた。蓋し彼は正直過ぎた註釋家である。

以上は新古今集に出てゐる十數首の歌から秀能を瞥見したに過ぎない。彼れの作はなほ新勅撰集及び續後撰集等にも取られてゐるが、私は未だそれ等を見て居ない。藤原秀能の家集なるものが今日遺されてゐるか否かも私は未だ究めてゐないが、竹柏園大人にでも敎を仰がうと思ふ。（大正十二年一月稿）

なまけもの具親

源具親と言つたところで、新古今研究者の私に取つてこそ懷かしい名前の一つだけれども、大方の君子は存じも寄るまい。歌人といへば實朝か良寛かと早合點する人々は具親から見れば無緣の衆生なのである。

新古今集を繙いて見ると、五人の撰者及び彼等と盛名を同じうする數人の作者はさて措き、その他にも優に一世の才人と目すべき程度のよみ口が十人ばかり居る事を私

は發見する。さうして、源具親はその一人なのである。具親の作の同集に採られたものは十首にには足らないけれども、いづれも時代の風尙を代表する幽玄絢爛乃至巧緻なものばかりである。

時しもあれたのむの雁の別れさへ花ちる頃のみ吉野の里

しきたへの枕の上にすぎぬなり露を尋ぬる秋のはつ風

具親の傳記に就いて私の知るところは甚だ乏しい。彼は左京大夫師光（この人の名は千載集新古今集などに出てゐる）の子であつて巾幗歌人宮内卿の實の兄である事、官は少將兵衞佐などに拜せられた事、自讃歌の作者の一人である事、彼が後鳥羽院の熊野御幸に供奉したことが、新古今集雜歌上に出てゐる彼れの

ながめよと思はでしもや歸るらむ月まつ浦の

といふ歌の詞書から判斷し得る事、高野山に參籠したことのある事、彼れの妻が彼よりも先に亡くなつたことが明月記に書いてある事。彼れの經歴に就いては斯樣な貧しい材料しか持ち合せてゐないが、ここに一つ面白いのは鴨長明の無名抄の中に具親は非常ななまけものだといふ逸話の載せられてゐる事である。無名抄下卷に「具親歌を不入心事」と題して、

寂蓮入道は殊にこの事(宮內卿の歌道に極めて熱心な事を指す)をいみじがりて、せうとの具親少將の歌に心を入れぬをぞ惡み侍りし。何故に身をたてたる人なればしかあをらん。宿直所をまれ〱たち入りて見れば、はれの會などの頃も弓よ墓目よなどとりこみて細具前に据ゑて、歌を大事と思はぬとて口惜しき事にぞ言ひ侍りし。

懶け者でも具親位な歌が出來たら仕合せであらう。いざ歌を作るといふ場合にはゎ

ざく衣紋をかいつくろつて桐火桶に凭りかかつたり、白氏文集をくり披げたり、短檠の燈を明るくしたり、細めたり、ひどいのになると一首の歌で咯血したりするやうな、極めて野心深い、克明な人間ばかり多かつた當時に於いて、一人のなまけもの具親を見出す事はいささか人意を强うするに足りる。それが又、名うての努力家、宮内卿の血をわけた兄さんと來てゐるから一層妙では無いか。氷囊を頭に戴せてやつと及第する底の龔勉强家は下品の下に屬する。それに比べると、懶け澄まして秀歌を吐き出す我が具親の類は少くとも上品の下ぐらゐの値打はあらう。文藝復興期の佛蘭西の一思索家は笑の讃美を高唱したのであるが、具親の歌を玩味する時私は懶惰の福音を説き度くなる。

尤も我が具親にしたところで徹頭徹尾懶け倒してゐたものでは無いらしい。

難波がた霞まぬ浪も霞みけりうつるも曇るおぼろ月夜に

今はまた散らでもまがふ時雨かなひとりふりゆく庭の松風

月の秋は名のみぞよるの藻しほ草かつかきたえて見る夢もなし

斯の種の歌は善かれ惡かれ非常に凝り拔いたものであつて、物臭太郎では思ひも寄らぬ纖巧な藝術品である。具親に取つてこれ等は蓋しなまけものの俄勉强の結果であつたらう。さうして、その纔かな凝り性の閃めきに於いて彼が矢張り宮內卿の阿兄たる事を私は頷かずに居られない。

或は想像が逞しくなり過ぎるかも知れないが、無名抄の著者によれば具親は作歌よりも弓術などに多く興味を持つた活潑な戶外人であつたらしい。何も王朝末期の殿上人だからとて蒼白い顏して歌ばかり詠んでゐたものとは限るまい。定家は馬術の達人であつて、そのせいか明月記にも馬の事が屢々出て來る。新古今集撰者の一人の雅經

も飛鳥井家の祖と成つた人で、蹴鞠の名手であつた。歌人を論評するに當つてその專門以外の方面から觀察する事は面白くもあり、又必要な事でもある。

又もかく浮きて世にふるためしありやただよふ雲のあとの村雨

之はなまけもの具親が述懷の嘆聲である。超然として悧け澄ましたつもりの我が具親も竟にはみづからを浮雲の一叢雨と觀ぜずには居られなくなつたのであらう。さうしてそれは取りも直さず當時の世相であつた。（大正十二年十二月稿）

慈鎭和尙の愛嬌

大僧正慈圓、諡して慈鎭が新古今集の入選歌數に於いて筆頭であつたのは、歌の上手なのと名門であつたのと二つの理由による事で、その孰れか一つだけの理由では無

かつたと思はれる。その家集拾玉集を通讀して最も面白く感じられる事は、彼れが如何にも歌好きで、毀譽褒貶を度外視して歌を樂しみに詠んでゐたらしい事である。今一つは、右の結果として、當時の歌人としては珍らしくも、その家集中に自個をかなり明らかに暴露してゐる事である。

拾玉集中に新古今調本格の秀歌が相當にある事は疑無いけれども、私はここにそれらを紹介する勞を省く。それよりも、次に擧げるやうな素直な歌のある事を讀者に知つておいて貰ひ度い。

中々にもりくる月のさやけきは暗き木かげに映ゆるなりけり

神無月時雨は過ぎぬ竹の葉にはげしき音や霰なるらむ

何となく駒にまかせてゆく道を事あり顔に蟬

ぞ鳴くなる

吾が宿にしぐれ來にけり山の端にひとむらか
かる雲と見たれば

それから又、

ほととぎす傾く月に過ぎぬなり聲より西に聲
を殘して

の如きは、二聲三聲鳴きつつ遠ざかる瞬間の表現として非常に苦勞したものである。

それらはさて措き、ここに私が述べようと思ふのは、歌に現はれた慈鎭和尙の愛嬌、すなはち人格の諧謔的方面である。

梢には花の姿をおもはせて先づ咲くものは鶯
の聲

定家にも「身にしむ色の秋風ぞ吹く」といふ句があるがそれは眞面目で、佛蘭西の

象徴派を想はせる手法であるが、慈鎮のは滑稽に感じられる。

風をいたみ山漕ぐわれは舟なれや花のしら浪

わけて來つれば

うき身かなふりぬる上になほふりぬ鈴鹿の山

の鈴虫のこゑ

人を喰ふにも程がある。お花見遊山の自分を舟に見立てて、而かもその舟が山を漕

いてゐるのだ。

賤の男がふけゆく闇の門凉み好もしからぬま

どゐなりけり

下郎共が夜ふけて凉みをしてゐる。汗臭いか、博奕を打つてゐるか、とても乃公に

は仲間入りの出來かねる奴等だと仰せ給ふのだ。

鶯の花に鳴きしも忘られぬ紅葉の下にさを鹿

のこゑ

花がるたの畫讃と言つた處である。好もしからぬ賤の男の爲めに敢へて下しおかれた一首であるかも知らぬ。

秋來れば秋のまがきの秋風に秋の心ぞ秋につくなる

まださゝぬ槇の板戸をたたくかなわれぞ水鷄と名のるなるべし

難波がた葦間の鶩の一つがひ思ひ絕えたるみ吉野の山

夏衣ひとへなれどもなかなかにあつさぞまさる裏となりぬる

此の程度のふざけた歌は幾らでもある。

大和尙がこれらの歌を作つた瞬間、新らしいだらうとしたり顏をしたか、乃公の歌は殿樣藝で定家輩に及ばぬわいと苦笑したか、それとも何も考へない無爲境に安んじたか、後世の批評家はまごつかされるだけである。（大正十四年七月稿）

後京極攝政良經

私は大正十一年以來折にふれては新古今集及びその時代の和歌に關する研究を發表し、最近ではもはや言ふべき事を言ひ盡くした心持がしてゐる。此の時代の歌の特質は類型的すなはち非個性的である事、絢爛を極めて而かも或るものはその裡に時代相の反映なる寂びしい影を持つてゐる事、又稀には象徵の域にさへ入つてゐる事、頽廢の匂ひ深い事、無常觀や厭離の歌の多い事、漢詩の影響が特に格調の上に著るしい事、自然風物の擬人的傾向などであると私は論じて來た。當時の歌人等が修辭上の技巧に

沒頭し過ぎた事は私が特に論ずるまでも無い周知の事實だ。又、彼等が叙景客觀の方面に佳作を多く遺し、抒情主觀の歌は萬葉はおろか概して古今にさへも及ばなかつた事も亦私が敢へて指摘するまでも無い。

此の特質を當時の代表的歌人の作の上に具體的に述べて見度いと思つて、後京極攝政藤原良經を選んだ。

新古今時代の代表的作家と言へば後鳥羽院、良經、慈鎮、西行、俊成、寂蓮、定家、家隆、長明、通具、通光、有家、雅經、秀能、女流では式子内親王、小侍從、讃岐、丹後、大輔、俊成女、宮内卿局等の二十餘人である。これ等の人々は、西行一人を除けば、皆非個性的であつて、新古今風（定家型と呼稱しても同じこと）に統一せられ、甲に就いての批評は乙にも適し、乙に就いての考察は多少とも丙に通じる次第なのだ。それ故彼等のどの一人を選んでも構はぬ次第であるが、便宜の爲め、新古今集卷頭の歌

みよし野は山も霞みてしら雪のふりにし里に

春は來にけり

の作者良經を選んだのである。

先づ良經の略傳を述べれば月輪關白兼實の子として嘉應元年生、建久六年二十七歲にて內大臣、正治元年三十一歲にて左大臣、建仁二年三十四歲にて攝政、元久元年三十六歲にて太政大臣、建永元年三月暗殺せらる、年三十八。後鳥羽院よりも長ずること八歲、定家よりも若きこと七歲であつた。天台座主慈圓はその伯父、中宮宜秋門院はその妹。北の方（長子道家の母）は先立つて世を去る。良經は慈圓や公經（西園寺）等のやうに親幕主義の人であつたが、その品性の高いのと和歌に堪能であつた爲めとにより後鳥羽院の信任が厚かつた。家集を式部史生秋篠月淸集といふ。

月淸集をくりかへし見ても良經の人柄や生活は殆ど捕捉し難い。彼れの歌は非個性的である。當時の他の歌人等と共通した人世觀や自然觀のみしか出してゐない。

春日山みやこの南しかぞおもふ北の藤浪春に
遇へとは

家門の繁榮を希求する歌は何人にもある。
世の中はくだりはてぬといふ事やたまたま人
のまことなるらむ
われながら心のはてを知らぬかな捨てがたき
世の又厭はしき
君が代に出でむ朝日を思ふかな五十鈴川原の
春のあけぼの
掩ふべき袖こそなけれ世の中に貧しき民の寒
き夜な〳〵

これらとて良經に限つた感慨では無い。

今年みる吾が元結の初霜にみそぢあまりの秋
　のふけぬる

三十二歳の作で、初白髪を嘆息したのだ。これなどは自分に即してゐるので面白い。戀歌もあるけれども皆題詠で、告白的の詞書あるものは無い。要するに月清集は百首歌と題詠の歌との集結で、新古今型花鳥風月の外の何ものでも無い。斯く言へばとて私は決して良經と月清集とを貶しめるのでは無い。良經のみならず、當時の歌人は時代特色を濃厚に具現してゐる事に價値と意義とを持つてゐるのである。

良經の才は早熟であつた。月清集で作年月の明らかなものの中では二十二歳作の花月百首が處女作である。此の處女作を讀むと十五六首は佳作である。而かもそれらは頗る善く整つた新古今本格の歌である。數首を拔く。

　昔たれかかる櫻の種を植ゑて吉野を春の山と
なしけむ

世の中よ櫻に咲ける花なくば春といふ頃もさもあらばあれ

今日來ずば庭にや跡のいとはれむ訪へかし人の花のさかりを

雲と見し深山の花はちりにけり吉野の瀧の末のしら浪

高砂のをのへの花に春くれて殘りし松のまがひゆくかな

月だにもなぐさめがたき秋の夜の心も知らぬ松の風かな

ひとりねの夜寒になれる月みれば時しもあれや衣うつこゑ

それから、

何となく春の心にさそはれぬ今日白河の花の
もとまで

里とよむ昔もしづかになりはててさ夜ふけが
たに澄める月影

といふやうな素直な歌もある。

此の處女作の上手さで晩年までぐいぐい伸びたかと言ふと、さうでも無い。變化があつたかと言ふと、それは尙更無い。此の早熟と無變化といふ特徴は當時の歌人達に共通の現象であつた。僅に慈圓と家隆とぐらゐが例外であらう。一體新古今時代の作家等の一人一人を特質付けて見ようとするは徒勞なのである。鎌倉時代のいろいろの髓腦物にそれを試みてゐるが大方當つてゐない。貫之が六歌仙を色わけしたのとは違つてゐる。くりかへし言ふが、俊成定家等の一團は非個性的である。

良經の歌には地歌が多い。後鳥羽院口傳に、「故攝政はたけをむねとして諸方を兼ねたりき。いかにぞや見ゆる言葉のなき歌、ことによしあるさま不思議なり。百首などの、餘りに地歌も無く見えしぞかへりて難とも言ひつべかりし。秀歌餘りに多くて、兩三首などは書きのせ難し。」とある。又、荷田在滿の「國歌八論」中に後京極攝政の歌毎首皆錦繡云々と讃美を盡くしてゐるが、これらは良經だけを賞揚し過ぎてゐる。當時の人達の百首歌の類を讀むと地歌の多過ぎるので退屈させられる位のものだ。良經とてもその仲間に漏れない。比較的地歌少く粒の揃つてゐるのは拾遺愚草だけであらう。「三五記鷺本」の中に、「百首を詠まんには、地歌とて、所々にはさる體なるものの、いひしりたる樣を詠みて、其中に秀歌出で來りぬべからむ。」と書いてあるのは機微に通じてゐる。當時地歌の多かつたのは此の作戰からかも知れない、呵々。

月清集に二夜百首といふのがある。それに作者は附記して、「これは建久元年十二月月蝕の夜禁中に宿直しつつ詠んだ。後から一首も改作してゐない。」と言つてゐる。二

十二歳の時の事である。一夜漬けとは思はれぬ立派な歌もまじつてゐる。

　忘るなよたのむの澤をたつ雁も稲葉の風の秋
　の夕ぐれ　（歸雁）

　照射（ともし）するはやま茂山さと遠み火串もつきぬ明
　けぬこの夜は

　日を遮（さ）ふる松より西の朝凉しここには暮ぞ待
　たれざりける　（納涼）

　山ふかき水のみなかみ氷るらし清瀧川のおと
　のともしき

　冬の朝衞士の煙を立つる屋のあたりは薄き九
　重の雪

彼れは速吟の技能を持つてゐた。尤も、此の速吟の藝は定家や慈圓の家集を見ても

更に驚くべきものがある。西行も「緣行道して」歌を作つたと傳へられるから、李白流の早業も出來たらしい。當時の人々は俄に百首歌を召上げられたり、當座の歌合に臨ませられたりしたのでおのづから達吟、速吟に熟練せねばならなかつたのであらう。反對に、白氏文集の句を誦したり、桐火桶を抱いたりして、悠々と遲吟する事も知つてゐた。

良經は藤原親經に詩を學んだといふ。さなきだに、平安朝以來引續いて漢文學の影響を多く蒙つた當時の事であるから、月淸集の中にも折々漢詩風の和歌を發見する。

うたたねの夢よりさきに明けぬなり山ほととぎすす一聲の空

夏深き入江の蓮（はちす）さきにけり浪にうたひてすぐる舟人

雲はみな拂ひはてたる秋風を松に殘して月を

見るかな

人すまぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後は
ただ秋の風

暗き夜の窓打つ雨におどろけば軒端の松に秋
風ぞふく

かへるべき越の旅人待ちわびて都の月に衣う
つなり

いづれも集中での秀逸の部であるが、內容又は格調の上に於いて漢詩的である事は
說明を俟たぬ。

彼れに又、此の時代の凡ての歌人と同樣、本歌取りの技巧を弄した歌の多い事勿論
である。家集開卷の所にある

谷川の打ち出づる浪に見し花の峯の梢になり

にけるかな

をはじめとして集中に幾十首あるかわからぬ。

彼れの最佳境は、定家家隆等のそれの如く、絢爛を極めつつ而かもおほらかな感じのする類の歌である。

ひさかたの雲居に見えし生駒山春は霞のふもとなりけり

足柄の關路超えゆくしののめにひとむら霞む浮島が原

氷りゐし水のしらなみ岩越えて淸瀧川に春風ぞふく

ふるさとの庭のさゆり葉たま散りて螢とびかふ夏の夕ぐれ

千里までけしきにこむる霞にもひとり春なき越のしら山

さくら咲く比良の山風ふくままに花になりゆく志賀の浦浪

おなじく美辭を聯ねながら、深い寂寥の影をやどしてゐる秀歌もある。

ひとりぬる閨の板間に風ふれてさむしろ照らす秋の夜の月

野か山かはるかに遠き鹿のねを秋の寢覺に聽きあかしつつ

晴るる夜の星の光にたぐひ來ておなじ空よりおける白露

よしの山花のふるさと跡たえてむなしき枝に

春風ぞふく

明日よりは志賀の花園まれにだにたれかは訪はむ春のふるさと

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ

うちしめり菖蒲ぞかをる時鳥なくや五月の雨のゆふぐれ

住みしらぬ昔の人の心まであらしにこもる夕ぐれの空

暮れかかるむなしき空の秋を見ておぼえずたまる袖の露かな

ふもとまでおなじ篠原あともなしみ山の庵の

非情の自然を擬人する手法は彼れにも亦頗る多い。叙景の歌を作る際にも純客觀に成り得ないで（むしろ強ひて成らずして）、對象の自然に同感し、それへ自個の主觀を分配すると言つたやうな事が多い。わかり易くいへば、非情の風物に作者自身の心を持たせるのである。これを風景の知的描寫とでも言はうか。例へば院初度御百首中に、

ときはなる山の岩根にむす苔の染めぬ綠に春雨ぞ降る

かへる雁今はの心あり明に月と花との名こそ惜しけれ

夏きぬといふばかりにや足引の山も霞の衣替ふらむ

荻の葉に吹くは嵐の秋なるを待ちける夜半のさを鹿の聲

みだれ芦の穂向けの風の片よりに秋をぞ見する眞野の浦浪

作者の自分が秋を見ると言はずして「風」が見せると表現するのである。良經も亦技巧美から墮して頽廢の歌を澤山作つた。それは餘り澤山だから唯一首擧げる。

わたのはら雲に雁がね浪に舟霞みてかへる春のあけぼの

戀歌の佳什は寥々たるものである。

吾が涙もとめて袖にやどれ月さりとて人の影は見えねど

時しもあれ空飛ぶ鳥の一聲も思ふ方より來て
や鳴くらむ

なほ、月清集中の秀逸として見落してならぬ歌が數首ある。
夏の夜は枕をわたる蚊の聲の僅かにだにもい
こそ寢られね

山とほき門田のすゑは霧はれて穗浪にしづむ
有明の月

行きて見むと思ひしほどに津の國の浪華の春
も今日暮れぬなり

草木まで心あるべし法の庭に花たてまつる春
の山かせ

餘談であるが、彼れの

霞とも雲ともわかぬ夕ぐれに知られぬほどの
　春雨ぞふる
を後世僧契沖が更に美化して
　霞とも雨とも空はわかぬまに玉ぬきそむる青
　柳の糸
といふ傑作をこしらへた。又、良經の作の中でも人口に膾炙せる
　たぐへ來る松の嵐やたゆむらむをのへにかへ
　るさを鹿の聲
も佳いには佳いけれど、それよりも正治二年三百六十番歌合にある太皇太后大夫の、
　さそひ來る峯の嵐やよわるならむ遠ざかるな
　りさを鹿のこゑ
の方が技巧少く直叙的で更に佳いと思ふ。（大正十五年二月稿）

待宵の小侍從

歌人の生活を識る事がその作を眞に鑑賞する事の基礎なるに相違ない。私は新古今時代を研究するに當つて、當時の主要歌人等の傳記に出來るだけ眼をさらした。就中、何々門院の何々といふ階級の女性等に就いて好奇心的の探究を試みた。平安朝の泰平は彼女等の有閑生活を爛熟せしめ、必然の結果として彼女等を淫蕩ならしめた。その末期から鎌倉初期へ亘る社會動亂は彼女等をして男性に縋る事を一層必然ならしめたに相違ない。然るに遺憾ながら當時の文獻はそれ等の事實を明らかにしてくれない。或る大宮人が武士の妻を姦して暗討にされた事や、貴人の妻が嫉妬から自殺したといふやうな雜報は日記の端に殘つてゐるけれども、私が要求する類の巾幗歌人關係記事は甚少いのである。讃岐、越前、丹後、大輔、宮內卿局、俊成女などに就いて彼女等

の美くしい詠嘆の背景に横たはつたであらう情的事實は歌集の何れにも殆ど書かれて居らず、勿論告白されてもゐない。そんな筈は無い筈である。

此の間に在つて、少しく興味の索線を與へてくれるものは爲定卿自筆本に據る群書類從本の「小侍從集」一卷である。名からして「待宵」で、戀愛の看板を上げてゐるのだから面白い。

待つ宵にふけゆく鐘のこゑきけばあかぬ別れの鳥はものかは

の一首を緣口にして、平家物語卷第五「月見」の條に後德大寺實定とその僕藏人とを配した美くしい場面が描かれてある。それは小說として、直ちに彼女の歌と事實とを檢討しよう。

彼女は石淸水八幡宮別當光淸の女で、母は小大進といふ。小大進は花園左大臣家の女房で千載集などに歌が出てゐる。小侍從は高倉院の御時、大宮の侍女として仕へ

た。大宮とは太皇太后宮の御事、詳しく言へば此の御方は先に近衞天皇の后で、後又二條天皇の后に成られた所謂「二代の后」であらせられた。平家物語卷第一に仔細に書いてある。小侍從が宮仕した「大宮時代」に彼女は何歳であつたらうか。正治二年後鳥羽院初度御百首の時に彼女は「八十の秋」と歌つてゐるから、それから逆算すると高倉院の御時の彼女は五十七歳乃至六十歳であらねばならぬ。意外の發見だ。此のやうな老媼では「月見」の條の場面とゝんと似合はしからぬ。「待宵」も「物かは」もさつぱり幻滅だ。そこで私は爲念、更に建仁元年千五百番歌合中の彼女の歌を探した。するとやはり

思ひやれ八十の年のくれなればいかばかりか
は物は悲しき

と歌つてゐて、最早疑問の餘地は無い。建仁元年は正治二年の翌年である。

「月見」の條は高倉天皇の治承四年福原遷都直後の事を詩化してゐるのだ。小侍從

と藏人との關係は戀愛では無くして、單に廢都の曉の別れを惜しんだに過ぎぬから、彼女の年齢など問題にしなくてよいと言ふか。それならば、少くとも、引合に出された歌が迷惑する事になる。

小侍從は亂代の宮女たるに違はず、いろ〳〵の男子と關係をして來た。家集を見ると、彼女の相手になつた人々は明瞭に姓名を曝らし物にされてゐる。

先づ、久我の大炊殿忍びて物申す頃云々とある。久我とあるから、鎌倉初期の政治家源通親の直系尊屬の一人であるに相違ない。この大炊殿が或る時やきもちを燒いて、今日まで遣つた手紙を皆返せと談じ込んで來たので、彼女は

思へただこの言の葉をかへしては何にかくべき露のいのちぞ

と甘えて頭を振り、相手を骨抜きにしてしまつた。

次に、修理大夫經盛つねに申しかはすに云々とある。經盛は平相國淸盛の弟のそれ

に違ひない。

左兵衛督しげのりの許へ或る年の七月七日云々とある。しげのりは民部卿成範で、此の人の歌は千載集に三首ほど見えるがその内二首は戀歌である。小侍從が七夕の日に此の人の許へ遣はした歌は中々佳い。

天つ星空にはいかが定むらむ思ひたゆべき今日の暮かは

源三位賴政もの申す頃云々とある。賴政との仲が一番長く、深く續いたと見えて、此の人に關する歌が最も多い。賴政がこの二三日音づれてくれぬに風邪にさへとり付かれて心細い、と彼女は勘忍し切れなくなつてゐる。賴政憚る事あつて暫時中絕した、とも書いてある。幾晚か續けて逢約した賴政が「今夜こそ」と手紙をよこしたので、彼女は角を曲げて

筏おろす杣山川の淺き瀨は又もさこそはくれ

梅雨の最中私かに申し合せて一緒に禁裡を抜け出したらしい形跡もある。双方に憚る事出來して又久しく逢はなかつた由も書いてある。平忠度と浮名が立つたので、賴政から「時めかさせ給ふらむこそ芽出度」といや味を言つてよこした。其處には源平の反目もある。彼女は「それは手紙を頂いただけです。關係なんか……」と辯解した。乍併、後に忠度が花見に山里に泊つてゐた時、思はせぶりな歌の贈答をしてゐるのから考へると、臭い。忠度は平相國の末弟で、賴政よりも遙かに若年だ。それにしても、彼女はその燕の兄なる經盛とも通じてゐたのだ。まだ〳〵驚く可き事がある。三角關係の彼等が年齡の事だ。假りに賴政の死の治承四年を取つて見ると、賴政七十七歳、忠度三十八歳、小侍從六十歳といふ勘定になる。此の懸け離れた年齡の三人が如何なる時に於いて恰好な三角關係を成り立たせ得たか。十年若くすれば六十七歳の男と二十八歳の男と五十歳の女とになる。もう十年若くすれば五十七歳の男、十八歳の男、

四十歳の女といふ事になる。小侍從はとても妖艶な大年增であつたに相違ない。頼政も、とても女好きのする好男子であつたに相違ない。

忠度の歌を參考まで調べる。平家都落の時、「心の花か蘭菊の狐川より引返」して師匠俊成に預けて行つたと傳ふる「忠度集」一卷がある。その戀歌の部に「神かけて誓ひ侍りける女の」とか、「忍びて人に物申しけるに」とか、「何となく言ひかはしける女に」とかいふ詞書の歌が少々ばかりあるけれども、それが小侍從と關係した歌であるか否か勿論不明だ。唯一つ手掛りは、雜の部に、「世のはかなき事など、侍從に申して侍りしほどに、山里にこもりぬるを聞きて申し送り侍りし」と詞書して、

あやなしの世をそむきなば忍べとはわれこそ

君に契りおきしか

「此の浮世を捨てて山に入つたらば思ひ出して下さいよとは私の方から貴女へお願ひしておいたのだが、さかさまに貴女の方が早くも山へ引込んだのか」の意味である。

更に參考まで「源三位頼政卿集」群書類從本を披く。此の家集には明らかに小侍從云々と詞書したのが七箇所ある。又、小侍從云々と書いては無いが、その關係に相違ないと讀まれる詞書の歌が澤山にある。それ等を讀みつなげて推測するに、二人の戀は斷續しつつ非常に長い年數に亙つてゐたものと思はれる。最後に「年頃語らひける女都や住み憂かりけむ、男に具して東の方へまかりける」云々とあるが、小侍從が東國へ赴いた事は彼女の家集にも出てゐるから間違ひ無からう。此の東下りが二人の緣の切れ目であつたか。それから忠度に關係してゐると思はれる箇所が一つある。「語らひ侍りける女いと若き新枕をなんしたりと聞きて」云々の歌である。それから頼政集の戀歌は澤山あるが小侍從以外の女の名は一つも書き出されてゐない事である。頼政は多くの女性と交渉あつたらしいが、無遠慮に名を書いてあるのは小侍從のみとすれば、彼女は餘程よかつたものと見える。

「小侍從集」に歸つて。以上擧げた幾人かの男性の外にも、藤原隆信（畫聖信實の

父)、左衞門督公光、中將隆房などと思はせぶりな歌のやりとりをしてゐる。彼女が東國から京都へ歸つて來た時には、あのがくがくの論客、むづかしやの法橋顯昭までが此の大年增に向つて

今はよし君待ち得たりかくてこそ都の花をも
ろともに見め

と横眼を使つたやうな歌を拜呈してゐる。彼女はどこまで蠱惑的なのかわからない。さすがに彼女も「罪深き夢みて」惱まされた由を告白してゐる。何年の事かわからぬが、彼女は遂に薙髮して、父の由緒ある石清水の山へ引籠つた。それを俊成や賴資などが惜しんでゐる。彼女述懷して曰く

石清水きよき流れのすゑずゑにわれのみ濁る
名をすすがばや

八幡宮別當の一門では彼女ばかりが名を汚したと自責してゐるのだ。さうかと思ふ

と、

そむきにしるしはいづらたち歸りかくて浮

世に墨染の袖

と煩惱をすぐ復活させてゐる。多感の女よ。

彼女の生活に就いてはこれだけで、もはや他に資料は無い。次に、歌人小侍從を語らう。彼女の歌は千載集四首、新古今集七首、新勅撰集五首、續古今以降新續古今迄三十八首といふ數を勅撰集に採られてゐる。鎌倉時代の髓腦物には稀に彼女の事も書かれてゐる。無名抄に「侍從は花やかに目驚く所よみ据うる事のすぐれたりし。中にも歌の返しする事はたれにもすぐれたりとす。」とあるは面白い。返歌は無論戀歌の返しであつて、小侍從の躰驗深い處のものである。歌仙落書に「風躰あまりて比興を先にせり」とあるは殆ど當らない。

彼女の佳境は勿論戀歌である。

浪たかき由良の湊をこぐ舟のしづめもあへぬ
吾が心かな
住吉の神に祈りしあふことのまつも久しくな
りにけるかな
たのめしを待つ夜の雨のあけ方に小休むしも
こそつらくきこゆれ
いかでわれゆふべの雨と身をなして軒の雫に
ものを言はせむ
思ひあまりあまり思へばささきの世に吾がつら
かりし報いなるらむ
四季の歌にはこれといふ程の佳作は無い。
ともづれに來しその數も足らずしてなく〳〵

今や歸る雁がね
早苗とる山田のぬしぞ老いにける來む秋まで
のいのち如何にぞ
旅の歌として次の如き作がある。もしこれが彼女の東國行の時の實感であるならば
佳いが、多分机上の題詠であらう。
吹きおくる雲居の月の曇る間は吾が影だにも
添はぬ旅かな
左の一首は「待つ宵に」と共に彼女の作中最も有名なものである。
しきみ摘む山路の露にぬれにけりあかつきお
きの墨染の袖
「曉起き」とはただ朝早く起きての意味では無い。昔かつて男と泣いて別れた後朝
を追想しての心が籠めてあると解さねばならぬ。

彼女の最後の作は正治二年八月院初度御百首の時の歌である。その中に、

鶯の谷のふる巣の隣にてまだかたことの初音
をぞ聞く

吹き來つる花たちばなの身にしめばわれも昔
の袖の香やする

月のころ八十(やそぢ)の秋を見ぬは無しおぼえぬもの
をかかる光は

此の時彼女は八十歳前後であつた。源三位頼政をはじめ幾人もの男をたらした多情の宮女も、もはや伊勢物語の九十九髪の媼といづれ劣らぬ大姥櫻である。それでもさすがに、鶯の片言をあはれみ、花橘の風に自分の過去を追憶し、明月を浴びては此の年までこれ程の美くしい夜を知らなかつたと現在に執著してゐる。小侍從は徹底した多感の女である。（昭和六年十月稿）

頼政の歌に就いて

み山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあら
はれにけり

近江路や眞野の濱べに駒とめて比良のたかね
の花を見るかな

花咲かば告げよと言ひし山守の來るおとすな
り馬に鞍おけ

折りくだるつま木こる男にもの申すかの峯な
るは雲か櫻か

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりけなく

すめる月かな

こよひたれすず吹く風を身にしめて吉野の嶽

の月を見るらむ

これら人口に膾炙した數首が和歌史上各時代を通じての上品に屬する事は疑を容れぬ。

待宵の小侍從に就いて一文を草した私は、彼女の戀人である源三位賴政に對しても何か書かなければ禮を缺くおそれがある。

賴政を新古今時代の歌人として論ずる事は不當と見えるかも知らぬ。彼れは平安朝最末の、千載集時代の歌人とするが適當なのは勿論だ。乍併、私は千載集を新古今集の序曲、新勅撰集をその終詞と觀察するのだから、賴政を鎌倉初期の研究中に便宜上入れて差支ないと信ずる。

源三位賴政卿集を通讀して先づ感じる事は、定家家隆等の家集を讀むよりもすらす

らと滯り無く讀める安らかさ、心地よさである。それは、賴政の歌に新古今風の技巧が無いのでは無いけれども、何と言つても達磨歌全盛以前のものであるから、俊成定家式の癖がまだ病的に入つてゐないからである。

それから、もつと善い事は百首歌は全く無く、題詠の歌も比較的少くて、詞書のある歌が多い事である。從つて、その詞書から作者の生活や面影が相當に窺ひ得る事の興味がある。史實や物語類で賴政の傳記は大方分明なところへ、その家集を併せ讀むと、此の浪漫的な武將歌人がほのぼのと眼前に現はれて來る。

私が佳作と考へる歌を少しばかり拾ひ出して見よう。

鳴きくだれ富士の高根のほととぎす裾野の道は聲も及ばず

漕ぎ出でて月は眺めむささ浪や志賀津の浦は山の端近し

晴れ曇り時雨する日は常磐木のかげに幾たび
駒とどめけむ

これ等は題材も表現も共に如何にも武人らしくて、きびきびしてゐる。

めづらしき春にいつしかうちとけてまづもの
言ふは雪の下水

櫻さく磯山ちかくこぐ舟の片乘りせぬはあら
じとぞ思ふ

卯の花の垣根なりけり五月雨に雨ざらしする
布と見つるは

待ち待たむ人の心をみむとてや山郭公夜を更
かすかな

秋風の身にしむことをそよそよとうなづく荻

ぞもろ心なる

いづれも上品な有情滑稽である。此の種の歌は此の時代では西行に多いのであるが、賴政もなか／＼ひけは取らぬ。

白雲

吉野川岩瀬の浪による花や青根が峯に消ゆる

いざやその螢の數は知らねども玉江の葦の見えぬ葉ぞなき

霧わけてとふ人もなし鹿の踏む庭の木の葉の音ばかりして

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の關

身の上にかからむことぞ遠からぬ黑髮山にふ

れる白雪

後の純新古今時代を先驅する歌どもである。

山賤の小屋のしりへの畑に蒔くあはれ吾が身をいかさまにせむ

天の原朝ゆく月のいたづらによにあまさるる心地こそすれ

共に題詠の述懷であるけれども、おそらくは平氏の壓迫に堪へかねて擧兵を企てた直前の作であらう。賴政のであるから實感に相違無い。

東女と寢ざめて聞けば下野やあその河原に千鳥なくなり

貫之の「思ひかね」をすぐ聯想させるけれども、女好きの賴政の作だから實感でもあらうし、又非常に氣のきいた佳い歌だ。

津守より廣田へ渡る商人(あきびと)もこよひの月を愛で
ざらめやは

これも新味の溢れた面白い歌である。たとひ「吉野の嶽」ほどの迫力は無いにして
も。

菖蒲の前の傳説は別として、彼れ自身の告白せる戀の歌を見よう。小侍從に關係せ
る歌は集中諸所に散見するけれども、惜しい事には歌として秀逸と稱すべき程のもの
は先づ見當らぬ。唯、詞書の中で一寸面白いのを拾へば、難波へ潮湯浴みに行つてゐ
る時都の小侍從から消息の來た事がある。彼女から唐の櫻花を摸した造花を貰つた事
がある。「小侍從尼に成りけると聞きて遣はしける」といふのもある。明らかに小侍從
關係とは書いて無いが、大方それに違ひないと思はれる歌の詞書の中に、「相語らふ女
恨むる事ありて山里へ行き隱れなむとする由を聞きて、今一度人傳てならで物をも申
さむとてまかりたるに、無き由を申して入れざりければ押入りて見るに、只今迄もあ

りける様にぬぎ捨てたる衣を見れば、さすがにあはれとや思ひけむ袖のしをるるばかり沾れたるを見るに、悲しき事限りなくて、袖に書き付けて歸りける。」といふ哀れ深いのがある。又、「女のうちとけたる所に押入りて侍りしに、さわぎて袴を著けるを見て」と詞書して、

何かその君が下紐むすぶらむ心し解けばそれも解けなむ

といふふざけた歌もある。

小侍從以外にも交渉のあつた女性が不少あつたやうだ。「或る宮腹の女房」との戀歌が時々見える。關係した或る女の死んだ事も書いてある。「紀伊守三河守にふえされたる女の、その事を心に懸けたる氣色なるを、白河なる人の遣はしける。」として、

八つ橋と吹上の濱と忘れずば思ひも出でよ白河の里

白河の人とは頼政自身である。その他まだいろいろの女房達と贈答した歌などが家集に散見するけれども、明らかに相手方の名を告白してゐるのは小侍従だけである。さまざまに品變りたる戀をして、一番よかつたのは、終始續いてゐたのは小侍従であつたに相違ない。（昭和六年十月稿）

定家と式子内親王

一

それは或る年の紀元節で、雪のちらちら降る寒い日であつた。私は能樂堂の見處に小さく坐つて、梅若萬三郎の妙技「定家」の舞を懸命に眺め入つた。後仕手からは格別印象が深かつた。石のやうに冷やかな舞臺の上に、屋根にも柱にも蔦葛を絡ませた作り物が据ゑられた。それは言ふ迄もなく墓場の象徴である。作り物のまはりの絹が

引落されると、瓔珞を下げた天冠に、白綾を着付けた姿の女人が坐つてゐる。その女人は、しばらくは「死」そのもののやうに動かなかつた。天冠の瓔珞さへも微かな搖らめきだに見せなかつた。此の暫時の靜寂は今日でも想ひ出せる。やがて佛平等說如一味雨と脇僧の供養する法力に火宅を出でたるその女人は、報恩の爲めと、「ありし雲居の花の袖」を飜して一曲の舞を奏でて見せた。折からの雪が橋懸りの欄干と見附柱とに降りかかつた。

私は暮雪の街上を歸りながら考へた。幽靈物の切りは「此の妄執を飜へす心は眞如の玉かづら」といふ風に大抵成佛するのであるが、今の一曲は「ありつる所に歸るは葛の葉の、元の如く、はひ纏はるるや定家かづら」とあつたから、藥草喩品の功德も束の間、內親王の魂魄は再び闇府に歸り、定家葛はとこしへに御墓を縛るのだ。作者は此の二人の因果に對しては特別のはからひをしてゐるのだ。斯う考へて私は溜息を漏らした。

二

謠曲「定家」の筋のあらましは斯うである。

北國から來た行脚僧が、都千本の邊で、時雨を避けてとある亭に立寄る。そこへ忽焉と一人の女性が現はれて、僧との間に問答が始まる。その問答中で、此處は時雨の亭とて、定家の屋敷趾だといふ事が語られる。やがて女人は、「今日は志す日にて候程に、墓所へ參り候ふ。おん參り候へかし。」と僧を促がす。「これなる石塔御覽候へ。これは式子内親王の御墓にて候。又此の葛をば定家葛と申し候。式子内親王始めは賀茂の齋の宮に備はり給ひしが、程なく下り居させ給ひしを、定家の卿忍び忍びの御契淺からず。その後式子内親王程なく空しくなり給ひしに、定家の執心葛となつて御墓にはひ纏ひ、互ひの苦しみ離れやらず。」云々と、定家の歌の詞を織り交ぜ乍ら、ありし日の戀を女人は美しく物語る。「怪しやおん身誰やらん。」と僧に問ひ寄られて、「われこ

そ式子内親王」と告白する。僧は内親王の幽靈に向つて藥草喩品を讀誦し、その法力で、定家葛もかかる涙もほろほろと解けひろごる。此の成佛のありがたさに、報恩の爲めと、内親王の幽靈が一曲の舞を奏でる。やがてその姿は消え失せて、定家かづらは元の如く御墓にはひ纏ふ。

此の一曲は二人の傳說的戀愛譚と、拾遺愚草の「時雨知時、私家にて」の題ある一首

いつはりのなき世なりけり神無月たが誠より

しぐれそめけむ

とを巧みに組み合せて構想されたものである。作者は世阿彌とも禪竹とも兩說あつて、しかとはわからない。

三

山川草木、非情の物に對してさへ心を動かして詠嘆する歌人が、異性の人間に向つて魂を搖がさない筈は無い。況して定家ほどの歌人が愛し愛されなかつた筈は無い。定家死後の崇拜者達は斯う考へた。殊に、その戀歌を無上のものと憧憬した鎌倉室町の好事家等はさう考へた。然らば相手は何人であつたらう。否、何人にしたらば最も定家にふさはしからうと考へた。それは大歌人の戀人として、やはり歌人で無くてはならぬと考へた。それならば丹後か、大輔か、宮内卿かと持つて廻つた末、やはり當時第一の女流歌人で、而かも最も高貴な式子内親王が理想的だと考へた。斯うした考へ方で、定家の死後十年、二十年、五十年の間に此の戀愛譚が美化され、具象化され、眞實化されて來て、謠曲の作者にまで好個の題材を寄與したものと思はれる。

「定家かづら」は無比の美しい夢幻的說話であるが、二人に關しては此の外にも尤もらしい作り話がこしらへられたやうだ。一例を言へば父の俊成が此の關係を痛心して戒めてゐたのであつたが、或る時定家の机の上を見ると、內親王のお筆で「玉の緒

よ」のお歌を書いたのが置かれてあつたので、俊成もそれからは異見を斷念した、云々。見て來たやうな話である。

四

人麿には石見の女と輕の市の女とがあつて、二人とも不朽の長歌に歌はれて有名となつた。彼れにはなほ一人「まきもくの弓月が下」に隱せる忍び妻があつて、その女も不朽の旋頭歌の對象となつた。それで、後世の萬葉學徒らは安心して、人麿に關しては定家葛式の夢幻譚を創作しないでゐる。家持は高田女王や平群女郎や、笠女郎や坂上大孃やと應接に遑ない程の戀人を作つて、それらとの贈答歌を莫迦正直に萬葉集へ編み込んだから、彼れに就いても亦後人は餘計な心配をしてやらないでもすんだ。業平に就いては言ふ迄も無い。伊勢物語の全部が彼れ自身の實錄で無いとしても、少くとも藤原高子入內前の關係は史家の信ずる處である。敏捷な淸少納言は自分の戀人

の名を明示して枕草紙の中でのろけを言つてゐる。その他、和泉式部を首領とする何々式部等の一團は、藤氏榮華の時代を背景として、それぞれ戀愛の自白をしてゐる。
然るに、我が新古今集の主要歌人達は此の點に關して餘りに用心深かつた。六家集をはじめ、あらゆる家集を披いても、そこに題詠の戀歌こそ充滿すれ、告白的の興味あるものは殆んど見當らない。それであるから、彼等は後人から間違つた浮名を歌はれたとしても、それへ抗議する理由を持たないのである。

五

式子内親王のお傳記はつまびらかで無い。後白河法皇の第三皇女で、齋院であらせられた事前後十一年、建仁元年薨去と推定せられてある。御壽は五十歳以下であつたらうと言ふ事は、御兄君の守覺法親王が翌建仁二年に五十二歳で薨去になつてゐる事からも確かめられる。定家よりも十年近く年長であらせられた事になる。

明月記を調べると、內親王に關する記錄は所々にある。多少の興味を唆る記事が無いでもない。定家二十歲、治承五年正月三日の條に、「三條前齋院に參る。今日初參、仰に依る也。薰物馨香芬馥。」とある。又同年九月二十七日の條に、「入道殿例の如く引率、萱御所齋院に參らしめ給ふ。御彈箏の事あり云々。」とある。入道殿とは俊成の事。「例の如く」とあるから、屢々參上したものと解せられる。三十歲に成られるか成られぬかの、女性美の頂上にある高貴の方が箏を彈いて居られる。そこへ多感の青年歌人が近く伺候してゐる。浪漫的想像の動機とはならう。後年謠曲「定家」を作らしめた戀愛譚は或は此の一條に端を發してゐるかも知れない。

定家は屢々內親王の許へ參上してゐる。隔日、或は連夜伺候した事もある。「お歌を見せしめ給ふ、皆以神妙。」といふ記事もある。正治二年九月頃からその年末へかけて、內親王の御病氣に關する記錄がある。「御足大腫」とあるが、何といふ御病氣かは今日の我等にはわかりかねる。定家は御病中大に心配して、絕えず參殿し、典藥頭との間

を奔走してゐる。或る時は癇癪を爆發させて、「近代の醫家憑む可らず」などゝ言つてゐる。御病勢減退の時には「喜悅無極」と書いてゐる。憂慮の有樣が眼に見えるやうだ。

二十年相識の間柄で、殊に歌の上では双方から尊敬してゐたに相違ない。最後の御病牀に侍しては、かく迄も御案じ申上げてゐる。「定家かづら」を後人の小說と決めようとした私も、どうやら考が變つて來さうである。(昭和六年十一月稿)

第三篇　雜稿十一種

新古今集と私

S兄足下――

十一月二十日附の御手紙を拜見したが、新古今集の價値に關する彼の御說は眞劍なのか、それとも私を揶揄する積りで書かれたのか。眞劍なのならば私に大々的の異論がある。たとひ短歌に就いては專門的の批判者で無い兄にせよ、最高學府の教授としては無理解に過ぎる。それとも揶揄した積りなのなら、措いて貰はう。揶揄されて赤い面したり、十年の持論をぐらつかせたりする程若い私では無い。兄は新古今の歌は華美な詞の技巧であり、又頗る難解のものが多いと言ふ。(御手紙の長い議論も要領は斯う讀める。)舊幕時代の國學者でも今少し深い觀察をした。新古今難解の聲は兄からばかりで無く、今日の若い人達からも、又は相當な學者からもしば〱聞かされる。

私には案外だ。あれが難解といふのは、いふ者の詩的觀念（又は詩的想像力）の缺如を告白するまでの事だ。藤岡作太郎博士もその著書の中に新古今難解の歌の例として定家の

消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露

年もへぬ祈る契は初瀨山尾の上の鐘のよその夕ぐれ

などを擧げたが、當らない。もしも此の位の歌が難解の部類に這入るものとすると、王朝時代の文學は大半わからない事になる。私に言はせると、新古今集中に難解の歌は唯左の一首あるのみだ。

思ひ出でよ誰がかねごとの末ならむ昨日の雲のあとの山風

これは巻第十四にある家隆の戀歌であつて、印象的にはわかるやうであるけれども、楚王の故事朝々暮々陽臺之下から來たのだと言ふから驚く。本歌取りも斯う成つては全くの樂屋落だ。兄に家隆の此の歌がわからないと言ふなら、尤もだ。その他の歌が難解だといふなら、もつと能く讀んで來てくれ給へ。

新古今の歌の本質は「絢爛の寂しさ」であると私はかねてから主張してゐる。兄も御承知の事と思ふ。彼の時代の歌の言葉や技巧の美しさに眩惑されずに、その奥底に流れてゐるものを凝視し給へ。それは美しさで無くて寂しさである。この議論を兄に徹底せしめようとすると長くなるから止める。唯私の主張を裏書する歌を少々ばかり摘錄するから、熟讀願ふ。

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるゝ横雲の空　(定家)

石の上ふるのわさ田を打返し恨みかねたる春

の暮かな　（俊成女）

うちしめりあやめぞ薫る時鳥なくや五月の雨の夕暮　（良經）

詠めわびぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらん　（式子内親王）

下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん　（家隆）

霜こほる袖にも影は殘りけり露よりなれし有明の月　（通具）

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへる移ればかはる歎せしまに　（後鳥羽院）

淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜わすれぬ夢をふ

く嵐かな　（通光）

嵐ふく峰の紅葉の日にそへてもろくなりゆく

吾が涙かな　（俊成）

それから申し忘れたが、新古今に就いて兄に是非知つて置いて貰はねばならぬ事がもう一つある。それは彼の時代の歌が屢々「象徴」の域に這入つてゐる事である。我が國の歌で象徴詩の高さまで達したものは定家家隆等新古今時代の名匠の作品以外には多く無い。

S兄――

兄は又御手紙の中で、私の歌は新古今の影響を多量に受けてゐるといふ。これも案外だ。乍併、若しも兄も亦私と同様に新古今は「絢爛裡の寂しさ」であり且つ象徴詩の高さに這入つてゐるものと了解されての上ならば、兄の此の言は私の歌に取つて名譽とならうとも損害にはならない。併しながら兄の了解する如き「淺薄な新古今」の

影響を私の今日の歌が多少でも被つてゐるものと思つて居らるゝならば、それは兄の妄斷である。私が二十餘年前短歌といふものに興味を感じ初めた頃には、今日の兄と同樣に新古今集を淺薄に觀察し、ひたすらに美しい技巧に眩惑されて、その惡影響を私の習作にうんと受け入れたのは事實だ。隨つて、いつぞやそつと御目にかけた私の處女歌集「陽炎」の中には或は兄の批難を裏書する歌が少しは混入してゐたかも知れない。(澤山は無い筈だ。習作と目すべきものは大分抹殺したから。)兄は多分二十年前の習作時代の私を知つてゐて、その後の作は見てくれてゐられないに相違無い。

こんな不服を言ふのは烏許がましい業だ。些々たる私一人の歌などは學者たる兄から觀れば問題にする價値は無い。それでも不服を申し立てなければならない所以は、私一人の爲めで無いからである。能く知らないものに就いていゝ加減な說を揑ね上げる事は今日の人々の惡い道樂である。(失禮ながら兄の新古今論もその一つだ。)學問の先達の一人たる兄までがそんな輕擧盲動をされては困る。もう一つ私の不服は、憧憬

に模倣が隨ひ研究に傳染が伴なふものと妄斷される事である。(尤も、兄がさう妄斷される事にも無理で無い次第がある。現歌壇一部の萬葉病の如きがこれだ。)私は模倣は嫌ひだ。右の眼で憧憬しながら左の眼に照魔鏡をあてがふ。(大正十年十二月稿)

定家の歌一首

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ

これは新古今集の春歌上のうちに「百首歌奉りしとき藤原定家朝臣」として出てゐる歌であつて、定家の家集拾遺愚草に就いて調べて見ると正治二年八月太上天皇(後鳥羽院)から題を賜はつて詠進した百首和歌の中の一首である。この時作者は三十九歳であつたから歌人として既に渾熟の境に入つてゐたものと見てい〻。まことにこの

梅花の一首は拾遺愚草の中でも見のがす事の出來ない作品であらう。

さてこの歌に就いて今年正月の「心の花」に佐々木先生の評釋が出されてゐるが、私はそれを興深く讀んだ。博士の評釋は斯うである。

直衣姿の大宮人が寢殿のはし近く立つてゐる。軒端には一もとの梅が咲いてゐる。折から大空には月が輝いてゐる。眺めやつて居る人の裕かな袖の上には月が梅の枝をうつし出して、恰かも花の匂ひと月の光とが互ひに爭つてゐるやうであるとは、この歌の詩境である。王朝の大宮人の生活の優雅な一面がこの一篇に象徵されてゐる。

先生の御說を面白くは拜見したが、疑問を起さゞるを得ない。斯くゆたかに美しくのみ取るべきでは無くつて、淚に濡れた袖の上に月がやどると解すべきではなからうか。その淚は懷舊の淚か、大方の物のあはれの淚か、本當の事は定家に訊かなくてはわからない。「美濃の家つと」の著者本居宣長はどうしたものかこの歌を見のがしてゐ

るが、「尾張廼家苞」の著者石原正明は次のやうに註釋してゐる。

一首の意は梅の花のにほひを袖にうつせば軒もる月の影は我もうつらんと來り爭ふと也。月の袖にうつるは月花のあはれに落ちし涙也。

どうもこれが普通の解釋のやうである。何故といふに當時の歌で月が袖にうつると言つたらば、涙か浪か露かいづれにしても濡れた袖を配合する事に技巧の慣用上きまつてゐるからである。例は新古今集の中にも幾らでもあるが、

心ある雄島の蜑の袂かな月やどれとはぬれぬものから　（宮內卿）

霜こほる袖にも影はのこりけり露よりなれしありあけの月　（通具）

ながめつゝ幾たび袖に曇るらむ時雨にふくるありあけの月　（家隆）

野べの露浦わの浪をかこちてもゆくへもしらぬ袖の月影　(家隆)

面影のかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に　(俊成女)

わが涙もとめて袖にやどれ月さりとて人の影は見えねど　(良經)

はらひかねさこそは露のしげからめやどるか月の袖のせばきに　(雅經)

をしむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋をうらみて　(俊成女)

涙とも露とも言はないで單に月影がうつると言つてゐるものも少くない。

袖の上に誰ゆゑ月はやどるぞとよそになして

も人のとへかし（秀能）

いかにして袖に光のやどるらむ雲井の月はへだてゝし身を（俊成）

よもすがら月こそ袖に宿りけれ昔の秋を思ひいづれば（西行）

これらは問題の梅花の一首と全然同一の技巧であつて、文字にこそあらはれてゐないが勿論泣く涙の意味である。

かさねても凉しかりけり夏衣うすき袂にやどる月影（良經）

これは涙でも露でも無い唯一の例（新古今集では）だと思ふ。併し乍らこの凉夜の歌は一首の心持から觀て定家の梅花の作の如き疑問を生じない。

又梅花と朧月とを懷舊の場面にあしらふ事も新古今集の技巧の慣例と言つていゝ。

すなはち、

梅の花あかぬ色香もむかしにておなじかたみの春の夜の月　（俊成女）

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春や昔の月にとはゞや　（通具）

梅が香に昔をとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる　（家隆）

斯ういふ風に穿鑿し歸納し類推してみると定家の「梅の花にほひをうつす」の歌は懷舊の涙をふくんだ美しい哀音と解釋するのが妥當のやうに思はれる。佐々木先生の評釋は大やうで明るく新し味もあるけれども、更に高致を拜聽するまで私はしばらく疑を存して置き度い。（大正十一、四月稿）

自讃歌僞作論

世に「自讃歌」といふものが傳はつてゐる。これは後鳥羽院が時の主な歌人十六人に各自よしと思ふ作十首づゝを奉らしめ給ひ、それに御製十首を添へさせ給へるものだと言ひ傳へられてゐる。此の自讃歌百七十首は歌がるたに作られてをり、又佐々木先生編著の「歌學全書」第七編にも輯められてゐるので大分通俗的に成つてゐるが、私はその後人の假托にかゝるものなる事を斷定して憚らない。

歌道の保護者であり、又みづからも秀れた歌人であらせられた後鳥羽院が、當年の歌人等から自讃歌を召されたといふ事は如何にも有りさうな、自然な事柄である。文獻の據りどころの有無に關らず私はその事柄を肯定しようと思ふ。併し乍ら今日世に傳へられてゐるところの百七十首なるものがその自讃歌でないことは左の理由で立證

出來るのである。

先づ一つには自讃歌の序文みづからが裏切つてゐる。序文の冒頭に「天の下長閑にも浪の聲の靜かなりし御代は今は百年あまりにや成りぬらん」とあつて、自讃歌を召されてから百年後の或る人間がこれを輯錄したのである。この長い間隙に本物の自讃歌が散逸の運命を免れずにゐようか。

二つには作者等の年齡を調べるとすぐに矛盾が出て來るのでわかる。西行法師は建久元年に七十三歲で入寂したが此の年には後鳥羽院が十一歲にしか成らせられないのだから、院の召された自讃歌の中に法師の參加する事は出來得なかつた筈なのである。更に西行法師だけを除外して考へて見ても、他の作者が皆同時に生きてゐて同時に自讃歌を奉り得られるやうな都合のよい時は年代表上出て來ないのである。(わづらはしいから一々說明はしないが、それは寂蓮、良經、秀能、宮內卿、俊成等の年齡や死んだ年を比較して見るとわかる。)そんな都合のよい時があると强ひて推定するならばそ

れは寂蓮法師入寂のすぐ前の建仁元年又は二年の頃あるのみであるが、その頃には藤原秀能がまだ十八歳位にしか成らないのだから大分無理があるやうである。

その三つは定家の明月記に此の自讃歌の事が何も書かゝれてゐない事である。

斯ういふ次第で私は所謂自讃歌を後人の假托と推論するに憚らないのであるけれども、それにしても此の自讃歌なるものは隨分よく考へて上手にこしらへたものだ。第一には時の主な歌人十六人の選定がかなり適切である。新古今集の作者の內で最も光つた連中を先づ集め盡した觀がある。漏れた者があるとすれば有名な鴨長明と和歌所開闔の源家長と、それから女流の宜秋門院丹後ぐらゐなものであらう。自讃歌各首の撰擇も尤もらしく出來てゐる。すなはち何人も異存のない秀吟佳作を擧げると共にかなりの惡作をも平氣で取つてゐるのである。この平氣で惡作を自讃することが本人で無いと一寸出來にくい藝當なのだ。人情の機微な此の點を自讃歌の僞作者は悧巧にも利用したのであらう。一人一人に就いて觀ると、太上天皇（後鳥羽院）、式子內親王、

藤原秀能のが最も上手に選ばれてあり、慈圓大僧正、家隆のが最も下手に擇ばれてゐるやうに思ふ。

附記するが、最近「東野州聞書」を披見したところ、「自讃歌の事、西上人此人數也。是尤不審。その故は、此上人建久元年往生あり。」と不審を述べ、それに對し、「上人於此道者平懐なり。去間毎度自讃の歌あり。是を被聞置て今御人數たる歟。」と答へてある。乍併、こんな空漠たる答では自讃歌の眞を立證するに足りない。（大正十二年三月稿）

新勅撰和歌集私觀

新古今集に對して千載集は序曲の、新勅撰集は終詞の關係に立つ。從つて、三者を通覽してはじめて新古今集の價値が明瞭になつて來る。私が此の新勅撰集といふ、世間から多く顧みられざる歌集を敢へて檢討しようとするのは右の必要からに外ならな

い。

「纎巧の致を極め絢爛の趣をつくした新古今の後には、却つて平明な風體が尙ばれるやうになり、定家自身の撰んだ新勅撰に於いても其の傾向が見えることは、既に諸學者が說いてゐる」と津田左右吉氏もその著「我が國民思想の硏究」のうちに書いてゐる。まことに、新勅撰集の歌を目して新古今集の華麗體に對する反動としての平明又は平淡の風體とするは後來の學徒の一致した意見らしい。

私はこの論に對して異議を持つ。譬へば新古今集を絢爛無比の彩色畫とすれば、新勅撰集も同一の設色法を取つたのであるけれども、肝腎の繪具が古びて變質したためか、又は畫工の腕前が劣つた爲めか、同一の效果を齎らし得なかつた迄である。此の出來そこなひの彩色畫を目して初手からの淡彩畫であり或は墨畫であるかのやうに思ふならばそれは鑑賞者のあきめくらに過ぎない。新勅撰集は新古今集からの轉換にはあらずして、影うすれ調低まつた新古今集に外ならないのである。强弩の末勢なのである。

誰が垣根そことも知らぬ梅が香の夜半の枕に
なれにけるかな　（式子内親王）
荻の葉にふきとふきぬる秋風の涙さそはぬ夕
ぐれぞなき　（入道前太政大臣）
ふるさとの庭の日影もさえくれて桐の落葉に
霰ふるなり　（家隆）
大原は比良のたかねの近ければ雪ふる程をお
もひこそやれ　（西行）
うたたねのはかなき夢のさめしよりゆふべの
雨を見るぞ悲しき　（親宗）
これのみと伴なふ影もさよふけて光ぞうすき
窓のともし火　（道助法親王）

都いでて伏見を越ゆるあけ方はまづうち渡す

ひつ河の橋　（俊成）

足柄の關路こえゆくしののめに一むら霞むう

き島が原　（後京極攝政）

此の種の平明平淡な作は數へるほどしか無くつて、全卷千三百七十餘首の九分通りは新古今集の內容と表現形式とを息せき切つて追ひかけてゐる。さうして、見事に追ひ着いたものはほんの少數しか無い。

住吉の松のあらしも霞むなり遠里小野の春の

あけぼの　（覺延）

いく里か月のひかりもにほふらむ梅さく山の

峯の春かせ　（家隆）

けふみれば雲も櫻もうづもれて霞みかねたる

みよし野の山　（おなじく）

高砂のをのへの花に春くれて殘りし松のまがひゆくかな　（後京極攝政）

槇の戶をさゝで有明になりゆくを幾夜の月ととふ人もなし　（おなじく）

山里は秋のすゑにぞ思ひ知るかなしかりけりこがらしの風　（西行）

あけわたる雲間の星のひかりまで山の端さむしみねのしらゆき　（家隆）

旅ごろもかへす夢路はむなしくて月をぞ見つる有明のそら　（有家）

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくもの

はわが身なりけり（入道前太政大臣）

久方の雲居に見えしいこまやま春は霞のふもとなりけり（後京極攝政）

新勅撰集は後堀河天皇の貞永元年十月の撰進で、撰者定家はその時七十一歳であつた。此の撰集が新古今集の彊弩の末勢に過ぎないとする私の所論は定家みづからの歌の傾向及び自選の態度からも裏書せられる。やや大膽な言ひ方ではあるが、定家の歌は生涯を通じて同一の傾向で終始し、年齢と境遇とに從つて變化するといふ事は殆ど認め難い。拾遺愚草に就いて仔細に調べて見ても、新古今集撰進の元久二年より以前の作とその後の承元、建保、承久等の作との間に基調の變化といふ程のものは無い。新勅撰集奏覽の年なる貞永元年の百首歌（關白左大臣家百首）すらも同樣であつて、此の百首と處女作の初學百首（養和元年、二十歳の作）との間に如何ほど表現形式の差異が存在するか、何人も明瞭には答へ得ない。此の生一本の無變化は善かれ惡かれ

定家その他當年の主なる作家達の特質であつたと言つてよい。それから、新勅撰集の中に定家の自選した歌は左の十五首である。

名もしるし峯のあらしも雪とふる山さくら戸のあけぼのの空

久方のかつらにかゝる葵草そらのひかりにいくよなるらむ

天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

明けば又秋のなかばも過ぎぬべし傾く月のをしきのみかは

しぐれつつ袖だにほさぬ秋の日にさこそ三室の山は染むらめ

散りもせじ衣にすれるささ竹の大宮人のかざす櫻は

松が根を磯べの浪のうつたへにあらはれぬべき袖の上かな

戀死なぬ身のおこたりぞ年へぬるあらば逢ふ夜の心づよさに

こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくや藻しほの身もこがれつつ

くる夜は衞士のたく火をそれと見よ室の八島も都ならねば

あふ事はしのぶの衣あはれなどまれなる色に亂れそめけむ

たれもこのあはれみじかき玉の緒に亂れても

のを思はずもがな

忍べとや知らぬ昔の秋をへておなじかたみに

殘る月影

をさまれる民の司のみつぎものふたたびきく

も命なりけり

ももしきのとのへをいづる宵々は待たぬにむ

かふ山の端の月

これでもわかる。新古今そのままの風體であつて、平明とか平淡とかいふやうな境地には一歩も踏み入れてゐない。若しも從來の說の如く建保承久以後の風尙が華麗體に對する反動として平明體を辿らうとする傾向を持つたとしたならば、聰明なる彼れ定家がそれを看取しない筈はない。若しも定家がそれを看取したとしたならば、彼れ

の自選歌の中にもつと平淡な趣致の作を取り入れなかつた筈はない。何となれば、幽玄麗様有心の體を生涯の本道とした彼れ定家とても、さすがに時として頗る平明平淡な歌を作らないのでは無かつたのだから。

秋の夜は雲路をわくる雁がねのあとかたもなくものぞ悲しき

霜さゆるあしたの原の冬がれにひと花さける大和なでしこ

しばしとて出でこし庭も荒れにけり蓬の枯葉すみれまじりに

ながむれば松より西になりにけり影はるかなるあけがたの月

夕立の雲間の日かげはれそめて山のこなたを

わたる白鷺

蟲の音はねざめの夢におぼえつつ秋の春にも
なりにけるかな

いたづらにをり松焚きてふけし夜もなほ九重
のうちぞ戀しき

このごろは霜雪だにもおち散らぬ冬のみ山の
晝のさびしさ

拾遺愚草を繙けば此の類の歌の五六十首はある。これ等の作を一首も自選しなかつた處から視ても、定家が新勅撰集を撰んだ際の態度と標準とはおのづから推測出來るのである。くりかへして言ふが、新勅撰集は影うすれ調低まつた新古今集に外ならないのであつて、決して元久以前の風尚に對する反動といふやうな積極的意義のあるものでは無い。絢爛華麗の極にのぼりつめた藝術の必然の運命としてここに早くも頽

の兆を現じ來つたものに外ならない。

餘談に亙るが、新勅撰集の主要作者は定家、家隆、良經、慈圓、俊成、西行、雅經、式子內親王、丹後、讃岐といつたやうに依然として新古今集から引きつづきの面々である。新人としては道助法親王、實朝、爲家、知家など。又めづらしい名前では北條泰時、建禮門院右京太夫、承明門院小宰相（家隆の女）、それから一代の畫聖信實など。（大正十三年三月稿）

南北朝時代の和歌

一

私がここに南北朝時代の和歌といふのは足利尊氏が光明院を擁立した延元元年から後龜山天皇遜位の元中九年に至る約六十年間のそれを指すのである。此の時代の文學

は主として太平記、神皇正統記、徒然草、新葉集、李花集、菟玖波集等によつて代表せられるのであるが、これら以外にも風雅集、草庵集、增鏡、吉野拾遺、義堂絕海等の漢詩などがある。又、刀工正宗あり、甲冑工明珍あり、畫僧雪村あり、兆殿司の佛畫や觀阿彌の能樂も此の時代の末葉に至つて大成に近づきつつあつたのである。斯うして觀ると、とにかく我が國の藝術の歷史に於いて相當の一時期であるし、とりわけ南北兩朝抗爭の世相を背景としてその文學を鑑賞する時、感興は一層深まつて來るのである。私は只今から、和歌を中心として當時の文藝を觀察しようとする。

南朝の和歌、北朝の和歌と區分して考察しようと思ふけれども、それは便宜上の事であつて、嚴密にいふならば、歌壇といふ纏まつたものとして視る時はそれは北朝の方にのみ存在してゐたのであつた。何となれば、當年の職業的歌人輩は悉く政治上の實權者の方に阿附したからである。

これよりさき伏見、後伏見、後二條、花園の頃に亙つて世間を騷がせた二條京極兩

家の確執、すなはち爲世爲兼の歌道本家爭ひは終に前者の勝利と成つて結末を告げてしまつた。爲世の女の權大納言局が皇太子尊治（後醍醐天皇）の寵を得るに至つて愈々さう定まつてしまつたのである。然るに爲世及びその子孫なる二條家の歌人達は、彼等が積年寵遇を忝うした大覺寺統の天子の南山に巡狩せられた際にも、誰一人としてお伴をしなかつたのであつた。これには種々の譯があつたのであらうが、由來低劣な爲世の人格もおそらくはその原因の一つであつたらうと想像せられる。增鏡第十九の中の爲定中納言勅勘の條などもその邊の消息を物語つてゐるやうだ。

斯うした次第で、和歌の師範家は北朝に從屬して京都に留まつた。當時の主なる歌人等は大抵直接又は間接に二條家の流を汲んでゐた。所謂四天王もさうであつた。攝關家の二條良基もさうであつた。光嚴院等の高貴の方々もさうであつた。足利將軍家の人々も、その幕下の武將達も、夢窓國師までも、皆爲定等の門に入つて、あやしげな三十一文字を並べたのであつた。つまり、後世から見れば歌よみの水平線にさへ出

てゐない御子左家の世襲歌人輩が、時のめぐり合せと巧妙な處世術とによつて、當年の歌壇を領略してしまつたといふ有様なのである。

北朝の歌人から數へ擧げて見ると、師範家の人々では、爲世は光明院の擁立せられた延元元年には既に八十七歳の老人であつたからさて措くとして、第一には、爲世の孫の爲定がゐる。二條家の嫡流なる此の人は續後拾遺及び新千載の兩勅選集の撰者であつて、言ふ迄もなく歌壇の重鎭である。次には新拾遺集の撰者爲明（爲世の孫）、新後拾遺集の撰者爲遠（爲定の子）、おなじく爲重（爲世の孫）などがゐる。冷泉家の爲秀も居つた。今川了俊はその門に出たのである。師範家以外の專門的歌人では頓阿、兼好、淨辨、慶運、所謂四天王がゐる。公卿には洞院公賢、二條良基がゐる。武人ではあるがむしろ歌人として著名な了俊今川貞世がゐる。高貴では花園法皇、光嚴院、光明院、御家流の祖靑蓮院尊圓法親王などがあらせられる。將軍家の人々では、尊氏はじめ直義、義詮、直冬、基氏など。武將でともかく歌を作つた連中には細川和氏、

同頼春、同顯氏、桃井貞頼、さては高師直までが控へてゐる。高野山金剛三昧院短冊なるものの裏書を見ると、聊か恐縮させられるが、これ等の面々が「二十餘輩之歌人」と書かれてゐるやうな次第だ。藥師寺公義薙髮して元可法師なども太平記(卷第二十九)で見ると相當のよみ口であつたらしい。良基の近來風體抄にも「藥師寺など歌よみの名取り侍りし」と書いてある。

北朝の歌集としては風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺の四勅撰集を主とし、なほ私の撰集や歌合の類も相當にあつたらしい。家の集も數々遺つてゐるが、目ぼしいのは光嚴院御集、頓阿法師の草庵集ぐらゐであらう。又、和歌に關する雜筆として頓阿の井蛙抄、水蛙眼目、良基の近來風體抄、愚問賢註、了俊の落書露顯、和歌所へ不審條々、了俊辨要抄など著名である。

歌よみの頭數と著作の冊數とから見れば北朝の歌壇は戰國にも似合はぬ賑々しさであるけれども、これを質の上から檢討するに、歌人として多少なりと吾人の興味を引

き得るものは頓阿法師と光嚴院ぐらゐに過ぎない。師範家の人々に對する概評としては近來風體抄に「爲定大納言は極めてけたかく、ゆる〳〵とたけありて、しかも又もみ〳〵とある方も出で來けるにや、凡天下偏執もなかりし上手なり。爲明卿は生得に面白き樣にはなかりしかども、まことの道の人と思ふやうなる歌を詠み侍りしなり。ただしく聊か古體に長あるさまに侍りき。爲秀卿、これは格別のふてい一流の詠歌、又あらぬさまに侍りしなり。爲重卿は近來の堪能なり」と言つてゐるが、御子左流を至上のものに思つた當時の良基としては尤もな言ひ分であるけれども、後世の我等から視れば何の事も無い。

良基は極めて博識多藝であつたが、その和歌は一向に振はぬ。彼は莵玖波集の撰者、筑波同答の著者として連歌史上に永くその名を留めるより外は無い。了俊は當時としては最も自由な、進步した考の持主であつたけれども、作品は議論ほどにも無いらしい。畢竟、作家で無くて見識家であつたのだ。兼好法師集は徒然草の作者たる面影を

何處にも偲ばしめないほど退屈な歌集である。淨辨父子、これ亦月並の歌よみに過ぎぬ。これ等の歌僧は西行、寂蓮、慈鎭等から見れば味噌擂にも芋掘にも値しない程度の所化である。さすがに頓阿のみは稍見どころがある。彼は爲世の高足で、良基はじめ數多の門下を持ち、事實上二條流の中興者であつた。新拾遺集の撰者爲明が半途で亡くなつた時に彼はこれを引き繼いて完成した。當年の歌壇に最も重きをなしつつ、後小松天皇の至德元年（南朝の元中元年）三月十三日、双林寺に於いて、八十四歲の長壽を以つて入寂した。その作は極ね舊來の花鳥風月を二條流の技巧で取り扱つたものに過ぎないのであるけれども、どこかに寂びのあるのがよい。草庵集は後世永く歌壇の寶典の一つと考へられたものであつて、本居宣長の如きすらこれに對する興味に深入しすぎた時代があつたのである。佳作數首を擧げて見よう。

かしこきや谷に夕ゐる白雲のなかにぞ落つる

木曾の山川

芦の葉に夜の雨きく港江の浪の枕をいかであかさむ

さびしさは思ひしままの宿ながらなほききわぶる軒の松風

月やどる澤田のおもにふす鴫の氷よりたつあけがたの空

つもれただ入りにし山の峰の雪うき世に歸る道のなきまで

近來風體抄に頓慶兼三人を評して、「頓阿はかかり幽玄に姿なだらかにことごとしくなくて、しかも歌毎に一かどめづらしく、當座の感もありしにや、慶運はたけを好み、もの寂びて、ちと古體にかかりて、姿心はたらきて、耳に立つさまに侍りしなり、爲定大納言はことの外に慶運をほめられき、兼好此の中にちと劣りたるやうに人々も存

ぜしやらん」と書いてある。これ以上に言ふ事は無い。

光嚴院の御一生は太平記のところ〴〵の叙述をつなぎ合せて纔かに想像し得るに止まるのであるけれども、その御性情には如何にも抒情詩的のもの悲しさとやはらかさとが有つたらしく思はれてならない。武家の爲め擁立され給ふたのは迷惑至極に思召されたに相違ない。覇氣や鬪志などは夢々御持ちにならなかつたのであらう。伏見院の御忌日に關東武士の狼籍に遇はれた事件といひ、正平七年の賀名生の幽閉といひ、御晩年に抖擻行脚で吉野の行宮を訪はせられた事といひ、丹波の山奥での御終焉といひ、すべて北朝の君臣の中で此の御方ほど私の詩的空想を刺戟する人物は無いのである。院御集の中から

山松の木末をわたる夕あらし軒の檜原に聲落ちぬなり

庭の日は木かげも見えず照りみちて風さへぬ

るみ暮れがたき頃

旅にして妹の戀しみながめをれば都の方に雲

棚引けり

總じて御集の歌の風格は幼く素直なところが特色であるやうに思はれる。太平記卷第三十九に出てゐるところの

たれ待ちてみつの濱松霞むらむわが日の本の

春ならぬ世に

もよい歌であるが、御集の中には見當らない。又、風雅集に載せられてゐる御製の中にも佳調が乏しくない。

將軍家の人々及びその武臣等の歌は全く論ずるに足らぬ。等持院贈左大臣御集といつて尊氏の集が遺つてゐるけれども、あの英雄が斯樣なお稽古歌を樂しみにしてゐたのかと思ふとむしろ可愛らしくなる位なものだ。二代の義詮にも寶篋院殿百首や住吉

詣の紀行文などが遺つてゐるが、いづれ劣らぬ檀那藝に過ぎない。南北朝の武人達は大抵三十一文字を作つてゐるが、さすがに大楠公丈けは堅く自己の領城を守つて、餘計な手出しをしてゐない。太平記湊川合戰の條に、

疑は人によりてぞ殘りけるまさしげなるは楠木が首とあるが、これは他人の落首であつて、正成の辭世では無いのである。

北朝の勅撰集は前述の通り四種あつて、戰亂の世にも似合はしからぬ賑々しさであるが、これは二條家の歌人達が自家の勢力を維持せんが爲めみだりに奏請した結果であらうとも想像せられる。四つの集共に露骨に北朝の君臣の歌の撰集であつて、唯後醍醐帝や源具行などのものが見えてゐるけれども、これは撰の當時既に此の世には居られなかつたのでさしつかへ無いものとせられたのであらう。これらの撰集いづれも尊氏、直義、義詮などの駄作を澤山に載せてゐるのは目障り至極である。これに比べれば、鎌倉幕府方の歌を入れて宇治川集と綽號せられた定家の新勅撰集の方がどれ位

ましであるかわからない。論ずるに値するものは貞和二年十一月花園法皇御撰の風雅集のみである。

風雅集の價値は、當時の他の集に比べてのみならず、十三代集の中でも目立つて清新な歌のある事と自然の描寫の素直なものがある事との二つであると思ふ。

朝あらしは外面の竹に吹きあれて山の霞も春さむきころ

きり〲す聲はいづくぞ草もなき白洲の庭の秋の夜の月

寒き雨は枯野の草にふりしめて山松風の音だにもせず

時しらぬ宿の軒端の花ざかり君だに訪へな又たれをかは

かくしてぞ昨日も暮れし山の端の入日のあとに鐘の聲々　（以上永福門院）

沈み果つる入日のきはにあらはれぬ霞める山のなほ奥の峰

松を拂ふ風は裾野の草に落ちて夕立つ雲に雨きほふなり

庭の虫は鳴きとまりぬる雨の夜の壁に音するきりぎりすかな

ふき冴ゆる嵐のつての二聲に又はきこえぬあかつきの鐘

大空にあまねくおほふ雲の心國土うるほふ雨くだすなり　（以上爲兼）

唯、右の例でもわかる通り、此の集の佳什の大半は伏見天皇の中宮永福門院及び京極爲兼の二作者のものである。さうして、爲兼は七十九歲で元弘二年に、永福門院は七十二歲で康永元年に世を去られたのであるから、南北朝時代の歌人といふには共に聊か當らぬやうだ。して見ると、純然たる北朝歌人等の集として風雅集を觀る場合には、かなり割引して評價せねばならぬ事になつてしまふ。

井蛙抄、近來風體抄、落書露顯の類の雜筆に對しては多少の歷史的興味を持ち得るに過ぎない。

二

南朝の和歌は北朝のそれに比べて根本の點が相違してゐるのであつて、そこに極めて意味深い對照を見出す事が出來るのである。

先づ、北朝には師範家の人々を初めとして多數の職業的歌人が居つたのであるが、

南朝にはそれが殆ど見當らない。宗良親王は新葉集の撰者、李花集の作者として我が文學史上に不磨の足跡を印された方ではあるが、申す迄もなく作歌を業とはしてゐられなかつた。北畠親房も文を作り歌を詠じたが、本來誠實な政治家であつて、そこにみづからの生命を見出してゐる。文筆は彼に取つて手段に過ぎなかつた。耕雲口傳、源氏物語抄等の著者花山院長親のみは一應專門歌人と見られさうであるが、それも調べて見ると、歌道に沒頭したのは元中九年後龜山天皇に供奉して入洛、薙髮して耕雲と號し、華頂山下に隱栖してから後の事であるらしい。そこで、南朝の歌人としては後醍醐、後村上、長慶三帝をはじめ、尊良、宗良、仁譽の諸親王、新待賢門院、嘉喜門院、文貞公師賢、四條隆資、北畠親房、冷泉入道前右大臣、花山院長親といふやうに幾多の人々があるけれども、非職業的歌人ばかりなのであつた。

次は、南朝には、北朝と異なつて、歌壇といふやうな纒まつた舞臺の無かつた事である。中心と成るべき師範家の歌人は一人もゐなかつた。皇居こそ吉野の山中に、或

る時は河南の寺院に、儼存したけれども、皇族も公卿も武臣も西は九州から東は奥羽に亘つて轉戰し、離合し、撰集の沙汰や歌文の研究に耽り得るやうな長閑な境涯には居らなかつた。神皇正統記の如き長篇の史書すら敵中の孤城で書かれたのでは無いか。所謂歌壇の出來ないのは當然の當然である。職業的歌人も無く、歌壇も無く、さうして其處に、生活の緊張（すなはち深い體驗）と感情の純眞とから幾多の美しい詩歌を生み出した事が我が南朝の文學の特色なのである。勿論、南朝三帝とも斯道には堪能であらせられた。兵馬倥偬の間に於いても歌合等の催は折にふれて行はれたやうである。新葉集の歌の詞書にあらはれてゐるもの丈けでも正平八年内裏千首、正平十六年内裏百首、文中四年内裏五十番歌合、天授元年内裏五百番歌合、天授二年内裏百番歌合、年未詳住吉三百六十番歌合など相當に頻繁では有つた。

南朝の和歌の代表としては新葉集と李花集とに就いて語ればよいのは申す迄も無からう。新葉集は我等大和民族の美點を極度に發輝した人々の血涙の文字である。後醍

醐天皇の皇子宗良の撰にかゝり、後龜山天皇から準勅撰のみことのりを拜したので、更に訂正補修して弘和元年十二月に上進せられたのである。時に親王御壽七十であらせられた。歌の數は二十卷千四百首、序文にも「一ふしの取るべきあるをばこれを捨つる事なしといへども、四方の海の浪の騷ぎも、こよろぎのいそとせに及べれば、家々の言の葉風に散り、浦々の藻汐草かきもらせるたぐひも又なきに非るべし」とある次第だから、これ丈けの撰を完うせられたのは非常に困難な仕事であつたに相違ない。北朝の方には數次勅撰の沙汰があつたのだけれども、いつも南朝方の作者のものは採り入れなかつた。これに對する親王の義憤が此の集を思ひ立たれた動機であるらしい。

これは雜歌中に

いかなれば身はしもならぬ言の葉の埋もれて
のみきこえざるらむ

といふ親王の御作の詞書に「世の中あらたまりて後風雅集などとて撰集の事あるよし

聞えしを今はまして作者に加はるべきにてもあらぬ事など思ひつゞけて」とあるのからも推察出來る。であるから、新葉集の內容は勿論全く南朝の君臣宮女等の作ばかりである。さうして、古人の作は一首も採られてゐない。此の、撰集から古歌を除外し去つたといふ事は和歌史上新葉集のいちじるしい特色なのである。古今集以降世々の撰集には、當時から五十年も、百年も、或は三四百年も以前の古歌が必ず多數に取り交ぜられてゐる。これが常にその各の撰集の內容の統一性を破壞して、後世の讀者に徒らに不快な印象を與へるのだ。私は、毎度いふ事であるが、新古今集から人麿赤人等の作を悉く抹消して貰ひ度かつたのである。我が宗良親王は非凡の見識を以つて新葉集には古人の作の混入する事を一切許されなかつた。爲めに、めづらしくも此の撰集のみは渾然たる內的統一を持つてゐる。これは見落してはならない點だ。それから、此の集の歌の大多數は逆境に苦鬪した人々の悲壯な記錄であつて、現代の言葉でいへば作者の生活の告白なのである。ここに此の集の特異な生命の存する事は何人も承知

してゐよう。例へばそれが普通の花鳥風月を題材とした歌の場合であつても、他の撰集のそれの如き遊戯的の心持では歌はれてゐない。

吉野山みねの岩角ふみ鳴らし花のためにも身をばをしまず　（仁譽法親王）

櫻花は古來最も多く詠みふるされた歌の題材の一つであるけれども、未だ曾て此の一首の如く緊張した歌ひ振りのものは見當らない。

梓弓春の日くらし見てもなほ歸るはをしき花のかげかな　（忠成）

この場合、梓弓は春の枕詞だと簡單に片付けてはならない。弓矢手挾み吉野內裏の御階を守れる此の作者に取つては、一見平凡陳套な此の表現法もやがて無限の切實性を帶びて來るのである。

新葉集の作者數十人のうち最も光つてゐるのは後醍醐、後村上、尊良、宗良、文貞

公、冷泉入道前右大臣の五六人であらう。

ここにても雲井の櫻咲きにけりただかりそめの宿と思ふに　（後醍醐）

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥のさみだれの頃　（同）

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて袖に烈しき山おろしの風　（同）

都をもおなじ雲井と思はずば旅寢の月をたへて見ましや　（後村上）

わが末の世々に忘るな足柄や箱根の雪をわけし心は　（同）

仕ふべき人や殘ると山深み松の戸ざしもなほ

ぞ尋ねむ　（同）

わが宿と賴まずながら吉野山花に馴れぬる春もいくとせ　（長慶）

聞きなるる契もつらし衣うつ民のふせやに軒をならべて　（尊良）

山深きかぎりと思ふみ吉野をなほ奥ありと月は入りけり　（仁譽）

忘れめや御垣に近き丹生川のながれに浮きてくだる秋霧　（冷泉右大臣）

君を祈る道に急げば神垣にはやとき告げて鳥も鳴くなり　（國貴）

君すめば峰にもをにも家居して深山ながらの

都なりけり　（爲忠）

君がためわが取り來つる梓弓もとの都にかへ

さゞらめや　（隆）

日にそへて遁れむとのみ思ふ身にいとど憂世

の事しげきかな　（懷良）

患あれば聞くこといとふわが身とも知らでや

ここに鶯の鳴く　（師賢）

思ふことなくてぞ見ましほのぼのと有明の月

の志賀の浦浪　（同）

思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世

もたゞ君のため　（同）

乍併、斯様の拔書に依つては我が新葉集の面影さへ窺ひ得ない。此の集は諸君の、

和歌に興味のあるなしに拘らず、諸君の通讀を要求する價値を持つてゐるのである。歌書よりも軍書に悲し吉野山、此の市井の一俳人は蓋し講釋師の太平記に傾聽して新葉集をよくも讀まなかつたのであらう。

宗良親王の家集李花集は上下二卷に別れて約九百首の歌を收めてゐる。此の外に宗良親王千首(天授二年)なるものが遺つてそれにも佳作が少くないのであるけれども、先づ李花集を以つて親王の作を代表せしめて事實上さしつかへは無い。

旅の空浮き立つ雲やわれならむ道もやどりも
あらし吹く頃

まことに親王の御一生は風に吹き立てられる浮雲の如きものであつた。九重の都はおろか、吉野の假宮にさへ永くは足を留め給はず、七十餘年の生涯の大半を或は讃岐の田舍に、伊勢の山奥に、遠州の孤城に、駿州に、甲州に、或は越後に、越中の荒磯邊に、或は信濃伊那の深谷に、かつ戰ひ、かつ遁れ、隱れ忍びつつ過ごされた。西行、

宗祇、芭蕉の漂泊は所謂人やりならぬ道であつて、そこに餘裕と徊徊とがある。我が宗良の旅生活は左樣な贅澤なものでは無かつた。李花集は此の悽壯な漂泊の歌日記である。就中、信濃宮の御名に負ふ如く最も長く辛苦を嘗めさせられた信州滯在中の作と、越中名古浦の羈旅百首とは、承久の天子の隱岐の御製、延元の帝の吉野の御歌に並べて孰れとも言ひ難い哀音である。

信濃にて

霞めただいづれ都の境とも見ゆべき程の旅の

空かは

かからずばわれ聞かましや時鳥すがの荒野の

今朝のはつ聲

思ひやれ木曾のみ坂も雲閉づる山のこなたの

五月雨の頃

名にしおふ姨捨山にてる月も雲井の秋を見し
ごとはあらず
よそにのみ聞きし信濃の麻衣はこの里に打つ
ものにぞありける
諏訪の海や氷をふみてわたる世も神し守らば
あやふからめや

越中にて

あやめ引く今宵ばかりや思ひやる都も草の枕
なるらむ
都には風のつてにもまれなりし礁のおとを枕
にぞ聞く
都にもしぐれやすらむ越路には雪こそ冬のは

[illegible]じめなりけれ

おぼつかないかなる山ぞみ吉野の奥だに人のつてはありしを

かぢ枕夢路は通ふ舟もなしねぬ夜の浪の音ばかりして

それから

君がため世のためなどか惜しからむ捨てて甲斐ある命なりせば

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふしわが身馴れむものとは

などは人口に膾炙してゐる。花鳥風月の御歌にも技巧から見て相當のものが多いけれども、これは必ずしも親王の本領で無いから割愛してよからう。戀歌の部に、題詠に

あらざる、告白的の御作が尠からず見える。例へば、

人をうらみわびて詠める

われはかり先づ戀ひ死なば來む世にも人を待

つ間や久しかるべき

それから、同じ世につれなく長らへて侍る由など人に申し遣はす次に、思へどもつらき人に申し遣はし侍りし、恨みかねて人に申しつかはし侍りけるといふ類の詞書ある御歌どもがいづれもそれである。親王がやさしい心の持主で居られた事が何と無く想像出來るやうで悅しい。

親王と二條家との關係に就いても是非一言せねばなるまい。御母儀は爲世の女の權大納言局（贈從三位爲子）と言はれた方であるから、親王は爲世の孫にならせられ、爲定とは近い血緣に當らせられる譯である。爲定は正平十五年三月十四日に薨去したが、此の人と親王との交渉は前者の晩年まで續いたのであつた。御自作の千首を爲定

に見させられたり、越中や駿河などの御旅先から遙かに和歌の應酬を試みられたり、又は此の人の訃を遠州井伊城で傳聞せられた時には哀傷五十首を爲遠（爲定の子）の許へ遣はされたりして居られる。その五十首の中に、

鶯となきてぞわぶる今はわが古巢に殘る人もなき世に

しるべせし人に後れて敷島の道にはひとりわれや迷はむ

和歌の道の絕えぬと聞けばなき跡の悲しきなかになほぞ悲しき

京都（古巢）に於ける故舊はこれで皆亡くなつてしまつたと親王は嘆いて居られる。又、爲定の死と歌道の衰滅とを同一視されてゐるが、これは弔詞としての誇張であるとするも、ともかく二條家の血筋を引いた親王としては歌道の上でもおのづからその

流儀に深い親しみを持つて居られたに相違ない。斯うして、北朝の師範家の歌人と南朝の皇室歌人との間に永く心持の上の交渉の有つた事は、當時の世相を知る上の參考としても注意に値する。

爲定のついでに、今一人二條家の歌人で南朝に關係の有つた爲冬の事を話さねばならぬ。爲冬は爲世の末子であつて、增鏡によると、父の秘藏兒であつたらしい。彼は建武二年十月尊良親王の東征に從ひ、尊氏の軍と箱根竹下に戰つて討死を遂げた。その家集一卷今日遺存してゐるけれども、惜しい哉未成品で終つたので、言ふべき程の佳什を持たない。もう一人、それは爲世の孫で新拾遺集の撰者たる爲明である。此の人は元弘元年五月北條氏の嫌疑を蒙つて六波羅へ捕へられ「思ひきや」の歌の德で赦された事は、太平記卷第二に出てゐる有名な挿話である。加之、增鏡によると、彼は翌年三月尊良親王の土佐へ流され給ひしにも供奉してゐる。斯樣に爲明は後醍醐天皇の方に關係深かつたのであるけれども、吉野潛幸にはお供せずして、その後永く京都

に留まつた。

新葉集の作者の一人花山院長親は文貞公師賢の孫で、南北朝合一の後は京都に移住し、剃髮して耕雲と號したが、晩年遠州に寓居し槇谷の耕雲寺で入寂したと傳へられてゐる。耕雲口傳を見ると、了俊よりも更に進步した、徹底した考を持つてゐたらしいが、これも作者としては深く論議する程の價値は無い。耕雲千首なるものを試みに披いて見たが、とても陳套の、御子左流のくされ歌ばかりであつた。晩年には或は相當の作が有つたのかも知れないが、南北朝とは時代の交涉が薄くなるから、其處までの穿鑿は止めにしよう。

終りに臨み約言すれば、我が南朝の和歌の文學史的意義は、生活の緊張と感情の純眞とから生み出された非職業的詩歌が職業歌人の弛緩した製品を壓倒し去つたといふ著大な事實に歸着する。斯うした觀方をすると、李花集や新葉集は遠く遡つては飛鳥藤原の古文學のながれを汲み、遙かに降つては大正の今日の和歌に、或る意味に於い

て、えにしの絲を引くものと言ひ得るのである。（大正十三年八月稿）

喰はず嫌ひ

「短歌雜誌」八月號に「萬葉の種々相」と題する花田比露思氏の文、これは啓蒙の目的で書かれたのであらう。氏は人間としても、また萬葉研究者としても、現歌壇に於いて稀に見る眞面目な、質實な人として私は夙くから敬意を拂つてゐる。唯、此の文の中に「迚も古今や新古今の」とか、「迚も後世の」とかいふ辭のくり返されてゐるのは、啓蒙の目的から言つても、無い方がよいのである。太陽がえらく光つてゐるからその他の天體は天體で無いといふ事には成らない。苟めにも一民族の文學史上に一時期を劃してゐる産物は、個人の好惡は別として、その時期の背景その他と相俟つて、研究され、鑑賞され、尊敬されねばならぬ或る物を必ず持つてゐるのである。（これは

餘りにわかりきつた事ではあるが。）萬葉集以外のものは讀むに及ばぬといつたやうな言動は、花田氏みづからには能く理解されてゐても、先輩の言動をそのまま受け容れようとする多數の無垢な後進に取つては、不深切な結果に成りはせぬかとおそれる。氏は萬葉集をプラトンの哲學に譬へて萬有を具藏してゐると言ふ。乍併、擧足を取るやうですまないが、文學書は百貨店で無い限り「何でも御座る」といふ事が必ずしも强味には成らない。何も無くつて、唯一つ有る方がよい事も往々あるのである。私は神曲の中に二十世紀の思想問題の一切が取り扱はれてゐるといふ話を或るダンテ學者から聽いた事がある。又、「リヤ王」の或る場面に十九世紀後半の社會主義運動が夙くも絕叫されてゐるのだといふやうな論を詩人スヰンバアンの或る著書で讀んだことがある。斯ういふ事を言ひ出すと、何かしら大きな事件を解決したやうに見えて、實は何にも成らないのである。ダンテと沙翁で當來の勞働問題が片付くと信じてゐる迂愚な人間は今時居ない筈だ。プラトンが偉大だからと言つて、カント以降の近世哲學が

無用だといふ歸結にはならない。

見馴れ、聞き馴れ、なまかじり、

小僧鵜呑みの萬葉集。

といふ變手古な俗謠がもしも歌壇の一角から流行り出すものとしたら、對角線の一隅から

見ざる、聞かざる、かじらざる、

食はず嫌ひの新古今。

といつたやうな變手古な返歌が唄はれる事に成るであらう。（大正十三年九月稿）

千五百番歌合に就いて

國文學史上空前絶後の大歌合なる千五百番歌合に就いて、その事實を述べ、觀察を

も下して見ようと思ふ。

此の歌合は土御門天皇の建仁元年七月、後鳥羽院の仙洞に於いて催された。作者三十人各人から百首歌を上らしめ、計三千首、これを千五百番につがひ、題は春二十、夏十五、秋二十、冬十五、祝五、戀十五、雜十、さうして太上天皇、良經、通親、慈圓、忠良、俊成、師光、季經、顯昭、定家の十人を判者とした。各人から召された百首歌の名稱は拾遺愚草には夏日侍太上皇仙洞同詠百首と書かれ、月淸集には院第三度百首と誌されてある。院第三度と言ふは、後鳥羽天皇が仙洞に移られてから正治二年八月に催された百首哥を初度と唱へ、同年内につづいて小規模の第二度百首あり、斯く數へて三度目の百首といふ意味である。すなはち、揭題の出來事は歌合としては千五百番と稱へられ、百首哥としては院第三度と呼ばれる。總べてこれ等名稱の事ははつきりと肚に入れて置かないと、研究の障碍に成るおそれがある。

此の歌合の歷史的價値と興味とを列擧すれば、一つにはそれが和歌史上最大の歌合

で、觀方によつては鬱然たる大歌集であるといふ事だ。抑も建仁元年は我等研究者の最も記憶すべき年であつて、二月に老若歌合あり、三月に甚日の歌合あり、七月には和歌所が置かれ、又此の千五百番歌合が催され、八月には十五夜撰歌合、十月には熊野御幸、十一月には新古今集撰進の院宣が下された。恁うした氣運の高潮時に在つたのだから、三十人の作者達の抱負と努力とは想見するに足りる。

二つには此の歌合の顏ぶれは後年の新古今集の作者達の主要なる者を網羅してゐる事である。見えないのは式子內親王、西行、長明、秀能の四人ぐらゐに過ぎぬ。西行はこれより十一年前に入寂。長明と秀能との召されなかつたのは身分の關係の爲めか。殊に後者は十八歲の若年でもあつた。さて撰び出された歌人達は數人の老齡者を除く外、いづれも中年期か、或はそれに踏み入らうとする、男盛りの連中であつた。作歌に最もあぶらの乘つた、それに懸命で打ち込んだ、名譽心に燃えた連中であつた。此の歌合の歌の見應へのするは必然の事である。書きおくれたが、その三十人の作者と

いふは、

左方

太上天皇	藤原良經	慈圓
藤原公繼	藤原公經	藤原季能
宮内卿	讃岐	小侍從
藤原隆信	藤原有家	藤原保季
藤原良平	源具親	顯昭

右方

惟明親王	源通親	藤原忠良
藤原兼宗	源通光	釋阿
俊成女	丹後	越前
藤原定家	源通具	藤原家隆

三つには此の歌合の歌が新古今集の最も主なる量的内容を成してゐるといふ事である。新古今集の歌の出所の主なるものを擧げると六百番歌合、守覺法親王家五十首、院初度百首、老若歌合、千五百番歌合、院八月十五夜撰歌合、水無瀨戀歌合、春日社歌合、最勝四天王院名所障子和歌などである。その中でも院初度と千五百番とが最多數を出してゐるのであつて、その數は兩者殆ど相如くと言つてよい。元久の勅撰集に取入れられた千五百番の歌は私の勘定によると七十六首である。流布本の撰集の詞書はかなり杜撰であつて、例へば「何々歌合に」と題してある歌で事實は左樣で無いものもあり、反對に又、何々歌合の歌なるに拘らず違つた表示のしてあるのもある。それで斯樣の勘定は頗る面倒であるが、右に私の數へた處は先づ正確と自信してゐる。恁うして、量から觀て千五百番が新古今集の内容の最も大切な出所であつたのみならず、質から言つても亦同樣に重きを成してゐる。一寸考へて見ても、

うすく濃き野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ　（宮内卿）

風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢　（俊成女）

あはれまたいかに忍ばむ袖の露野原の風に秋は來にけり　（通具）

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまがふ床の月影　（定家）

わが涙もとめて袖にやどれ月さりとて人の影は見えねど　（良經）

等の傑出した作が此の歌合から採られてゐる。乍併、精しく言ふと、質の點では院初度百首の方が勝つてゐはしないかと私は疑問を懷いてゐる。此の比較研究は後日に遣

して置き度いと思ふ。

四つには、定家を中心とする新勢力が此の歌合に至つて竟に確立不變のものに成つたといふ事實である。此の新勢力は、換言すれば後年の新古今集撰者及びその一統の實力は、千五百番歌合の前數年から阻止すべからざる勢で押して來つつあつた。千載集の撰者釋阿の信望はその晩年倍々加はつて來たに相違無いが、何分にも老境に入り過ぎてゐる。六條家の流は建久四年の六百番歌合から後も二條家の流に對して最後の抗爭を續けてゐたやうであるけれども、大勢は奈何とも致し方無い。それで和歌界の實權は當然釋阿の後繼者を中心とする新進の才人達に移らねばならぬ運命に在つたのだ。それはそれとしても、なほ隻手これを阻止しやうとする、運命知らずの野心家も不尠居つたに相違無い。それでこそ、院初度百首の際には、定家みづからさへその沙汰に漏らされはせぬかと痛く心配もし、憤懣もし、愈々その員に加へられる事が確定した時にはよその視る眼も可笑しいほど感激したのであつた。して見ると、院初度の

正治二年秋から千五百番の建久元年七月まで僅々一箇年間に於ける定家等が飛躍の程は想像に餘りある。和歌所最初の寄人十一人(良經、通親、慈圓、俊成、公經、有家、定家、家隆、雅經、具親、寂蓮)の大部分が新勢力の壯者達で占められた事もその現はれの一つであらう。實にや千五百番歌合に至つては、後年の新古今集撰者五人が顏を揃へたは勿論、院初度の作者に危く漏れようとした定家が此の度は判者にさへ推されてゐる。六條家の顯昭や季經なども判者に加へられてゐるが、それは過去の地位に對する敬意に他ならなかつたであらう。彼等の姿は、今や赫灼として光を放ち出した才人達の前には、薄暗い陰翳としか見えない。

五つには、此の歌合が俊成、通親、寂蓮、良經の四歌人の最後の努力(百首歌)を含んでゐるといふ事である。俊成は此の歌合の三年後に、良經は五年後に薨じたが、二人共にその家集を調べても、建仁元年以後には多くの作を遺してはゐない。寂蓮は翌年七月入寂。通親は此の歌合の擧を眼前にして薨じたらしい。「判者土御門内大臣雖

有勅定薨去畢」と註して無判の儘である。通親薨去の年月に就いては私は多少の疑問を持つてゐるが、今假りに歌合の傍註を信じて置く。此の人は鎌倉初期の京方政治家の中では兼實、公經等と共に記憶せらるべき人物である。その歌は新古今集に土御門内大臣といふ名で、

われならぬ人もあはれやまさるらむ鹿なく山の秋の夕ぐれ

朝ごとに汀の氷ふみわけて君につかふる道ぞかしこき

等の數首を載せられてゐる。通親の子に通光、通具、それから曾孫に道元、道元は稀代の名僧、他の二人は優秀な歌人。して見ると、此の人の家は天才の血統であつたらしい。

千五百番歌合の歴史的考察はこれ位にして、歌としての價値を略說しよう。

此の歌合の歌の風格は、前に列擧したやうな原因からして、殆ど全く新古今調に統一せられ、新古今集を讀んでゐるのと餘り違はぬ感じを與へる。唯、百首歌の弊として地歌多く、三千首の中に佳作の數の比較的少いのは已むを得ない事であつた。

梅も梅わが身もわが身宿も宿春やむかしのとのみ詠めて（通親）

春風の到り到らぬ際ぞなき咲けるが散れば咲かざるも咲く（慈圓）

秋や來る問へど白玉風涼しいはたの小野の夏の夕ぐれ（忠良）

天の原雪降りくればあしびきの山こそ浪の麓なりけれ（家隆）

これ等は新古今の癖の最も惡い方面、詳しく言へば不自然な變調、誇張、極端な作

爲、惡趣味の技巧等を露骨に出してゐる。いつの世にも、新しい道の開拓には此の種の行き過ぎた一面を伴なふものがある。

日影みぬ深山がくれに流れ來て雪解の水のまた凍りぬる（丹後）

雪消えぬ野べのかよひ路跡みえてわれより先に若菜つみけり（忠良）

さし昇る日かげ闌けぬる朝凪の雲なき空にたづ遊ぶなり（宮内卿）

素直な、それでゐて、對象をかなり綿密に視た、よい作である。恁うした歌がこの時代に作られた事は、幽玄、有心、乃至麗體の新古今集のみを見てゐる大方の人々には、むしろ意外に感じられるであらう。

千五百番の中の佳作は幸にして概ね元久の勅撰集に取られてゐる。捨てられたもの

の中では左の數首が或は入撰してもよかつたのでは無いかと思はれる。勿論これはほんの管見に過ぎない。

歸る雁霞のうちに聲はしてもの恨めしの春のけしきや　（太上天皇　）

けふ見れば雲も櫻もうづもれて霞みかねたるみよし野の山　（家隆　）

せきあへず花吹きおろすあらしかな吉野の瀧の末匂ふまで　（保季　）

久方の光のどかにさくら花ちらでぞ匂ふ春の山かぜ　（家隆　）

あはれ昔いかなる野べの草葉よりかかる秋風吹きはじめけむ　（太上天皇　）

浦風に燒く汐けぶり吹きまよひたなびく山の冬ぞ寂しき（定家）

さらに又つもれる雪に埋もれぬ時雨ふりおきし楢の枯葉も（俊成女）

（大正十三年十二月稿）

髓腦物に就いて

鎌倉時代に於いて、不完全ながら當時の歌論と觀る可きものに髓腦物（抄物）が數種ある。それ等の中に新古今時代に關する批評やうのものあるか否か、あらばそれがどれ程の價値の批評なるかをあらまし調べて見よう。便宜の爲め、これら抄物の書かれた時期の順序を追うて調べる。

鴨長明「無名抄」。新古今集戀歌の中で最も優れたものとして三首拔いてゐるのは、長明の趣味の標準を窺ふ參考となる。寂蓮、大輔、小侍從等に就いて短評を加へてゐる。近代歌躰事の題下に、新派として勃興しつゝある俊成定家等の歌風に對し自由な氣持で辯護に努めてゐるのはさすがに長明の達識である。此の新派の初期時代には舊い人達から達磨宗と異名付けられた。その事は定家も拾遺愚草中に自記してゐる。此の達磨宗を長明は辯護して、

ここに今の世の人の、歌の樣の世々によみ古るされける事を知りて、更に古風に歸りて、幽玄躰を學ぶ事の出で來るなり。これによりて、中古の流を習ふ輩眼を驚かして譏り嘲る。

たとひ新しく出で來りとも必ずしも惡かるべからず。この國の小國にて人の心ばせの愚なるによりて、昔に違へじとするにてこそ侍れ。

斯く辯護しつゝも、新古今風の弊に對して彼は盲目でなかつた。有心、幽玄を屐き

違へてはならぬと戒めた。

この躰を心得る事は、骨法ある人の境に入り、峠を越えて後あるべき事也。化粧をすべき事と知りて、あやしの賤の女などが物ども塗り付けたらむ樣にぞ覺え侍りし。

「後鳥羽院口傳」。先づ眞物と觀て差支ない。かりに僞作か假托としても、中に書いてある事は此の時代の抄物中で最も傾聽に値する。西行、良經、寂蓮、秀能等に關する漫評もさる事ながら、就中定家への評言は新古今時代全般への批判としても當を得てゐる。

定家は左右無きものなり。

鹿を馬とせしが如し。傍若無人ことわりに過ぎたりき。

人のまねぶべき風情にはあらず。心ある樣なるをば庶幾せず。唯言葉姿の艶にやさしきを本躰とせる間、その骨秀れざらん。初心の者まねばば正躰なき事に

なりぬべし。定家は生得の上手にてこそ心何となけれども美しく言ひ續けければ殊勝のものにてはあれ。

内容や著眼點よりも修辭上の技巧で人を眩惑する事の弊を咎めたのである。

定家「近代秀歌」。定家の歌論や作歌標準が書かれてあるのみで、時代風尙への批評では無い。

「愚秘抄」。定家著と傳ふるも、全くの僞作である。十躰、十八躰論はさて措き、良經以下實朝に至るまでの各歌人への批評は概念的漫談で取るに足らぬ。唯一箇所、

歌をよむに大切の事あり。初心の時は淺より深に案じ入るべし。おのれ達の時は深より淺に案じ出づべきなり。これこそ年來の練磨のしるしに僅に探り得て侍り。

定家自身の述懷であると否とに拘らず、大に味はふべき言葉である。

定家「三五記」。僞作。

通光「歌仙落書」と「續歌仙落書」。俊成、寂蓮以下宮内卿局、丹後等に至る十數人への短評を滿載してゐるが、いづれも例の概念的漫語。

後普光院攝政「近來風躰抄」。

新古今ほど面白き集は無し。初心の人にはわろし。心得たらむ人は此の集を見む事いかであしかるべき。

まさしくその通り。

阿佛尼「よるのつる」。新古今は餘りに戯れ過ぐして歌の樣叉惡しざまになりぬべしとて云々の言葉がある。

頓阿「愚問賢注」。定家の歌を最も多く引合に出してかれこれと賞めてゐるが、批評として聽くに堪へる言葉は無い。

頓阿「井蛙抄」。二條爲世の言を記録したもの。その中に定家の詠歌大概と定家卿消息とが挿入されてある。家隆の心懸けの善かつた事や、定家が家隆を推奬した事や、

院が秀能の歌を激賞された事など書いてあるが、批評として參考になる程度のものは無い。

「徹書記物語」。冒頭に「抑於歌道定家を難ぜむ輩は冥加もあるべからず。罰を蒙るべき事なり。」戀歌には女房の作にしみ入つて面白いのが多いと言ひ、式子内親王、俊成女、宮内卿局などに就いて一寸宛書いてゐるが、これ亦例の漫談。乍併、定家の戀歌に及ぶ者は一人もないと言ひ、「風つらきもとあらの小萩」の一首を美くしい散文に書きなほしてゐる。

徹書記「淸巖茶話」。ここでも正徹は定家の戀歌に畏れ入つてゐる。「寢覺などに定家卿の歌を思ひ出しぬれば、物狂ひになる心地し侍るなり。」とは言ひも言つたものである。（大正十五年一月稿）

新古今歌人の筆蹟

「心の花」同人の竹田寅三君は書畫骨董の通人である。私は竹田君の話のままをたに筆記して行く。

新古今時代に於ける墨蹟界の代表的兩大關と見るべきは、小倉の色紙と熊野懷紙とであらう。

小倉の色紙は豐公時代から紳晋や茶人間に既に寶物扱ひにされ、徳川期に入つてから大名のお家騷動の原因をなした程名高いのであつた。宇都宮入道賴綱の嵯峨の山莊に在つたものが、その後どういふ經路を辿り幾變遷してどうなつたか委しくは知られて無いやうだが、寛政三年版「古今名物類集」の小倉色紙の由來には「小倉の色紙は伊勢の國北畠家の所藏に係り、屏風一双に百枚押してあり、宗祇の弟子宗長勢州へ下

りし時、一双共に賜る。宗長辭して一隻を止め、一隻を受く。勢州の分は燒失し、宗長の分幸ひ世に傳ふ。それも三十枚許りなり。紹鷗天の原の歌と八重葎の歌を表裝せしと老人雜話に見ゆ。されど本文の如くなれば、八重葎の歌を表裝せしは紹鷗に非して、紹鷗を招きし一富翁なるべし。」と書いて、その所有主を左の如く擧げてゐる。

戀すてふ（尾張殿）　この度は（紀州殿）　こぬ人を（紀州殿）
由良のとを（水戸殿）　足引の（近衞應山公）　たち別れ（本願寺）
八重葎（松平肥前守）　有明の（松平陸奥守）　筑波ねの（松平土佐守）
小倉山（井伊掃部頭）　よもすがら（酒井宮內少輔）あはれとも（本多大內記）
大江山（土井遠江守）　郭公（酒井河內守）　あひみての（南部山城守）
かくとだに（板倉主水）　うかりける（柳生十兵衞）　玉の緖よ（岡田將監）
忘らるる（成瀨隼人正）　誰をかも（本多安房守）　忍ぶれど（奧村河內守）
あらざらん（池田出雲守後家）いにしへの（後藤庄三郎）　人もをし（里村昌程）

高砂の（久世大和守）　　みせばやな（玄陳）　　世の中よ（松平出羽守）

之等の中の一枚が偶々市場に現はれると、今もとても滅法な値段に賣買される。文化五年、左京思順軒文著の「名人古墨蹟時價録」によれば、定家の小倉色紙は千金として有るが、今は壹萬圓といふが通り相場で、「集古十種」に掲載されてゐるものが出れば夫れの倍額に上る。

大正十四年五月二十五日、東京に於いて行はれた前田侯の大入札に、壹萬參千八百圓で名古屋の某氏に落札したのは、「しのぶれど」の色紙で、叙上奥村河内守の所有の品であつたらしい。同十四年十一月七日の井上侯爵家の入札に出たのは「ちぎりきな」で、價格は壹萬圓で京都の林、土橋、大阪の池戶、戶田、東京の山澄といふ五人の連合買であつた。それから叙上紀州家の舊藏であつた「こぬ人を」は昭和二年四月四日東西の札元二十一名の大入札で東京に於いて行はれ、實に參萬五千百圓で大阪の山中、水原の手に落札した。之は一風繭黄地上手竹屋町中白地大内菱紗上下紫印金といふ

名物には動かぬ表裝であつた。

熊野懷紙は後鳥羽院熊野御幸に出御先で親ら御認めになつたものと供奉の人々の書いた懷紙との總稱である。院の熊野御幸は數度であつたらしいが、古來坊間に出現する懷紙は正治二年十二月六日御幸瀧尻王子和歌御會と同年□月四日の當座の分とである。

正治二年十二月六日の分に就而は、文久二年の秋に古筆了仲が、「この熊野懷紙十一葉は世に名高くして我國の寶也。其内寂蓮法師のはある侯の藏し玉へるを予も見知りたるなり。雅經卿のは或人の藏したるを先つ年川上渭白か茶の湯に用ひられて皆人の知る處也。其餘の九葉はうつしのみ早く世にもてはやし其眞蹟をみる人まれにて、ある家に秘藏しもてるをこたひ予の門人某はからすも求めて敬玩限りなし。されは同好の人らにも告け知らせはやとてかく櫻木にものせるになむ。」と奥書して、實物大を各奉書刷にしてゐる。その十一葉とは後鳥羽院、通親、範光、公經、具親、長房、隆實、

家長、季景、雅經、寂蓮等であるが、右のうち了仲が「其内寂蓮法師のはある侯の藏し給へるを予も見知りたるなり」と言つてゐる。その或る侯とは前田侯の事であつたらう。大正十四年六月二十五日、東京で東西兩都中京金澤等の董賈二十八名の札元で行はれた侯爵家の大入札で、貳萬九千參百圓といふ高價で大阪の植村外二名の手に落札された熊野懷紙は、右の中の一枚で、箱書が遠州で、詠二首和哥として行路氷、夕炭竈の題詠になつてゐる。右了仲の擧げた十一葉の外に、別に上總介藤原家隆のがある。東京帝大史料編纂掛の「古文書時代鑑解説」上の部に、伯爵酒井忠正氏所藏として、「この懷紙は家隆が上總介たりし時のものにして、建久の末より建永迄の間の詠なり。家隆の歌集壬二集に見えざれども、蓋正治二年十二月後鳥羽天皇熊野行幸に供奉せしとき詠進せしものならん。」として

行路氷　ゆくこまのあとにもうとくなりにけりこほりになつむ

やまのはのみつ

夕炭竈　やとからむしろへともなきすみかまのけふりも
　　　　つらしみねのゆふくれ

の同一題詠を擧げてある。

正治二年□月四日の分は、大正十四年十一月九日之も亦東京の中村好古堂初め東西の大董賈十二名の手で行はれた、井上侯爵家の入札で、人氣を呼んだ事は好事者間に今も話題に上つてゐる。この懷紙の題は「花有歡色」で、合計六枚である。今當時の目錄を披いてみると、表裝は何れも一風茶地中牡丹印金中白茶地大花兎銀襴上下が淺黄地花波緞子で、後鳥羽院宸筆「ゐたをたに」が壹萬壹千壹百圓、家長「草木まで」が壹萬參百圓、公經「ふく風の」が八千壹百圓、庸季「いろを知る」が七千六百九十八圓、信綱「おきわたす」が壹萬壹千八百八十九圓、長房「ききまても」が五千六百二十圓で各落札してゐる。勿論之も六枚のみで終るべきでなく、他にも何枚かが散逸して有名無名の好事家の藏の中に保存されてゐることであらう。

新古今集の作者の中で一番多く墨蹟を殘してゐるのは勿論定家である。小倉色紙は申すに及ばず、かの明月記の大中小の三種の切れが流布してゐる上、懷紙に色紙に消息に、一寸大きい入札には必ず二三點は出陳されてゐる。そして割合ひに高價を保つてゐるは流石に當時の巨匠と首肯される。明月記切れは高くて壹千圓前後、安いのは百圓を割つたものも見受ける。井上侯入札の三首和歌の懷紙は八幡藏帳（松花堂所持品）で、題は雨中落花、光廣卿松花堂遠州の文が添うてゐるが、實に壹萬八千八百圓の高値であつた。昭和四年五月十日の藤田家の入札に出た定家自詠色紙は、花爲春友といふ題で、

この春はかさねてにほへやへ櫻霞とともにたちもはなれし

のうた、九千七百九十八圓であつた。大正六年六月十一日の赤星家の大入札は、景氣の上り口であつた爲め、次の如く大飛躍をした。定家卿二首懷紙、山家擣衣、關路曉霧は名物であつた爲めでもあらうが、貳萬六千百圓。定家卿願文「三十五行」は之も

八幡名物であつた爲め壹萬五千五百五拾八圓。定家卿敎訓小色紙は貳萬千百拾九圓で大阪の戸田の手に落札。大正二年六月、大阪の美術倶樂部開催、堺市の名家宅氏の入札に出た二首の歌切れは眞に見事なもので何家に納まつてゐるか知らぬが最う一度見たいものと思ふ。

定家に次いで人氣者は西行であらう。大正二年四月一日、本派本願寺の賣立に出た落葉の色紙、

せき寺や人もかよはすなりぬれはもみちちりしくにはのおもかな

は壹萬貳千九百圓で、當時の好事家をあつと言はせたものだが、夫れから十六年後の昭和四年五月十日藤田男爵家の入札に出た紅葉歌入文は、平瀨家傳來といふので呼物になつて、壹萬貳千九百圓で京都の土橋の手に落札した。此の他、昭和四年三月十六日、田村一郎久原房之助兩氏の賣立てに出た逸身家舊藏の三首詠草は、五千百圓で大阪の春海に落札したが、之は田家螢火外二首で、終りの餘白に「建久三のとし八月中

納言殿許にてのりきよかき侍る」とあつたのが珍らしかつた。西行にはよく假名の散らし書の文があるが、歌が這入つてないと、色紙や懐紙に比し概して高價ではない。

定家西行以外、大正二年本願寺以來の諸所の入札に出た目ざましいものを拔いて見よう。寂蓮右衛門切五千四百四十九圓、實朝中の院切六百三十九圓、後鳥羽院歌仙墨書二萬二千九百三十一圓、俊成消息一萬九百圓、賴政三井寺切二千五百二十圓、良經色紙千四百五十圓、慈鎮三首歌三千七百三十九圓等々。

前記諸歌人の外、色紙懐紙歌切經切尺牘等にその墨蹟を殘してゐる者に兼實、長明、賴朝、實定、有家、讃岐等があり、坊間殆ど見當らないのは式子内親王、小侍從、大輔、肥後、丹後、宮內卿等の筆蹟である。なほ、著名な古筆愛藏家の名古屋關戸守彥氏は、斷簡ですら數千金をする寂蓮の右衛門切を一冊本なりに所持されてゐる由である。

ここ迄が竹田君の話である。「亂代の貧者」と泣言ばかり言つてゐた定家が、此の話

を聽いたらばどんな顏をするであらう。「時」は偉大な、乍併しばしば莫迦げた作用をするものである。（昭和六年十月稿）

落穗拾ひ

鎌倉初期のあらゆる歌書に眼を通さねばならぬ必要を持つ私は、人口に未だ膾炙せぬ歌、世人の多くが氣付かぬであらう歌の中に珠玉を見出す場合が往々ある。それらは言はば新古今和歌集を收穫した大豐作の秋の落穗のやうなものである。その落穗をぽつぽつ紹介する事にする。

新古今集所載のものは落穗で無いのだから勿論除く。此の勅撰集に出てゐなくとも名歌秀歌として相當知られてゐる筈のものも除く。山家集の歌も既に一般に知られてゐるものとして除く。定家の拾遺愚草の歌も山家集に次いで普遍的なものと假定して

除く。戀歌も亦別に詳述しようと思ふから除く。

○　　　　　　　　　　　　鴨　長　明

（一）　奥山のまさきのかづらくりかへしゆ
　　　　ふとも絶えじ絶えぬ嘆きは

（二）　何ごとを憂しと言ふらむ大方の世の
　　　　習ひこそきかまほしけれ

（三）　霜うづむ枯野によわる虫の音のこは
　　　　いつまでか世にきこゆべき

鴨長明は不朽の美文「方丈記」を書いた。その「無名抄」では批評家としての達眼も窺はれる。千載集に自分の歌唯一首入つたのを「させる重代にもあらず。讀口にもあらず。又時にとりて人にゆるされたる好士にもあらず。しかるを一首にても入れるはいみじき面目なり。」と朗らかに滿悅した彼である。新古今集撰進の際には十二首上

つて十二首とも皆採られた彼れである。管絃を善くし、老莊の道にも達してゐた彼れである。飄然として鎌倉に下り、實朝の忌に挽歌一首を捧げた彼れである。まことに長明は此の時代に於いて特色ある一個性なので、私は深い好奇心を以つて群書類從本の家集を披見したのだが、不幸にして此の家集は彼れの歌の一部分しか收めてない不完全なものであつた。前揭三首は「物思ひ侍る頃幼き子を見て述懷の心を」と詞書した十餘首中から拔いたものである。その一聯は彼れが志を得ずして（賀茂の社司であつた父長繼の跡をつぐ事叶はずして）、大原山に隱栖しようとした際の作であるらしく、實感の溢れた哀れ深いものである。

○　　　　俊　成　女

（四）　おしなべて風こそかをれ春のやま咲く櫻あれば咲かぬ梢も

下句は當時の風尙を無視した奇拔な格調である。德川時代の或る歌人の「走る雲あ

ればたゆたふ雲あり」を先鞭著けてゐるのである。上句は平凡でぞんざいに見えるけれども、此の塲合それが善いのだ。全體の注意を下句に集中させる爲めの高等な技巧だ。一から五の句まで同一程度に磨き立てねばならぬと思ふのは下手のやる仕業だ。

俊成女は實は俊成の孫で、すなはち定家の姪であるといふ考證が最近に石田吉貞氏の「俊成卿女と越部禪尼」といふ論文で發表された。昭和六年十月發行「國語と國文學」特輯中世文學號に出てゐる。石田氏の研究は頗る周到であつて、私の十年の疑問を一度に氷解してくれた。

○　殷富門院大輔

（五）　きりぎりす雲ゐの雁に何と言ひて壁の底より聲あはすらむ

（六）　ねざめして殘れる夜半の月見れば行くともなくて傾きにけり

愚問賢注に「殷富門院大輔をば、歌數多よみたりとて、千首大輔と申しけり。今の代に誰か千首よまぬ人侍らん。歌のほど拍子はやく成りて能き歌よみも出でこぬ事に侍るか。」と書いてある。末世の我等一層恐縮の次第である。無名抄には「近く女歌よみの上手には大輔、小侍從とてとりどりに言はれき。」とある。歌仙落書に「大輔、古風をねがひて又さびたるさまなり。」とあるは出鱈目の漫評。彼女は新古今集春上「春風の霞吹きとく」といふ柳の歌と百人一首の「見せばやな」とで通俗になつてゐる。又、定家と相當懇意であつた事は明月記や拾遺愚草から推察出來る。尤も、彼女の方が彼れよりも年上であつたらしい。（五）の歌は天上を翔る羽族と地下を匐ふ虫類との悲秋の交驩である。霄ゐの雁は源氏物語中の一女性の名であるゆゑ、何と言ひての擬人が適切にきいてゐる。これは私の思ひ過ぐしか。

○

二條院讃岐

（七）　つねよりも山の端しろき曙は夜の間

に咲ける櫻なりけり

（八）　いづかたも散らさで行かむ岩躑躅左も右もまくり手にして（つつじ道をはさむ）

（九）　鳴き捨てて雲路すぎゆく郭公いま一聲は遠ざかるなり

（一〇）　匂ひ來る軒端の梅のうつり香に昔おぼゆる墨染の袖

（一一）　有明の月より西のほとゝぎす吾が思ふ方に鳴きわたるかな

（一二）　植ゑて見る心も散らず吾が宿にただひともとの白菊の花

沖の石の讃岐は源三位頼政の女で、さすがに乃父の血を辱かしめぬ女流歌人であつ

た。千載集戀部彼女の「一夜とてよかれし床の」といふ歌を歌學者の俊惠法師が「これをなんおもて歌と思ふ」と激賞した由である。源通光作と傳ふる歌仙落書には「風躰艶なるを先としていとほしき樣なり。女の歌斯くぞあらめとあはれにも侍るかな。家の風絶えず申さむ事も愚かなり。父の朝臣よりは艶なる方は立ち優りてや。末の世には出で難くなむ。」と書いてある。櫻花と郭公の二首は如何にも爽やかな姿である。躑躅の花を分けて行くそのまくりでの臂の白さも見まほしきものだ。後の三首は正治二年後鳥羽院初度御百首の時の作であるから、彼女が旣に姥櫻になつた晚年の歌である。當時の習慣として彼女も薙髮してゐたに相違ない。さう思ふと(一〇)も(一一)も哀れ深い感じがする。(一二)はとりわけて佳作だ。寒菊一輪の花に對座せる老美女の姿を想へ。

○　　　　　　　　　後鳥羽院

(一三)　くまもなき雲居の月にやすらへば丑

みつまでに夜もなりにけり

（一四）郭公待つ宵ながら明けにけりさもあらぬ鳥の音のみきこえて

（一五）消ぬが上にふりしけみ雪明日よりの春風ふかばまれにこそ見め

（一六）たまぼこの道の芝草うちなびき古き都に秋風ぞ吹く

（一七）いつのまに峯移りしてすぎぬらむ一村雨の夕立の雲

丑みつまでには無類のお歌である。待子規は後世の香川景樹が全く同じ事を「時鳥きかむと思ふに夏の夜はまぎるる鳥の多くもあるかな」と散文的に改惡して、院のお歌の引立役を勤めてゐる。古き都のお歌は直ちに平家物語の有名な今様を聯想せしめ

る。乍併、院は恰も福原遷都の治承四年に御降誕遊ばされたのだから、此のお歌はその時の京都の寫實で無い事は明らかだ。それを追想遊ばされたか、或はむしろ、志賀や奈良の舊都を題詠遊ばされたのであらう。夕立のお歌は格別光つてゐる。上句も佳いが、下句一村雨の夕立と同一のものを平氣で重複させて、一息に歌ひのけられた放膽さは如何だ。院のお氣性が文字の間に光り閃めいてゐるでは無いか。古今急雨の歌此の一首に盡くと申上げてよい。

〇　　　　藤　原　俊　成

(一八)　長き夜に衣うつなる槌の音のやむ時
　　　もなくものを思ふよ

(一九)　花に飽かで終に消えなば山櫻あたり
　　　を去らぬ霞とならむ

(二〇)　うき身には餘りなるまで見ゆるかな

匂ひ滿ちたる宿の八重菊

（二一一）　卷々を飾れる紐の玉ゆらもたもてば

佛よろこび給ふ　（法華經二十八品の中）

遠砧を聞きつつ秋夜の冥想、有心の序歌で、下句の落ちつきは善い。花に飽かぬは風月に對する妄執で、時代思想の一つの表はれ。うき身にはの歌は西行の「うき身にて」の鶯の歌と同一の述懷。（二一一）の歌は寶塔品、若暫持者我卽歡喜と詞書してある。

○　大僧正慈圓

（二一二）　憂き身にはしじまをだにもえこそせね思ひあまれば獨言たれて

（二一三）　身の憂さを思ひ宥むるかひもなく騷ぎ出でぬる吾が淚かな

（二一四）えびすこそ物の哀れは知ると聞けい
さみちのくの奥へ行かなむ

（二一五）忘るなと大宮人にたのめおかむたち
もぞ帰る花の都へ

（二一六）世を捨つる吾が墨染の袖觸れて折る
もやさしき女郎花かな

（二一七）汝(たれ)のみぞ絶えず音すと思ひつる筧の
水も冰しにけり

（二一八）山里の木の葉ふみわけとふ人もなか
りし庭に雪はつもりぬ

（二一九）早苗とる野洲(やす)のわたりの片嵐去年の
刈田はさびしかりけり

慈圓、諡して慈鎭は近衛天皇の久壽二年四月誕生、關白忠通の子であつて、後の攝政良經には叔父に當る。十三歲出家、天臺座主の職に就く事前後四度。賴朝と交通して、親幕政策の擁護者。後堀河天皇の嘉祿元年九月入寂、齡七十一歲。著述は政治哲學の「愚管抄」と歌集「拾玉集」。彼は歌人としても當時の大立物の一人であつた。彼は歌が大好きで、樂しみで、らく〳〵に詠んだ。すぐれた速吟、達吟でもあつた。その作の多くには稚拙と諧謔とがあつた。奈良一乘院の門主から戒められた時、「皆人に一つの癖はあるぞとよわれにはゆるせ敷島の道」と返事した程の正直者でもあつた。當然の結果として、拾玉集は拾遺愚草よりも一層浩瀚な歌集と成つてゐる。千首大輔どころの沙汰では無い。善く言へば玉石混淆であるが、地歌がとても多い。後鳥羽院口傳と稱する抄物中に、「大僧正おほやうは西行がふりなり。勝れたる歌は孰れの上手にも劣らず。むねと珍しき樣を好まれき。」とあるは當否相半した批評である。歌僧の作である事、素人臭く平氣でらく〳〵と樂しみながら詠んでゐる事、其處までは西行と慈

鎭とに共通してゐるが、唯それだけの事だ。慈鎭の佛教觀の歌、厭離の歌は多くは生硬で木地を露出してゐる。「むねと珍しき樣を好まれき」も惡い意味に於いてならば的中してゐる。幾らでも例はあるが、一つ擧げれば時鳥といふ題で、

夏の月光は秋に霜冴えて時鳥鳴くあけぼのは春

郭公の鳴く時は春夏秋冬の美を蒐め盡くしてゐると讃美した珍樣無類の歌だ。も一つ、

見ぞわかぬ深き山べの山人は衣の苔か苔の衣か

こけの骨頂、噴飯の至りだ。まだある。

世の中に山てふ山は多かれど山とは比叡の御山をぞ言ふ

逢坂の山路も雪にとぢられて關に關
　ある冬の夕ぐれ

斯うした惡い方面もあるけれども、さすがに立派な佳作も多く、「勝れたる歌は孰れの上手にも劣らず」である。前掲最初の四首は述懷と題した百首和歌の中にある。此の百首は無常厭世觀と寂寥感と失望の聲とに滿ちて、慈圓の性格と心境とを窺ひ得るなま〳〵しい作である。（二二）しじまをだにも得こそせねは面白い。沈默が守れなくて始終一人言をいふのである。その間斷なき獨りごとの集積が拾玉集なのであらう。（二二八）の女郎花は僧正遍昭のそれよりも心を引く。（二二九）は近江野洲川の邊の實景で、一面の水田に青々と早苗が植付けられ、他方にはまだ去年の切株が黝んだ儘の刈田もある。鮮明な對照だ。風はその早苗ばかりを吹き靡けて見えるから片嵐なのだ。片嵐とは功者な造語である。誰か拜借しないか。

○　　　　　　　　藤　原　家　隆

（三〇）引き据ゑよいらこの鷹の山返りまだ日は高し心そらなり（鷹狩）

（三一）郭公さつき來ぬればたちばなの花の都にこゑも惜します

（三二）朝戸あけて都のやどを見わたせば高き賤しき雪ぞつもれる

（三三）この山の嶺より月や出でぬらむ向ひの岡に影ぞうつろふ

壬二集からこれだけ拾ひ出した。鷹狩の歌は題材と表現とがぴつたり合致して、緊張し切つてゐる。いらこは三州伊良胡で、芭蕉の句にもあり、伊豫石鎚と共に有名な鷹の産地。古來鷹狩の歌多いけれども、賀茂眞淵の

ふる雪のしら斑の鷹を手に据ゑてむ

さし野の原に出でにけるかな

と家隆の歌とが双璧であると私は思ふ。郭公の歌、橘の花の都の續け方はあざやかだ。雪の歌、宮殿樓閣と庶民の家と參差たる京洛の巷の朝の雪。（三一）と（三二）とは當時の都會情景をまぼろしの如く讀者の心眼に浮べさせる。（三三）はめづらしくも有りの儘の寫景だ。壬二集下卷雜部に承久亂直後の述懷歌六十六首出てゐるが、皆惻々として人を動かす哀音である。隱岐の帝へ奉つた數首も亦家隆の人柄を想はせるに十分な哀歌である。壬二集を通讀して感じる事は、集中數首の歌は定家の傑作と比べて毫も優劣は無いが、地歌の非常に多い事が家隆の方のひけめであらうといふ事だ。ともかく、定家家隆と並稱されたのは彼等存命中からの事であるのは當時の髓腦物でもわかる。徹書記は、定家の戀歌には何人も寄りつけないけれどもその他の歌では「家隆は劣るまじ」と批評してゐる。又、二人は互に推奬した由も傳へられるが、眞僞の程はわかつたもので無い。

○　寂蓮法師

（三四）しづかなる音こそ風に變るなれ軒端の荻に雨そそぐ夜は

（三五）淺茅原ふるき卒堵婆に契りおかむ隣とならばあはれとも見よ

死を視詰める歌でも、俊成の

占めおきて今はとおもふあき山の蓬がもとに松虫の鳴く

は待つ虫を點綴する餘裕を持つてゐる。新古今人の趣味は勿論俊成の方に軍配を揚げるが、後世の我等は寂蓮の方に迫力を感じる。寂蓮は元久の勅撰集の選者に加へられてゐたが奏覧以前に入滅した。無名抄に寂蓮の言葉として「我等が詠むやうに詠めと言はむに季經卿顯昭法師など幾日案ずとも得こそ詠まざらめ。我は彼の人々のよまむ

やうには筆さし沾らしていとと く書きてむ。」といふ氣焔を載せてゐる。有名な獨鈷鎌首の話柄なども思ひ合はされて、寂蓮の颯爽たる歌人ぶりが眼に浮ぶ。

○ 藤原雅經

（三六） ささの屋の夜深き霜をおきもせず ね
もせぬ床にあらし吹くなり

明日香井集の末尾の方に、院のお使として鎌倉に下向した時の旅行歌が載せてある。總じて當時の宮廷歌人等は足跡頗る狹く、その羇旅の歌なるもの多くは机上空想の産物である。そこに、雅經の東下りの歌が澤山出てゐたのだから私は好奇の眼をみはつた。乍併、それらも矢張り机上旅行の作と差異無かつたので失望した。やつと右の一首を拾つて見たが、これとても棄てて構はない。

○ 式子内親王

（三七）　ながめても思へば悲し秋の月いづれ
　　　の年の夜半までか見む

新古今時代女流の第一人者であられる式子内親王については、殘念ながら御傳記が詳しくはわからない。後白河法皇の第三皇女で、賀茂の齋院であらせられたこと前後十一年、大炊御門齋院とも萱齋院とも申上げた。後薙髮して御法名は承如法。薨去の年は建仁元年と推定せられ、御齡は五十歳以下であつたらしい。高貴の女性で、一生獨身で居られて、亂世で、歌が御上手で、殊に戀歌がすぐれて居られる事など綜合すると、いろいろ浪漫的の想像も出來るが、それも幾百年後の今日からいたづらな事だ。

前掲一首は續群書類從所載「三百六十番歌合」から拔いたのであるが、此の歌合の眞僞を私は考へさせられたのである。先づ序（漢文）の調子からして眉唾物だ。殊に、秋部九番左に定家「見渡せば花も紅葉も」の歌が番はせてある。この有名な歌は拾遺愚草に據れば作者二十五歳、文治二年の二見浦百首中のものだ。幾ら大膽な定家でも

十四年前の舊作を此の歌合（正治二年の事と推定せられる）に持出して院の御前で披露するといふやうな振舞は敢へてしなかつたであらう。歌合の個々の歌は各作者のものに相違無いが、これを三百六十番に編纂したのは後世の假托者であるらしい。此の外にも、群從本の歌合の中にまことに僞作たる事の明瞭なものがあるので、私はここに愚見を申立てたのである。

○　　守覺法親王

（三八）夕されの秋のあはれをさきだてて朝
　風わたる小野の篠原

（三九）なほざりにあるかなきかの影みえて
　水草（みくさ）にくもる山の井の月

（四〇）淡路舟霧かくれ榜ぐ棹の歌の聲ばか
　りこそせと渡りけれ

先づ秋の朝風に耳をそばだてて、更に哀しかるべき黄昏を想ひやつたのは新しいお歌である。山の井のお歌は細やかに淋しい。淡路舟のお歌は印象鮮明だ。仁和寺宮守覺法親王は式子內親王の御兄君であらせられ、建仁二年御年五十二で薨去された。

○　　　　源　通　親

（四一）　おもへただ雀の雛を飼ひおきて巢立つるほどはかなしきものを

土御門内大臣通親は鎌倉初期京方の最も有力な政治家で、親幕派の九條家と對抗してゐた。宮中へ勢力を扶殖せむ爲めに院の乳母と私通したといふ此の腹黑い權力者が、鶴を飼はないで子雀の巢立を愛してゐるなどは面白い。通親みづからも和歌を善くし、子供には通具、通光といふ非凡な歌人を持つてゐる。

○　　　　法　橋　顯　昭

（四二）　浪かかる清見が崎の岩まくらここに

て月は見るべかりけり　(旅中月)

上句は洗練した美辭、下句は唯言の言ひ放し、それで一首は爽やかな印象を與へてゐる。「汝輩の歌は朝飯前だ」と寂蓮からこきおろされた顯昭なれども、なかなか歌は確かである。彼は六條家の中心人物で二條家の俊成と久しく對峙して來たが、建久四年左大將良經の家の六百番歌合の時、その爭ひが爆發して有名な「顯昭陳狀」の提出と成つた。それは自分の歌に對する俊成の判へ楯突いてゐるのであるが、當否は別として、自信の深さとがくがくの論とは愉快である。

○　越前

(四三)　しらつゆの玉眞葛葉に風冴えてうら
かなしくもすめる月かな

いかにも女性的な纖細の技巧である。

○　藤原範光

（四四）　水の面に散るしら雪の影見えて底よ
　　　　　りも降る心地こそすれ

正治二年院初度御百首につゞいてすぐ行はれた第二度御百首（群書類從卷第百七十）の中に出てゐる歌。下句の乾燥した知的遊戲は困るけれども、ともかく當時の歌としては、水面に落ち來る雪片の影を眺めるといふ見付け處の細かく且つ新しいのを買つてやらねばならぬ。

○　　　　　　　　　　　　　源　　具　　親

（四五）　ひきつれてわれもいざ見む梓弓眞弓
　　　　　の今日の射手の手づかひ

宮中正月賭弓の時の歌。作者が具親なので面白い。彼は作歌を怠つては弓術の事ばかり勉強した由、無名抄でお灸をすゑられてゐる。

○　　　　　　　　　　　　　宜秋門院丹後

（四六）今更におどろくばかり身にぞしむかかる嵐は秋も吹かねば

冬のこがらしの凜烈さを何の矯飾も無く歌つた。冬とも凩とも言はないで、それが些の疑問の無いも垢拔けた技巧である。

○　　　　沙　彌　生　蓮

（四七）何となくあはれ秋にもなりぬなど思ひあへずも夜床寒しも

（四八）いつしかと冬のけしきになりにけり朝ふむ庭の音のさやけさ

（四九）池水の汀におつるあおむらに碎けて見ゆるうす氷なり

いづれも新古今時代の型を離れた、別個の新味ある作である。（四七）秋に成つたと

思ふと或る日急に夜寒を感じた。その感じが下句の調子に巧みに表はれてゐる。（四八）木の葉が散るとも霜が白いとも言はずに、直ちに脚底の土のひびきが冴えると言つたのは月並で無い。（四九）此の下句の言ひ放し方も當時には珍らしい。あぢは鴨に似た小禽。源師光薙髮して生蓮といふ。宮内卿局と具親といふ優秀な兄妹の父親である。

○　　藤原忠良

（五〇）雪消えぬ野べのかよひぢ跡見えてわれよりさきに若菜つみけり

千五百番歌合中の一首。（昭和六年十月稿）

新古今時代の戀歌

京極黄門の戀歌は「あはれに心深きもの」の典型であるといふ思想は永く後世の歌人及び學徒を支配した。新古今集の戀歌を譽めそやさなければ一かどの文學通でないといふやうな觀念がつい德川時代の末期まで存續してゐたのは事實らしい。彼の徹書記は定家の戀愛詩に無上の讃辭を呈し、達眼の鴨長明も

歸るさのものとや人のながむらむ待つ夜なが
らの有明の月

を「吾が心に秀れたる歌」と無名抄に書いてゐる。通俗自讃歌の編者も百七十首のうち四十首までも戀歌を取つてゐる。

反對に、沒理解者流は當時の戀歌には戀愛の本質たる情熱の動きをいささかも認め難いから論ずるに足らぬと言ひ放つ。

無理解の謗言は僭越であり、盲目の崇拜は暗愚であらねばならぬ。私はここに公平にその長短を判斷しようと思ふ。

新古今時代の歌は、殊にそれが戀歌として現はれた場合に於いて、幾多の缺點と惡傾向とを暴露してゐる。萬葉集や伊勢物語の感情直叙主義から漸く變化し、墮落し來つて、當時の歌人等は戀歌に於いてさへ彼等の頽廢的な技巧本位を遠慮しなかつた。緣語、懸詞、歌枕、比喩等の粉飾は勿論、本歌取りや漢文學の古事を踏まへる學問的遊戲を隨所に敢へてした。彼等の戀歌の過半は此の種類のものに屬する。熱情そのものを生一本に歌ひ擧げたものは、あるにはあるが、少いのである。これは戀歌としては不思議な矛盾である。

彼等の戀歌には祈戀、遇不會戀といふやうな題目下に、心と事柄との經過を歌つたものが多い。すなはち「時間」を要素として、自分の戀愛の經過變遷を記述したものが多い。かかるものが讀者にぴんと來ないのは自然である。

彼等は又、四季の諷詠と同一の筆法で、自分の戀愛を客觀的に叙述する悠暢な癖を持つてゐた。人を待つ夕、別れの曉には花鳥風月の道具立を借用して場面を美化し、

肝腎の感傷や情熱をややもすれば後方に押し遣つて平氣でゐた。此の種類の戀歌は、後述する如く、稀には成功して情景一致の秀吟ともなつたが、多くは失敗に了つてゐる。

相思の法悦は餘り歌はれずして、片戀の歌のみが多い。これは題詠が多かつた爲めの結果であらう。題を出す事になると、逢戀といふやうな一見甘く見えるものよりも、不逢戀、絕戀、怨戀と言つたやうな悲哀な題の方が詠みよくもあり、深刻なやうにも感じられるからである。

彼等の戀歌の一番不利益な點は、事實の背景を持たない事、或は事實はあつたとしてもそれが不明な事である。萬葉の戀歌に我等の興味を感ずる理由の大なる一つは、それらの詠まれた場合の事實が詞書或は史實により分明であつたり、贈答の相手同志の名が明示してあつたりするからである。然るに新古今歌人等の戀歌には此のやうな事が殆ど無い。彼等とてまさかに机上題詠の戀愛のみ味はつたわけでも無からうが、

撰集や家集の上からでは、さう思はれても仕方が無いのである。

以上は當時の戀歌の短所であるが、これからその善い方面も述べよう。

熱情をありのままに歌ひ擧げた佳作も全く無いとは言へない。例へば左の通り。

式子内親王

玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

忘れてはうち嘆かるるゆふべかなわれのみ知りてすぐる月日を

夢にても見ゆらむものを嘆きつつうちぬる宵の袖のけしきは

生きてよも明日まで人はつらからじこの夕暮をとはばとへかし

慈圓

同じ世にあるかひもなき身なれども命ばかりはあはれなるかな

良經

時しもあれ空飛ぶ鳥の一聲もおもふ方より來てや鳴くらむ

公經

吾が戀はあらしに迷ふうき雲のさわぎぞわたる夕暮の空

西行

遙かなる岩のはさまにひとり居て人目おもはでもの思はばや

大輔

よしさらば忘るとならばひたぶるにあひ見き
とだに思ひ出づなよ

自然の情趣を背景とした戀歌で、情景一致の秀吟と成つたものも少くは無い。主なる作を列記すれば、

後鳥羽院

荻の葉に身にしむ風は音づれてこぬ人つらき
ゆふぐれの雨

式子内親王

君まつと閨へも入らぬ槇の戸にいたくなふけ
そ山のはの月

ただいまのゆふべの雲を君も見ておなじ時雨

や袖にかかからむ

慈圓

雲とづる宿の軒端の夕ながめ戀よりあまる雨の音かは

良經

いつも聽くものとや人のおもふらむ來ぬ夕ぐれの松風のこゑ

俊成

思ひあまりそなたの空をながむれば霞をわけて春雨ぞふる

定家

かへるさのものとや人の眺むらむ待つ夜なが

らの有明の月

風つらきもとあらの小萩袖に見てふけゆく夜

半におもる白露

西　行

人は來で風のけしきもふけぬるにあはれに雁

の音づれてゆく

高　倉

くもれかし眺むるからに悲しきは月におぼゆ

る人の面影

新古今時代の戀歌の最も著しい特色は、それが感情を制御して露骨に現はしてゐな

いといふ事である。それが西歐の「社交詩」といふものに似てゐる事である。故小泉

八雲先生の講義錄が十年程前に紐育で出版せられた。東京の文科大學で親しく先生の

文學論を聽講する幸福を持つた私は、昨今その講義錄を讀み返して若い時の追憶に耽つてゐる。その中に「社交詩」と題する一節がある。先生によれば、それは佛蘭西にては久しい以前から發達してゐたのであるが、英吉利では十九世紀後半に至つて初めて開拓せられたのであつた。此の詩の特質とする所は貴族社會の道念を基調とし、感情を完全に制御して決してそれを露骨に表現しない事である。これを東洋的に言へば、詩歌の定義と一見矛盾するやうではあるが、喜怒哀樂色にあらはさざるものである。戀愛を主題としたものでさへも、それが果して眞面目なのか否かさへ疑はれるほど遊戲的な表現を取つてゐる。ここまで說明すると此の西歐の「社交詩」なるものが我が鎌倉初期の戀歌と一脈の通ずるものある事を觀取し得るであらう。新古今集を披いて見ればすぐわかるが、式子內親王や西行などに感情直敍の作を折々見かけるのみで、他は大抵は「社交詩」の特質を具へて、感情を完全に制御して十分の餘裕を與へるか、もしくは表現に婉曲間接の方法を取つてゐる。

後鳥羽院

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへるうつれば變るなげきせしまに　(被忘戀)

慈圓

野べの露は色もなくてやこぼれつる袖よりすぐる荻の上風

玉章の跡だになしとながめつるゆふべの空に雁なきわたる

良經

いく夜われ浪にしをれて貴船川袖に玉散るもの思ふらむ　(祈戀)

またも來む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞか

へる春の曙　（後朝戀）

吾が涙もとめて袖にやどれ月さりとて人の影

は見えねど

通　光

かぎりあればしのぶの山の麓にも落葉が上の

露ぞいろづく

定　家

忘れずば馴れし袖もやこほるらむ寢ぬ夜の床

の霜のさむしろ

暮るる夜は衞士の焚く火をそれと見よ室の八

島も都ならねば

色かはるみのの中山秋こえてまた遠ざかる逢

坂の關（逢不遇戀）

人ごころほどは雲ゐの月ばかり忘れぬ袖の涙とふらむ

西行

足曳の山のあなたに君すまば入るとも月を惜しまざらまし

よしさらば涙の池に身をなして心のままに月をやどさむ

有家

もの思はでただ大方の露にだにぬるれば濡るる秋の袂を

俊成女

おも影の霞める月ぞやどりける春やむかしの
　袖の涙に
讀者の多くはこれらの作を見て「喰ひ足りない」とか「なまぬるい」とか紋切型の不平を訴へるかも知れない。それは猫に小判といふものだ。諸君は能樂を識つてゐるであらう。一度でも能樂堂の見處にすわつた事があるならば、面の前に手を近づけて泣く型と憂ひに沈むおもて伏せの型とを極めて美しいものに感じなかつたか。この「しをる」と「くもる」とがすなはち新古今の戀歌の特異な表現形式なのである。前掲の數首を玩味する時は綿々たる戀のかなしみを我等の胸に再現するに十分である。かりそめにも感情の抑制と技巧の洗練とに異議のある輩が古典藝術を云々するは僭上の沙汰であらねばならぬ。爲念附言しておくが、「社交詩」の特質は古今集以來我が王朝文學を多少とも色彩づけて來たのであつたが新古今時代の戀歌に至つてその傾向が終に極まつたのだといふ事である。（昭和六年十月稿）

第四篇　藤原定家歌集講話

緒　言

此の講話を書くに當つて予が一番苦心したのは如何なる歌を幾首選ぶ可きかであつた。結局、拾遺愚草同員外中最も佳作と思ふ歌壹百首を抜く事にした。何分にも三千七百餘首ある全集の中から僅々百首の秀逸を選別しようと言ふのだから、容易な業ではなかつた。選擇の標準を予一個人の好惡にのみ置くは勿論危險である。それを現代の作歌理論にのみ置くは亦誤謬である。俊成定家等の和歌に關心を持つた幾多の先哲が如何に觀たかを謙虚な心持で參考にせねばならぬ。更に一番大切な事は、新古今集時代の傾向と風尙とが如何なるものであつたかを確實に把握し、それを最善の內容形式に於いて表はした歌の採られねばならぬ事である。斯う考へたので、定家が秀歌の選擇は予一人の主觀と史的標準の客觀との兩方面から行なつた。彼れの代表作は予が此の「定家百首私選」に大方網羅したといふ自信を持つてゐる。則ち、此の講話は彼

れの歌に對する予の價値判斷の總決算と觀て差支ない。

「字句解」と「歌意」とは、紙數に限りあるので、出來るだけ簡單にした。解を要せずと思つて全然略したのさへある。本歌や類歌なども省略した場合が多い。さうして、「批評」に力を集中した。「批評」は歌そのものゝ價値を論ずると同時に、出來るだけ作者の人物や生活にも觸れて書いたつもりである。

唯美的和歌完成の巨匠に對する正しい觀方を此の講話によつて知つてくれる幾人かの讀者があつたならば、予の執筆の勞は酬いられたのである。

春歌

（一）出づる日のおなじ光に四方の海の浪にも今日や春は立つらむ（二十歲）

【字句解】浪と立つは緣語。

【歌　意】出づる日は遍滿と同じ光で四方の海に照り、斯くして都の外の何處も春になつてゆくのであらう、の意。後世の賀茂眞淵の作つた左の歌も同巧異曲である。

東路に春立ちにけり唐船のつしまの浪ものどけかるらし

【批　評】定家歌集開卷第一の處女作。詞の連續の美しい事、行き屆いた技巧が見えてゐながら而かも何處か鷹揚であることなどは後年の巨匠定家の特色を豫言してゐる作として面白い。出づる日の、同じ、光に、四方の海の、浪にも、今日やと一氣に讀み下して來ると浪の起伏の旋律を吸々するやうな心持がするでは無いか。二十歲の若年で既にこれだけの歌を見せてゐるのである。後鳥羽院を始め奉り、後京極良經も、藤原秀能などもさうであつたが、とりわけ我が定家は早熟の才であつた。此の初學百首も技巧の點から觀察すると大方粒が揃つてゐる。又、更に驚嘆すべきは定家の文章である。治承四年（十九歲）に書き始めた日記（明月記）の漢文の如何に簡潔且つ瑰

麗なるかを想へ。二月十四日の條には「天晴れ明月片雲無し、庭梅盛りに開き芬芳四散す、家中人無く一身徘徊す、夜深く寢所に歸れば、燈髣髴として寢に付く心無し、更に南方に出でて梅花を見る間、忽ち炎上の由を聞く、乾の方云々」とあり、九月十五日の條には「夜に入り明月蒼然、故鄕寂として車馬の聲を聞かず、歩して從容として六條院の邊に遊ぶ云々」とある。平家都落ちの前後の京都が眼前に浮ぶ。詩文の才、なかなか菅公の早熟ぐらいなものではない。

（二）　なにとなく心ぞとまる山の端に今年見初むる三日月の影　（二十五歳）

【字句解】「心ぞとまる」氣がひかれる。

【歌　意】山の端に今年初めて見る纖月には、何となく心がとまつて、氣がひかれる、の意。

【批　評】文治二年西行法師の勸進に依つて作つた二見浦百首中の一首。ありの儘の無技巧で、可憐で、而かも何といふしんみりした歌であらう。何となく、とまる、

山の端、見初むると線の細い柔かな詞のみを列ねて、繊月への情感を表示した。作爲でなくて天の成せる用意である。此の種の自然な歌、衣冠束帶式で無い歌が拾遺愚草中にも相當多く見出だされる。定家に限らず、如何なる歌人に就いても、その價値判斷を下すには撰集丈け窺つたのでは勿論正鵠を得る筈が無い。殊に勅撰集では當時の風尚に合致した秀歌のみを採る結果となるから、一層さうである。拾遺愚草を通讀した後と元久の勅撰集丈けしか知らなかつた時とでは、定家の價値判斷が大分相違して來る。たとひ根本的の相違で無いとしても。所謂新古今調で無く自然ありの儘に近い素直な歌を試みに定家歌集から拔いて見よう。

秋の夜は雲路をわくる雁がねのあと方もなく物ぞ悲しき　（二十歲）

身にかへて秋や悲しききりぎりす夜な夜な聲を惜しまざるらむ　（二十歲）

あやめ草かをる軒ばの夕風に聞く心地するほととぎすかな　（二十五歲）

神南備の三室の山のいかならむしぐれもて行く秋のくれかな　（二十五歲）

しぐれつるまやの軒ばのほどなきにやがてさし入る月の影かな（二十五歳）
草枯れのあしたの原に風過ぎて冴えゆく空に初雁の鳴く　（二十五歳）
影清き池のはちすに風すぎてあはれ涼しき夕まぐれかな　（二十六歳）
里びたる犬の聲にぞきこえつる竹より奥の人の家居は　（二十六歳）
春の夜のなかばの月の月影のおぼろげならず身にもしむかな　（二十九歳）
早苗とる田子の小笠のさわぐかなうち散る雨やふりまさるらむ（二十九歳）
稲妻の光も今は弱りけり田の面の風の聲ばかりして　（二十九歳）
天の河年のわたりの秋かけてさやかになりぬ夏の夜の闇　（三十歳）
煙立つをちの篠屋のくぬぎ原そのふしもなく秋ぞ悲しき　（三十一歳）
跡ふかき吾が立つ杣に杉古りてながめ涼しき鳰のみづうみ　（三十五歳）
忘られぬ彌生の空をしたふとて青葉ににほふ花の香もなし　（歳末勘）
あせづたひもり來る水も氷りゐて刈田さびしき冬の山陰　（五十九歳）

誰ればかり山路をわけて訪ひ來らむまだ夜は深き雪の景色に　（七十一歲）

これらの歌は間違つて山家集の中に混入してゐたとしても殆んど見分けは付かない。

（三）　谷深みまだ春知らぬ雪の中にひとすぢ踏めるやまびとの蹤（あと）　（三十五歲）

【字句解】「春しらぬ」春が來たともわからぬ。「やまびと」樵夫。「蹤」足跡。

【歌　意】谷深くまだ春が來たともわからぬ山の雪の中に、樵夫の通つた足跡が一筋續いてゐる、の意。

（四）　春のきる袂ゆたかに立つ霞めぐみあまねき四方の山のは　（六十八歲）

【字句解】「きる」「袂」「たつ」いづれも緣語。「春のきる袂ゆたかに立つ」は霞の長閑さの比喩的形容。さうして上句全體は、下句「あまねき」を引出す爲めの序になつてゐる。

【歌　意】君が恩澤は四方の民にあまねく、山の端每に春霞は靉靆とたなびいてゐ

る、長閑なる御代よ、の意。此の歌は、寛喜元年十一月女御入内御屛風の和歌である。

（五）　知らざりき山より高き齢まで春の霞の立つを見むとは　（七十一歳）

【字句解】「知らざりき」は思ひきや、の意。高齢を形容して「山より高き」と言つたのは、山を下句の霞に懸けようとする用意。

【批　評】　貞永元年春立つ頃、頽齢の歌人が述懐の作。日記で見ると定家は幼少の時から病弱であつたらしい。風病、咳病、歯痛、痢病、腫物、眼病、石淋病、手足苦痛、脚氣、心神不例といふやうな文字が隨所に見え、四十歳にして双鬢斑白とも書いてゐる。十四歳赤斑（皰）を病んで殆ど瀕死、六十六歳の時その事を回顧して「皰瘡以後雖蘇生、諸根多缺、身體如無、其後五十年、存外壽老至于今、」と誌してゐる。又六十九歳の晩夏、荒和祓を

夏はつる今日のみそぎは程もなし吾が世幾日と知らぬ月日に

同年十二月卅日、古稀の齡を迎へようとする定家は「人生七十稀なり、先祖多くは六十を過ぎ給はず、先考（俊成の事）獨り九旬に餘り給ふと雖も、遁世の後也、白髮を戴きて此の齡に及ぶ人、氏の公卿中、始祖以來四十六人、尤も稀と謂ふべし、」と感慨を語つてゐる。翌年春三月には「七旬の白髮を悲しみ八重の紅櫻に對す、」と感傷的の美句を綴つた。多病であつたのみならず、定家の生涯は亂世に終始した。若い時分平家の沒落を目擊して以來、兵亂と火災と群盜と飢饉との京都に住み通し、近くは土御門上皇の遠流で崩御せられた事を耳にした。さうして、自分だけは生き長らへて新勅撰和歌集の撰進に從事してゐる身の上なのである。立春、東山の暮靄を眺めて、「知らざりき」と歌つた定家は、さびしい滿足で心がときめいたに相違ない。

（六）　たがためとまだ朝霜のけぬが上に袖ふりはへて若菜つむらむ　（五十四歲）

【字句解】「ふりはへて」わざわざなす、ことさらなす、の意であるが、こゝでは袖をうち振りながらの意。百人一首「君がため春の野に出でて若菜つむ吾が衣手に雪

はふりつつ」は主觀であるが、これはそれを他人の事として客觀描寫したのである。

（七）過ぎがてに摘めどたまらぬからなづなうら若く鳴く鶯の聲　（二十九歲）

【字句解】「過ぎがてに」のがては難き意を表す接尾語。「からなづな」唐薺。「うら若く」心若く、氣若くの意。ここでは稚くの意。尙上句は下句「うら若く」への有心の序。

【歌　意】通り過ぎがてに摘むけれどもなづなは貯まらない。何處からとなく稚い鶯の聲が聞える淺春の趣。

（八）消えなくに又や深山をうづむらむ若菜つむ野もあわ雪ぞふる　（四十歲）

【歌　意】雪がまだ消えないのに、又降つて埋むるであらう。若菜を摘む此の野邊にさへ、淡雪が降つてゐるのだから、の意。古今集「み山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜つみけり」を本歌。

【批　評】餘りに巧みなる爲め一見机上で工夫した歌とのみ思はれ易いが、實は京

都の地方色なる氣候の變化のはつきり出た實感の歌である。それから、古今集の本歌は山から來た人が都の野邊で歌つたのであり、此の方は反對に京人が山中を想ひ遣つたのである。二首を竝べて味はふと、本歌取りの關係以外に、その邊なかなかの面白味が湧く。

（九）　大空は梅のにほひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月　（三十七歳）

【字句解】「くもりもはてぬ」全くは曇りつくさぬ。卽ち薄くかすめること。

【歌　意】大空には梅花の匂ひが流れただよひ、ほんのりと薄く霞みたる春の夜の朧月の景色よ、の意。古今集「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」を本歌。

【批　評】おほらかに美しく、新古今集時代の代表作の一つ。

（一〇）　春の夜は月の桂も匂ふらむ光に梅のいろはまがひぬ　（二十八歳）

【字句解】「月のかつら」月の中に生育せる桂の木。支那の古詩に見える。「まがふ」

紛らはし、類似してゐて辨別し難くなる。

【歌　意】春の夜は、月中の桂樹も梅花のやうに咲き匂つてゐるであらう。この下界では梅花の色が月光に紛れて分別し難い、の意。

（一一）梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ（三十九歳）

【字句解】「うつす」うつり香、匂を染むる。「軒もる」軒の隙間よりさしいる。「あらそふ」競ふ。

【歌　意】懐舊の情に堪へないで、春の夜を端居してゐると、袖にも染むがに、梅花は馥郁と香り、軒端から月光がそれと競ふやうに、袖の涙に影を映して來る、の意。此の歌を懐舊の哀音と解する事に對しては異論もあらうけれども、愚見に誤りはないのである。梅花と朧月とを懐舊の場面にあしらふ事は當時の慣用手段と言つてよい。新古今集春上に定家の此の歌と竝べて家隆、通具、俊成女の同様の歌が出てゐるが、皆伊勢物語の「月やあらぬ」の條を心において詠んだのである。月の影が袖にう

つるのは必ず涙を意味する事も當時の技巧の通例である。

（一二）蟲の音はねざめの夢におぼえつつ秋の春にもなりにけるかな（二十九歳）

【字句解】「おぼえ」は記憶の呼び起される事。「秋の」のの、は、が、と同義。

【歌　意】秋はとくに過ぎ去つて春にさへなつてゐるものを、ふと目覺めると耳もとになほ虫の聲がしてゐるやうに思はれる、の意。

【批　評】細やかな感じの歌。われ等も二月嚴寒の深夜にふいと寢覺めて枕もとに虫が鳴いてゐるやうな錯覺を起す事がある。後世の小澤芦庵の歌にも

いつまでか斯くても聽かむ鳴き弱る霜夜の蟲の曉のころ

とあつて、秋暮や初冬の頃までは蟲聲を歌つた人もあるけれども、冬も過ぎ春に到つてなほその哀音を感じたのは我が定家一人である。

（一三）すゑ遠き若葉の芝生（しばふ）うちなびき雲雀鳴く野の春の夕ぐれ（三十二歳）

（一四）霜まよふ空にしをれし雁がねの歸るつばさに春雨ぞふる（三十七歳）

【字句解】「霜まよふ空」霜の烈しい寒空。「しをれし」霜に弱りてやつれたること。

【歌　意】霜の烈しい寒空に弱りやつれて來た雁が、今歸りゆく翅には、春雨が降つて、先の哀れな氣色も消えて、のびやかになつて飛んでゆく、の意。これが普通の解釋であるが、予のは違ふのである。下句は細雨に霞み行く長閑さを言つたのでは無く、しとしとと雨に濡れて行く哀れさを同情したのである。則ち、此の歌は徹頭徹尾雁がねを哀れなものと想ひ遣つた主觀味の作である、と予は解釋する。やはり定家の歌で山鳥の哀れさを歌つたのが秋の部にある。普通の解釋は、春雨を必ず長閑なものと考へる先入主に誤謬を持つて居らぬか。春雨の降るは涙か（古今集）や、つれづれと降るは涙の（和泉式部）の古きはさて措き、新古今集の中にも、

つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒のたま水　（行慶）

おもひあまりそなたの空をながむれば霞をわけて春雨ぞふる　（俊成）

といふ如く春雨を憂愁的に取扱つてゐる。又、歸雁を長閑な景色に取扱つた歌も無い

ではないけれども、

かへる雁霞のうちに聲はしてもの恨めしの春の景色や（後鳥羽院）

聽く人ぞ涙は落つるかへる雁なきてゆくなる曙のそら（俊成）

と言つたやうに、哀れに想ひ遣つた歌の方が或は多いのでは無いかと思ふ。それで定家の一首も予は前述の如く解し、且つさう解した方が歌意が深くも成るかと信ずるのである。和漢朗詠集や白氏文集などを探したらば或は予の説を裏書する漢詩がありはせぬかと考へるけれども、今はそれを探してゐる時間が無い。

（一五）大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に斷えてかへる雁がね（四十六歳）

【字句解】「大淀の浦にかりほす」は「みるめだに」の有心の序。又「みるめ」は海松と見る目とを懸けたのである。

【歌　意】空ゆく雁の姿を見送るだけもと思ふに、大淀の浦は霞のたちこめ、その姿つばらかならず、惜しくも歸り行くよ、の意。

【批　評】　最勝四天王院障子の畫賛の歌、此の御堂は洛東白河村に在つた後鳥羽院勅願寺で、御障子の名所の和歌を召されたのは承元元年夏の事であつた。定家に充てられた大淀の浦の障子の畫は八幡平三光時といふ繪師に命せられた。予は定家の歌によつてその畫面を想像して見る。海濱の景色、幹の太い松樹五六株を左前面に、海草を拾ふ蜑二人を右前面に、あとは紺青の浪と横に數條の紅霞。歸雁は片影だに描かれて居ない。光時が假りに信實ほどの畫工であつたとしても定家の歌に匹敵する繪は描き得なかつたに相違無い。「大淀の」の一首は當時の和歌の頹廢的傾向をその最善最美の姿に於いて示現してゐる。なほ、細微な穿鑿になるが、此の歌は伊勢物語の

大淀のまつはつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな

を心において詠んでゐる。浪の代りに雁がねを點出してかへるを活かし、それで大淀の固有名詞を動かぬものにしてゐる。名工の苦心、其處まで觀てやらないと定家へ不深切になる。

（一六）　しばしとて出でこし庭も荒れにけり蓬の枯葉すみれまじりに（二十六歳）

【字句解】「しばしとて」暫くの間であるとて。

【歌　意】聚落へ引かれて山の閑居を出て來た。やがて又此處へ歸つて來るぞと心にきめてゐたのであつた。今日再びその閑居へ來て見ると、家も庭も荒廢してしまつて、蓬の枯葉が、すみれに混じつてある、の意。

（一七）　さもあらぬ草葉も春は見馴れけりさわらびあさる山のたよりに　（二十九歳）

【字句解】「さもあらぬ」なんでも無い。「たよりに」便宜に。又はついでの意。

【歌　意】なんでもない草葉までも、春は見馴れて可愛くなる事よ。山に蕨を採りに來たついでに眼に着いては、の意。

（一八）　春の夜の夢の浮橋とだえして嶺にわかるる横雲の空　（三十七歳）

【字句解】「夢のうきはし」夢のこと。本居翁の玉勝間に、昔大和國の夢の わだと

稱する所に渡せる橋を「夢の浮橋」といひ、それを夢の事にもいふやうになりしとある。又夢は定め無きもの故、比喩的に夢の浮橋といひ初めしといふ說もある。「とだえして」中絕のこと。

【歌　意】夢も見はてず中絕して、春眠から覺めた處、窓外を見れば橫雲が嶺を離れてゆく時であつた、の意。

【批　評】予の觀る所を以つてすれば新古今集時代の和歌の最佳境は美辭の絢爛と、時代相の反映として、その裏に漂ふ一脈の寂寥である。而かも、時としてそれが物心一如の象徵の高さにまで來る事である。好惡は各人自由の問題として、此の一首は和歌史上人麿の傑作と拮抗す可きものだ。王朝時代の貴族的和歌が辿り辿つた道は此の一首に到つて最高峯に登り詰めた。上句夢醒めてと言はずに極めて空想的、主觀的の表現を爲し、下句手を翻へして端的な、且つ效果的な寫實を敢へてした。人間の下凡な常識は一首の樞樞が物に在るか心に在るかに紛惑せしめられる。然かも、上下

兩句の間に些の破綻を示してゐない。人間の凡眼は一見して此の歌の美辭に眩燿せしめられる。さうして、熟視してゐると薄明に眺める古い錦繡の寂びを感得して來る。此の一首を殘して他の何萬首は湮滅し去つても王朝和歌の存在理由は確實であると言はねばならぬ。

（一九）おもふことたれに殘して眺めおかむ心にあまる春のあけぼの（二十九歲）

【歌　意】心に滿喫する美くしいこの春の曙よ、此の光景に深く染めた吾が心を後の世の何人に殘して傳へやうか、の意。卽ち後世の誰人が、吾ほどの心持ちで、春曙を眺めるであらうかといふ意が暗示されてゐる。

【批　評】同じく春曙の吟であるが前掲「春の夜の」よりも一層唯心的である。想調共に定家の本格。幽玄とか有心とかいふは斯樣の歌から演繹される歌論である。香川景樹の

旅にしてたれに語らむ遠つあふみいなさ細江の春の曙

のたゞれは現在人であるが、定家のたゞれは詞友でも無く、戀人でも無く、おぼろげに心に描いた後の世の人である。同じく彼れの作

いにしへの人に見せばや櫻花たれもさこそは思ひおきけめ　（二十歳）

のたゞれは先の代の人であつて、これは後の世の人である處に差別はあるけれども、共に愛着の永久性を歌つた事は一つである。斯樣の歌は概念に墮ち易いものであるが、さすがに定家は調子と句法との上から感情を吹き込むで立派な歌にしてゐる。

（二〇）　田子の浦の浪もひとつに立つ雲の色わかれゆく春の曙　（五十四歳）

【歌　意】　田子の浦の沖合を眺めると浪の色と、同じ色の雲が、漸時異なつた色に別れて明け離れゆく春の曙よ、の意。

（二一）　紀の國や吹上のはまの濱風も春はのどけくなりぬべらなり　（二十九歳）

【字句解】「べらなり」可き樣なりの意。

【歌　意】　吹上の名にしおひて常は荒らきその濱風も、今日此の頃の春べはなごや

かになつて行くやうだ、の意。

【批　評】 鷹揚にずばりと歌つた處が佳い。吹上の濱は當時最も愛好された歌枕の一つで、

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか浪の寄するか　（古今集）

を本歌として澤山の歌が詠まれてある。定家にも數多くあるのであるが、此の一首が最も秀れてゐる。次のも佳作である。

今日ぞ見るかざしの浪の花の上にいとはぬ風の吹上の濱　（五十四歲）

（二一二）　朝露の知らぬ玉の緒ありがほに萩植ゑおかむ春のまがきに　（三十五歲）

【字句解】 「朝露のしらぬ」朝露の如く明日をもわからぬ。「玉の緒」生命。「ありがほに」有りさうな顏をして。

【歌　意】 自分はかうして春の庭に萩を植ゑてゐるが、この萩の花を咲かせる秋まで、生き長らへるか、どうだかわからぬ。それを生命のありさうなつもりで、萩を培

ふことよ、の意。

【批　評】 ありの儘の素直な作。三十五歳の壯者で朝露の知らぬ玉の緒とは衒ひ過ぎぬかの疑問もあらうが、それは鎌倉初期の時代思想の反映で、定家としては實感に相違無い。無常觀は弱冠の頃から深く滲み込むでゐるのである。又日記に據れば、定家は幼少から兎角病身であつた。早老の體質でもあつたと推察出來る。それで此の歌は一層自然な感じがする。

　　ひとすぢに賴みしもせず春雨に植ゑてし菊の花を見むとは　（二十八歲）

とさへ歌つてゐる。嵯峨の山莊で萩薄等を栽ゑさせた由が日記（正治元年四月の條）に誌るされてある。定家は今日の言葉で言へば造庭や園藝の趣味が深かつたらしい。尤も、貧乏であつたから決して贅澤な眞似は出來なかつたが。

　　庭の面は柳さくらをこきませむ春の錦の數ならずとも　（七十一歲）

「庭前の小樹を剪つて八重櫻の枝を續ぐ」とか、「去年所栽の橘花開いて欣感」など

と書いてゐる。梨の接木をしてゐる。椿、牡丹、瞿麥、南天竺なども植ゑてゐる。

（二二三）　かざしもて暮らす春日ののどけきに千代も經ぬべき花の蔭かな

（二十九歳）

【字句解】「かざしもて」翳し持ちて、卽ち花を髮又は冠にかざして。「經ぬべき」經ることが出來やう。

（二二四）　山の端の月まつ空の匂ふより花にそむくる春のともし火　（五十六歳）

【字句解】「にほふ」映ゆる、つやめく、趣あること。「より」故に。に依つて、の意。「花にそむくるのともしび」花に對して後向きとする春宵の燈火。

【歌　意】山の端の月がまさに出ようとして空がほの明るくなつて來たので、やがて射す月光によつて映ゆる花の風趣を味はひたさに、春宵の燈火を花にうしろ向きにする、の意。

（二二五）　めかれせずいとど櫻ぞ惜しまるるうちもまぎれぬ春の山里　（二十九歳）

【字句解】「目かれせず」目を離さずして見る、注視する。「いとど」ますます、いよいよ。「惜まるゝ」愛づ、いつくしむ。「うちもまぎれぬ」うちは接頭語、もは感嘆助詞。

【歌　意】何ものにも眼をまぎらはされない、煩らはされない、靜かなる春の山住で、櫻ばかりに、眼を離さずして見守つてゐると、いよいよいつくしく思はれる、の意。

【批　評】何といふ靜かな、しんみりした歌であらう。めづらしくも、此處は禁庭で無く水無瀨でも無い。櫻花を題にして秀歌の詠み競べをしようと言ふのでは無い。山中の花に一人對座した定家の心の姿である。山家集の西行の境地である。

（二六）　あしびきの山櫻戸をまれにあけて花こそあるじたれを待つらむ

（五十八歲）

【字句解】「山櫻戸」、普通「杉の戸」「松の戸」などといふはその建築の用材により

いふのであるが、こゝでは、山櫻の咲き滿ちた山家と採る方がよい。

【歌　意】山櫻の咲き滿ちてゐる山の家では、偶々門を開いてあつて、其處に其家の主人顔に櫻花が咲き盛つてゐるのは、一體誰を待つてゐるのだらう、の意。

（二七）名もしるし峯のあらしも雪と降る山さくら戸の曙のそら　（五十三歳）

【字句解】「名もしるし」嶺のあらしに懸り嵐山のこと。「山櫻戸の曙」は戸を開けるに懸けてある。

【歌　意】この家の朝戸を開けて見ると、向うの嵐山はその名の通り花吹雪の嵐である、の意。

（二八）庭もせにうつろふころの櫻花あしたわびしき數まさりつつ　（五十三歳）

【字句解】「庭もせに」庭も狹くなる程。「うつろふ」散る。「かず」落花の數。

【歌　意】散り方の櫻の花は、庭も狹くなるほど、朝毎に落花の數を增して、わびしいことよ、の意。

（二九）　みくりはふ汀のまこもうちそよぎ蛙鳴くなり雨のくれ方　（二十九歳）

【字句解】「みくり」三稜草、萍草科に屬する草。「はふ」這ふ。「まこも」眞菰のこと。

【批　評】自然そのもの。三稜草と眞菰草と二種の草を一二句の中に無造作に取り入れて、それが少しもうるさく無いのは手際である。

（三〇）　つつじ咲く苔のかよひ路春ふかみ日かげをわけて出づる山びと　（二十九歳）

【字句解】「ふかみ」深い故に。「日かげ」日光。

【歌　意】咲き盛るつつじの中をわけて出で來る樵夫は、恰もその花に照り映える、赤い日光の中を、分けて出て來るやうだ、の意。

【批　評】鮮やかな印象的の作。

（三一）　かずまさる吾があらたまの年ふればありしよりけに惜しき春かな

【字句解】「かずまさる」數が增す。卽ち年齡をとる。「新玉の」枕詞。「ありしより」昔よりは。「けに」まさつて。

【歌　意】年齡が增してゆく程、昔日より一層まさつて惜しく思はれる暮春であるわい、の意。

【批　評】老境の定家が春の暮れの述懷である。何でも無いやうで深みのある、しんみりとした作。技巧上から觀て面白いのは「新玉の」といふ枕詞を七音の句の中に挿入した傍若無人さである。同じ百首歌（貞永元年四月關白左大臣家百首）の中に今一つ、

秋の月たまきはるよのななそぢに餘りてものは今ぞ悲しき

又、五十四歲の內裏百首中にも

うばたまの夜わたる月のすむ里はげに久方の天の橋立

(三二) なにとなく過ぎにし春ぞしたはるる藤つつじ咲く山のほそ道(二十六歳)

【批評】 斯うした無技巧のただごと歌が拾遺愚草中にあるのかと、まだ讀まぬ人は疑ふであらう。

(三三) 暮れそめて草の葉なびく風の間に垣根すずしき夕顔の花 (三十二歳)

(三四) たかせ舟くだす夜川のみなれ棹とりあへず明くる頃の月影 (四十一歳)

【字句解】「たかせ舟」高瀬舟と稱する川舟の一種。「みなれざを」水に馴れた棹。「とりあへず」棹を取りあへずの意と、猶豫なく、すぐに、早々に の意も含まれてゐる。上句は有心の序。

【歌意】 夜の川を下す高瀬舟の水馴棹を、取りあへぬうちに早々明ける此の頃の短夜の月かげよ、の意。

【批　評】短夜の月光の明け易さを目前の情景を序として巧みにも涼しく言ひ現はした。處女作（初學百首）の中に

五月雨に水なみまさるまこも草みじかくてのみ明くる夏の夜

と言ふのがある。構想は全く同一である。玆に注意すべきは頃の月影といふ結句の變調である。

立ちのぼる南のはてに雲はあれど照る日くまなき頃の大空　（三十五歲）

遠山のこなたの空のむら時雨くもればかかる頃のうき雲　（三十五歲）

影を又あかずも月のそふるかな大方秋の頃のあはれに　（三十七歲）

後京極良經等にも同樣の結句はあるが、多分定家の創意であらう。

（三五）　行きなやむ牛の步みに立つ塵の風さへ暑き夏の小車　（三十五歲）

【批　評】小車は百敷の大宮人が乘る牛車である。此の歌は他人の牛車の遲々たる進行を橫から眺めての作としても面白いけれども、作者自身が乘つて居ての實感と觀

る方が一層適切のやうである。大宮人の定家は牛車に乘る資格は勿論あつたが、「亂代の貧者」の彼れはろくな車を持つてゐなかつたらしい。或る日逢坂山で急雨に出會ひ、弊車輪が危くなつたので馬に乘り換へて歸宅した彼れである。又或る夜宜秋門院から俄にお召があつたが、あいにく牛車を持ち合はせない。やつと牛を借りて參殿した彼れである。斯うした貧者の定家が、借りものの車にちよこなんと乘つて、牛の跡から起る風埃に咽せんでゐる處の告白と觀たならば、此の一首は余程現實味が豐かになる。

（三六）　夕立の雲間の日かげ晴れそめて山のこなたをわたる白鷺　（三十歳）

【批　評】　翠微の前面を横ぎる白點々の群禽を見よ。當時の繪畫的傾向を代表する作。

（三七）　このごろは南の風にうきみるのよるよる涼し芦のやの里　（五十九歳）

【字句解】　「うきみる」浮海松にて、海松の水に漂ひ居るもの、此の場合は有心の

枕詞。「よるよる」夜々にして、浮海松の寄るゝと受けたのである。「芦の屋の里」津の國の名所。

秋歌

（三八）颪立ちて澤べにかけるはやぶさの早くも秋のけしきなるかな　（三十歳）

【字句解】「かける」は空高く飛ぶの意。「はやぶさ」は猛禽類中鷹科に屬する隼と稱する鳥。而して上句全體は「早くも」を起すための有心の序詞。

【歌　意】颪が吹いて、澤邊の空を隼が翔けてゐる。もはや秋の景色となつて來た事であるわい、の意。

【批　評】一首も亦、颪空を翔る隼の如く、爽やかで且つ緊張し切つてゐる。

（三九）芽ぐみぬと見れば暮れにし春の草颪におどろく秋は來にけり　（制作歳末勘）

【歌　意】　時の推移の迅速さを草に寄せて詠むだ歌。おどろいた（うちそよいだ）のは草の葉であり、作者の心でもある。

【批　評】　物象の移りに眼をみはつて、その速かさを美句と機智とで表現する事は、

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く　（古今集）

の古から

なつかしき若葉のかげになりにけり昨日か吹きし木枯の杜　（香川景樹）

の近世に至るまで、歌人の遊戯の一つのやうになつて、類想の歌が無数にあるのである。その中で、定家の此の歌などは最も自然の儘でいや味無く、線の太い佳い作だと思ふ。

（四〇）　かへりみる裾野の草葉かたよりにかぎりなき秋の山おろしの風

（四十三歳）

【字句解】「かへりみる」後の方へ振り向いて見る。「かたより」一方へ偏するの意。

【批　評】調子は新古今の本格でありながら、それでゐて寫實の確かさを見るがよい。初句かへりみるで作者の位置と姿態とが具象化された。茫々たる草原の中に立ち竦むだ人間一個の寂寥の姿を見よ。下句には白氏文集の望秦嶺上回頭立、無限秋風吹白鬢を聯想せしむるもの無いでも無いが、決して漢詩の直譯ではない。尤も、當時の和歌は漢詩の影響を被つた事尠く無い、殊に格調の上に於いて。多藝多能の定家は唐詩の摸倣をも善くした。日記中に絕句の佳調を折々見せてゐる。家集中にも、

花ざかりむなしき山に啼く猿の心知らるる春の夜の月　（三十歲）

樓の上の秋の望みは月のほど春は千里の日ぐらしの空　（三十歲）

過ぎ行くと人の聲する宿もなし入江の浪に月のみぞ澄む　（三十五歲）

來し方も行くさきも見ぬ浪の上の風をたよりに飛ばす船の帆　（三十五歲）

蘭省の花の錦のおもかげに庵悲しき秋の夜の雨　（三十五歲）

釣舟のうかぶ浪路に月老いて人と秋との別れをぞ思ふ（三十五歳）

と言つたやうな生硬な漢詩直譯がある。これらは一見新らしく見えるけれども、再讀三讀すると倭歌(やまとうた)で無い事に感付く。新古今集の

昔おもふ草の庵のよるの雨に涙な添へそ山ほととぎす（俊成）

も有名な歌であるが、實は鍍金であつて、金では無い。明治時代の西洋式文脈の文章のやうなものである。

（四一）旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき峰のかけはし（三十五歳）

【字句解】「峯の梯」山の棧道。卽ちけはしき處に板などを渡したる橋の意。

【歌　意】夕陽さびしげに照りわたる山中のかけ橋を渡つて行く人の、旅裝の袖を秋風が吹きかへしてゐる、の意。

（四二）淺茅生の小野の篠原うちなびきをちかた人に秋風ぞ吹く（五十三歳）

【字句解】「淺茅生の」小野に懸る枕詞、「をちかたびと」遠くを行く人。

【歌　意】野の篠原が押し靡かされさうして遠くを行く人にも秋の風の吹くのが見える、の意。

【批　評】此の歌と「旅人の袖ふきかへす」の歌とは類似の對象を持つ双璧である。新古今集時代の客觀的傾向、繪畫的描寫は此の一首にその遺憾無き代表者を見出してゐる。さうして此の畫幅は、墨一色で無く、濃厚瑰麗な丹靑を惜氣も無く盛上げて描かれながら、觀者へ傳へる印象は蕭々たる寂寥感である。繰返して言ふ時代特色、絢爛と寂寥との不可思議な渾和を視よ。

（四三）　みわたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ　（二十五歲）

【字句解】「浦の苫屋」は茅がやなどにて葺きたる蜑の小家。

【歌　意】蜑の小家が淋しげに立つてゐる海邊の秋の夕景色を眺めて居れば、その物哀れさは格別で、世に花も紅葉もいらぬわい、の意。

【批　評】春曙を麗はしいものの、秋夕を淋しいものの代名詞の如く思つてゐた當

時の歌人達は「秋の夕暮」と先づ結句に置いて、もの哀れな、淋しげな歌を競詠したかの觀がある。當時無數の秋夕の歌は大方斯うした觀念から築造して行つたもので、自然の對象に直面して寫實して行つたものは頗る稀有なのである。定家の此の歌にしても、その制作過程を想像すれば、多分彼れはいろいろと物哀れな情景を腦裏に描きつつ、最後に、渚邊の蜑の小家から藻しほ燒く煙の一すぢ細く立ち登つてゐる遠景を心眼に視た。或はそれは內裏の御障子の繪であつたかも知れない。しめた、是れだ、と下句を呵成した彼れは、冷然として智に返つて上句を案じ初めた。その上句の觀念と下句の景物とが一呼吸の律動で生命付けられてゐる處は、定家が例の手際である。

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ　(西行)

なども「見渡せば」と全く同一の制作過程を取つたに相違無い。下句は實際の觀相であつたとしても、上句は後から附けた概念である。

(四四)　なほざりの小野の淺茅におく露も草葉にあまる秋の夕ぐれ　(五十五歳)

【字句解】「なほざり」等閑、うち捨ててあるかへり見られない。「淺茅」茅のまばらに生ひてある所。「も」さへも。

【歌　意】かへり見られない野の淺茅に置く露さへも、草葉にあまるぐらゐに結でゐる秋の夕暮である。況して有情の人間の袖の露は一層繁いといふ心持を暗示してゐる。

（四五）ほのかなる鐘のひびきに霧こめてそなたの山は明けぬとも見ず　（五十八歳）

【字句解】「鐘」こゝでは曉鐘。「あけぬとも見ず」明けたとも見えわかぬわい、の意。

【批　評】そなたの山は無論曉鐘の響いて來る方の山である。換言すれば、その山の中腹か頂上かに寺院が籠つてゐるのである。手際のよい寫實。洛外西山邊の秋が髣髴として心に浮ぶ。

（四六）　天の原おもへばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ　（二十歳）

【歌　意】　思うて見れば、天空は常に變る色も無い。してみると、唯「秋」といふものが月光を不思議と冴えさせるのであるわい、の意。

【批　評】　此の歌と同一の思想を基としたのが晩年にも一首ある。

時わかず空ゆく月の秋の夜をいかに契りて光そふらむ　（七十一歳）

乍併、晩年のは乾燥した知であつて、處女作のは立派な歌である。思へばかはる、秋こそ月のに感情の律動がある。此の歌などは目で讀むべきで無く、耳で聽く可き本來の歌なのであらう。變る色も無しを少しく穿鑿する。

時わかぬ波さへ色に泉川ははその森にあらし吹くらし　（三十二歳）

清見潟ひまゆく駒も影うすし秋なき波の秋の夕ぐれ　（五十四歳）

空や水は時候の推移を知らぬもの、四季による色の變化無きもの と言ふ考へである。近代人から觀れば自然の眺め方が不足してゐると言はれさうだ

（四七）ながめじと思ひしものを淺茅生に風吹く宿の秋の夜の月　（二十五歲）

【字句解】「ながめじ」物を思ひながらうち見ることをしまい。「あさぢふ」茅の生えてゐる所。

【歌　意】物を思ひ乍ら見ることはしまいと思つてゐたものを、淺茅生に風が吹く吾が宿の秋の月をつい眺めて、物の哀れを思はずにゐられぬ事よ、の意。

【批　評】幽玄有心の趣。美と寂との融合。思ひしものを、淺茅生に、風吹くあたりの旋律の美くしさはまさしく新古今調の本格である。

（四八）月きよみ四方の大空雲きえて千里の秋をうづむ白雪　（二十八歲）

【字句解】「きよみ」淸さにである。「千里の秋」上句の大空に對する、千里の外の秋の風物の意。

【歌　意】月の淸さに天雲は消えてしまつて、ただ地上の萬象を雪の如き月光で覆つてゐる、の意。良經にも殆ど同一の歌がある。

雲きゆる千里の外に空冴えて月よりうづむ秋のしら雪

月光を雪として形容するのは、漢詩の影響であらう。

（四九）月清みはねうちかはし飛ぶ雁の聲あはれなる秋風のそら（二十九歲）

（五〇）明けばまた秋のなかばも過ぎぬべし傾く月の惜しきのみかは（二十九歲）

【批評】仲秋明月の吟。十五夜が明ければ秋の半が過ぎ去るのは當然だ、理窟だ、知識だと此の歌を貶しめてはならない。一首は感情の律動で貫かれてゐるから立派な詩である。一の句、三の句、結句と感動が呼吸してゐるのを見逃してはならぬ。後鳥羽院が或る時家隆を仙洞に召されて「當今第一の歌人は何人か」と御下問せられた。家隆は御返事申上げずに退出したが、その袂から紙片を落して行つた。院が何心なくそれを拾つて御覽になると「明けば又」の歌が書かれてあつた。斯樣な挿話を何かの隨腦物で讀んだ事がある。

（五一）いざさらば尋ねのぼりて闢据ゑむただ此の上ぞ月の入る峰（三十五歲）

【批　評】此の歌は多分業平の

　　飽かなくにまだきも月の隱るるか山の端逃げて入れずもあらなむ

から暗示を得たのであらう。定家は伊勢物語の大の禮讃者であつた。業平の歌には有情滑稽（ユーモア）があるけれども、定家の方のは餘りにぶつきら棒だ。乍併、そのぶつきら棒の放膽さが此の歌を理窟に墮さずして感動的のものに救ひ上げたのである。

（五二）眺むれば松より西になりにけり影はるかなるあけがたの月（二十九歳）

（五三）大空にかかれる月も高まどの野べにくまなき草の上の露（五十四歳）

【字句解】「月も高まどの」高まどは、寧樂の南方、高圓野と稱する野の名。高は月が高く空にある意と、野の名との懸詞。「くまなき」隅々まで行き渡つてゐるの意。

【歌　意】大空にかかつてゐる月も高く照り、高圓の野の隅々にまで、草の上に露が置いて、その上にも月光が映じてゐる、の意。

（五四）秋の月川おと澄みて明かす夜にをちかた人のたれを訪ふらむ（五十五歳）

【歌　意】　月前遠情の歌。嵯峨、水無瀨、或は美豆野とかの川岸の名所を月夜に憶ひやり、其處の里人（をちかた人）が、この月明に乘じて水を渡り、又は岸を步いて誰かを訪ねて行くであらうと想像して詠める歌。

（五五）　もゝしきのとのへを出づる宵々は待たぬに向ふ山の端の月　（七十一歲）

【字句解】　「もゝしき」百敷で禁中のこと。「とのへ」殿上。

【歌　意】　禁中を退出して來る晩每に、待つとしもなく、おのづから東山の月をまともに見るの意。大宮人である作者の生活の一端が窺はれる。

（五六）　衞士の焚く煙ばかりはさもあらばあれ雲ゐの月の秋風の空（制作歲未勘）

【字句解】　「衞士」衞士府に屬し禁庭を守る兵士。「さもあらばあれ」遮莫、せむかたなけれどの意。

【歌　意】　衞士のたく烟ばかりは、せむかたもないが、禁庭の月はただそれが聊かの障りといへばいふだけで、秋風の空にかかつて格別冴え渡つてゐる、の意。而もそ

の篝火の烟も却つて風情を添へるといふ心持を暗示してゐる。

（五七）秋の夜の有明の月の月影はこの世ならでもなほや忍ばむ（二十九歳）

【歌　意】秋の有明の月のあはれさは、この世でなく、死むで來世に行つてからでも、憶ひ出すであらう、の意。

【批　評】現世の人間生活は厭離しても、花鳥風月の折々の美くしさだけは深い執着となつて來世までも身に添ふといふ事である。四季自然の風物は萬葉集の歌人に取つては何處までも現世現實の哀樂であり、古今集以來の王朝歌人に取つては主として風流の遊びの對象であつた。新古今集の歌人に取つては、最も深化して、それ等は流轉の娑婆に於ける唯一の美くしい愛着物となつたのである。此の愛着が增長しては、一旦厭離した筈の人生をも花月の爲めに嘆美する事さへある。自然美と人間苦とは、彼れ等の心中に深刻な對照となつて、不斷の葛藤を生ましめてゐる。彼れ等の花鳥風月の詠嘆は直接間接に、明示的暗示的に、無常觀の黑い背景を持つてゐる事を忘れて

はならない。予が繰り返して言ふ絢爛裏の寂びしさとはその事である。新古今集の歌を單なる美辭の羅列と考へるのは極めて皮相な觀察である。保元平治の亂から平家の沒落、源氏の內爭、承久の亂に終る戰亂期の世相は必然の結果人々を厭世的ならしめた。殊に、權力の衰頽して行く朝廷とその周圍の貴族社會では一層さうであつた。西行の遯世も長明の方丈記もその間の所産である。繰り返して言ふが、新古今集の人々の華麗を極めた言葉の花は斯樣の環境に在つて創造せられた不可思議な記念物である事を忘れてはならない。花月に對する愛着の歌の代表的なものは何と言つても山家集の中に一番多いのであるが、拾遺愚草中にも猶左の如き佳什がある。

あぢきなく此の世を身にもしむるかな梅が枝過ぐる風の名殘に　（二十一歲）

なべてにぞ惜しみもせまし櫻花思へば何のちぎりなるらむ　（二十一歲）

惜しまじよ櫻ばかりの花も無し散るべき爲めの色にもあるらむ　（二十五歲）

吹く風も散るも惜しむも年ふれどことわり知らぬ花の上かな　（二十九歲）

春よただ露のたまゆらながめして慰む花の色はうつりぬ　(三十五歳)

露の身はかりのやどりに消えぬとも今宵の月の影は忘れじ　(二十歳)

(五八)　秋とだに忘れむと思ふ月かげをさもあやにくに擣つ衣かな　(四十歳)

【字句解】「秋とだに」秋といふ事ばかりも。「さも」さやうに。「あやにくに」意外に、折あしく、意地わるく。

【歌　意】秋の夜の月影は哀れに悲しく、堪へ難い心地もするに、せめて秋といふことばかりも忘れむと思ふのに、生憎と衣を擣ち出して、秋節の悲哀を傳へ、秋を忘れしめぬわい、の意。

(五九)　衣うつひびきに月の影ふけて道行く人の音もきこえず　(二十九歳)

【批　評】後徳大寺實定の有名な今様も哀れであるが、定家の此の歌も捨て難い。建久元年の作であるから、奥州征伐を終へて頼朝が入洛した年の事である。亂裡の巷とまではあらずとも洛中洛外に不安の雲は漂つてゐたに相違無い。擣衣の音に中天の

月は更けて、都大路は人音もしないと、定家が淋しがつてゐる。良經が李白の子夜呉歌を想つて、

かへるべき越の旅人まちわびて都の月に衣うつなり

と詠嘆したのも此の頃の秋では無かつたか。

（六〇）鹿の音はつたふるをちのあはれにて宿のけしきはわれのみや見む　（二十八歲）

【歌　意】鹿の遠音を聞いて、遠方の物の哀れさを身にしめてゐるが、この哀れさは諸人も感じてゐるであらう。然し自分はその上に、吾が佗び住みの家の景色の哀れさを重ねて感じてゐるの意。

ながむれば千々にもの思ふ月にまた吾が身ひとつの峯の松風　（長明）

と同巧である。

（六一）ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影　（四十歲）

【字句解】「霜おきまよふ」霜の置き亂るること、即ち霜のおびただしく置きたる意。「床のつきかげ」山鳥の床にさす月光。

【批　評】大正十三年六月予は「新古今集の象徴的傾向」と題する一文を某誌に寄せたが、その中に此の歌を批評して次のやうに書いた。

「從來の註釋家はいづれも此の作を目して暮秋の夜に山禽のわびしさを想ひやつた趣向であると片付けてゐるが、私はさう思はない。さう思ひたくない。結句床の月影と擱筆した瞬間に於いて作者は客觀と主觀との差別を卒然曠失し去つたのである。霜月の夜の牀上に見出だしたのは作者自身のわびしい姿であつた。其處に象徴の深さを見る。」

予は今日も右の解釋を正しいと信じてゐる。さうして、此の歌を見る每に、白樂天の「燕子樓中霜月夜」といふ絶句を口誦さむのである。

（六二一）　小倉山しぐるる頃の朝な朝な昨日はうすき嶺のもみぢ葉　（五十六歳）

【批　評】四句昨日は薄きが此の歌の生命である事は言ふ迄も無い。定家で無かつたならば、平凡に濃さまさり行くとする所である。昨日は薄きとした爲めに、單に今朝の色濃さが述べられたのみならず、過去の朝々の秋色が具象的に回想せられて歌の奧行を深めた效果がある。此の表現は持つて廻つた言葉上の技巧では無く、歌の內容と緊密な關係を持つ。愚見抄や續歌仙落書の裏書を待つ迄も無く、此の歌は秀歌の中に數へられねばならぬ。嵯峨小倉山の麓に定家の山莊があつて、彼れは折々其處へ出掛けてゐる。百人一首の色紙で有名な山莊は爲家の岳父宇都宮入道の別墅であつて、定家のとは違ふ。貧乏な定家のは茅屋に等しいものであつた事は日記の諸所から推定出來る。その茅屋で作つたらしい歌に、此の歌以外にもなかなか佳作がある。

露霜のをぐらの山に家居してほさでも袖の朽ちぬべきかな　（三十九歲）

小倉山秋のあはれや殘らましを鹿の妻のつれなからずば　（五十四歲）

結びおきし秋の嵯峨野のいほりより床は草葉の露に馴れつつ　（五十四歲）

しのばれむものともなしに小倉山軒ばの松ぞ馴れて久しき　（歳末勘）

小倉山松にかくるる草の庵の夕暮いそぐ夏ぞ涼しき　（五十九歳）

（六三）　吹きはらふ紅葉の上の霧晴れて嶺たしかなる嵐山かな　（七十一歳）

【批　評】　定家の代表的傑作の一つ。初句吹き拂ふは三句の霧に懸るのである。普通ならば斯樣な形容詞の間接的關連法は躊躇すべきであるが、傍若無人の定家はそれを平氣でぞんざいにやづてのけて置いて、直ちに轉句嶺たしかなると動かぬ所を決め付けた。老歌人の腕前は斯くの如く的然である。その眼は澄明、現象の中點を覗据ゑた。紅葉の上に忽焉として現出した山巓は無論蒼々たる黑緑の老杉群である。動後の靜、雲霧は再び低迷しない。一首の持つ澁さと確かさとは和歌史一千年中の珍である。

（六四）　露霜のした照る錦たつた姫わかるる袖もうつるばかりに　（四十八歳）

【字句解】　「下てるにしき」蔭も耀くほどの紅葉。「露しも」は此の場合枕詞的に使

はれてゐる。「立田姫」は秋の擬人、而して錦を裁つに懸つてゐる。「うつるばかりに」照り映えるばかりに。

【歌　意】暮秋の歌で、立田姫の別れに紅葉を景としてあしらつたのである。別れてゆく「秋」の袖に、紅葉が照り耀くの意。

（六五）吾がおもふ人すむ宿のうす紅葉霧のたえまに見てや過ぎなむ（二十六歳）

【批　評】菅公の

君がすむ宿の梢のゆくゆくとかくるるまでにかへりみしはや

を心に置いて作つたには相違ないが、ともかく情景一致した佳作の一つである。愚草中に此の外にも類歌として、

かへりみる梢に雲のかかるかな出でつる里や今しぐるらむ（二十八歳）

たまぼこの行く手の道もすぎわびぬ思ふあたりの宿の梢は（三十五歳）

などある。現代人の趣味から言ふと、「かへりみる梢に雲の」の歌が滋味があつて一

番好かれるかも知れない。新古今人は無論「吾が思ふ」を採る。

冬歌

（六六）寺々におなじくひびく鐘の音に今年も冬の先づきこゆらむ（三十歳）

【歌意】諸處の寺に、同じやうに鳴り響く寒い鐘の音に、今年も冬になつたことを知る、の意。「鐘の音」ゆゑ「きこゆ」と緣語で表はしたのである。京都らしい歌。

（六七）霜冴ゆるあしたの原の冬枯れに一花咲けるやまとなでしこ（二十五歳）

【字句解】「あしたの原」歌枕としての大和の國の原の名。但しこの歌では地名で無く、單に朝の野べといふ意。

【歌意】霜がつめたく置く朝の野原の、冬枯の中に、時遲れて一輪の撫子が咲いてゐるよ、の意。

【批評】確かな寫實。又一方から視れば時代特色の美と寂とを兼ね併せた傑作。

（六八）　このごろは霜雪だにもおち散らぬ冬の深山の晝のさびしさ　（五十九歳）

【批　評】　平明な寫實で、新味のある作。晝のさびしさは定家の創意である。白晝の寂寥を初めて感じたのは明治大正の歌人等であると自惚れてはいけない。「茜さす晝はひねもす」と萬葉人は歌ひ、「晝は消えつつ」と王朝人は嘆いたが、定家の此の句は、又それらと違つて、晝そのものを對象として取扱つてゐるのである。寒い蒼空、風無き枯木、霜雪だにも落ち散らぬは冬の眞晝を適切に具象化してゐる。

（六九）　人訪はぬ冬の山路のさびしさよ垣根のそばに巫鳥（しとど）おりゐて　（三十歳）

【字句解】　「しとど」は鵐と稱する鳥。燕雀類中の小鳥であつて山野に棲息する。

【批　評】　定家の傑作の一つ。粉飾も形容も縁語も懸詞も無く、生一本の寫實である。形式も捉らへた物も共に新古今の本格では無く、それが却つて異彩を放つ。上句を一見平凡な概念でさつぱり片付けたのも心にくき手際である。畫幅の中心に描かれたものは細微な寒禽一羽である。周圍の空間は出來る丈け餘白として置くがよい。そ

れで無いと、折角可憐の小禽がまぎれてしまふ。

（七〇）浦風に燒くしほけぶり吹き迷ひたなびく山の冬ぞさびしき（四十歳）

（七一）冴えとほる風の上なる夕月夜あたる光に霜ぞ散りくる（四十歳）

【字句解】「風の上なる」風空の上に懸り、「あたる」は作者が月光に眞向つて、その光を浴びてゐるの意。「霜ぞ散りくる」は寒冷の感の形容。

【歌　意】冴え徹る風空の上の月に眞向つて、その月光を浴びてゐると、霜も散り來るがに、鋭い冷めたさを覺ゆる、の意。

（七二）ものおもはぬ人の聽けかし山里の氷れる池にひとり啼く鴛鴦（をし）（三十五歳）

（七三）いたづらに折松焚きてふけし夜もなほ九重のうちぞこひしき（五十九歳）

【字句解】「折松たきて」は禁中で寒夜宿直の時、折松の柴をたくの意。

【歌　意】宿直の寒い夜は、折松をたいてわびしく更かしたものである。そんなことでも、倘禁裏の事になると、懷しく憶ひ出される、の意。

【批　評】 雲上生活は平安朝以降の貴族に取つて人生の憧憬の殆んど凡てであつた。榮達の滿足は勿論、物慾も、戀愛の甘味さへも大方はその中にあつた。八代集の隨所に此の種の歌のあるのは極めて自然である。おなじく雲上を戀ふるにしても、

忘れじよ忘るなとだに言ひてまし雲居の月の心ありせば　（俊成）

のやうに花に付け月に寄せるのが普通であるのに、定家のはさすがに獨創的である。さうして、上句「折松焚きて」の具象的なのが下句の概念的なのを見事に救つてゐる。

集中から同種の歌の佳作を拔くと、

雲の上の霞にこむる櫻花また立ち並ぶ色を見ぬかな　（二十六歲）

百敷やたましく庭のさくら花照らす朝日の光そひけり　（二十九歲）

春をへて御幸に馴るる花の蔭ふりゆく身をもあはれとや思ふ　（歲末勘）

忘れずよ御階の霜の長き夜に馴れしながらの雲の上の月　（歲末勘）

九重のとのへのあふち忘るなよ六十（むそぢ）の友は朽ちてやみぬと　（歲末勘）

雲の上近きまもりに立ちなれし御階の花の蔭ぞこひしき（七十一歲）

（七四）冴ぇ暮らす都は雪もまじらねど山の端しろき夕ぐれの雨（五十九歲）

【歌意】都は今日寒い雨が降りつつ暮れて行つたが、雪はまじつてゐない。乍併山の方を見ると白くなつてゐるから、そちらには雪が降つてゐるのだらう、の意。

【批評】複雜な內容を手際よく表現してゐる。又、京都の地方色のよく現れた歌。

（七五）待つ人のふもとの道は絕ぇぬらむ軒端の杉に雪おもるなり（二十八歲）

【歌意】わが待つてゐる人の通つてくる山麓の道も埋もれてしまつたであらう。吾が家の軒近き杉には、雪が刻刻重く降り積つて行くわい、の意。

【批評】明月記承元元年四月八日の條に斯ういふ事が書いてある。昨日院の仰せに從ひ自讃歌十首を書いて上つた。すると直ちに院から御質問で、汝の秀歌「待つ人の麓の踏は」と「旅人の袖吹き返す」との二首を何故右の中に入れなかつたか、と仰

せ事あつた云々。まことに後鳥羽院の御眼識通り、此の二首は定家の自讃に値すべき佳作である。定家が此の二首を打棄てて置いて如何なる十首を自讃歌として上つたかは日記に書かれてゐない。ついでに言ふが、世上に流布せる自讃歌（當時の歌人十七人各十首）なるものは後人の假托の作である。

（七六）　吹きみだる雪の雲間を行く月のあまぎる風に光添へつつ　（四十歳）

【字句解】「吹きみだる」吹かれ亂るる、「あまぎる」雲や霧のため空の曇ること。

【歌　意】月前雪と題する歌。風に吹かれて雪の亂れ散つてゐる雲間を、月が隱見してゐる。その月が吹雪の風の通るあとから、一層光を増す、の意。

【批　評】これも、如何にも京都らしい、地方色の出てゐる歌。後世「桂園一枝」中にも

てる月の影のちりくる心地してよる行く袖にたまる雪かな

といふ類想の歌があるが、景樹のは美くしい技巧、定家のは冴えた眞實である。

（七七）　跡もなき末野の竹の雪折れにかすむやけぶり人は棲みけり　（四十歳）

【字句解】「跡もなき」人の往來もない。「末野」野の果て。「ゆきをれ」雪の重さに堪へず折れること。

【歌　意】人の往來もない野のはてに、竹の雪折れして、その向うに霞むで見えるのは煙であらう。するとやはり人が棲むでゐるのだ、の意。

【批　評】下句に漢詞の影響が窺はれる。

（七八）　明けぬとて出でつる人のあともなしただ時の間につもる白雪（五十五歳）

（七九）　かきくらす軒端の空に數見えてながめもあへず落つる白雪　（三十歳）

【字句解】「かき」は意味を强める接頭語。「かずみえて」雪の片々が見えて。「ながめもあへず」眺めてゐる間もなく。

【歌　意】暗く曇つた軒先の空を、雪が片々と落ちて來るのが、數へられるやうに見える。それが眺めてゐる間もなく地上に落ちて行く、の意。

【批　評】申分の無い寫實の傑作。

（八〇）いたづらに松の雪こそ積るらめ吾が踏み分けしあけぼのの山（七十一歳）

【批　評】美と寂との融合せる佳作。新古今調の本格であり乍ら、さすがに老齡にふさはしくすつぱりした姿である。下句は若い時分に遠足した山の事などを追憶してゐるのでは勿論無い。曾つて浮世離れて閑居した事のある家の生活を哀慕してゐるのである。厭離しては厭離し切れず、山に這入つたり聚落に下りて來たりする有樣をば、西行始め當時の歌人の多くが歌つてゐる。予の此の觀方を裏書する歌が定家三十五歳作「韻歌百二十八首」中の山家と題する歌の中にもある。左の通り。

影絶えて山もや主は忍ぶらむ昔せき入れし水のながれに
たちかへり山路悲しきゆふべかな今はかぎりと宿を眺めて

（八一）狩衣はらふ袂のおもるまで交野（かたの）の原に雪はふりきぬ（二十八歳）

【字句解】「かり衣」狩獵用の衣服。「かた野の原」河内國交野の原で、當時の御料

地。

【批　評】大まかで、而かも確かな作。有名な、

　駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮　（三十九歳）

よりもどれ位佳いかわからぬ。人口に膾炙など言ふ事は、それが往々衆愚の人口であるから、眞の鑑賞の場合には注意を要する。

（八二）　ひきかくる閨のふすまのへだてにも響きはかはる鐘の音かな（三十二歳）

【字句解】「ひきかくる」引被く。「閨のふすま」夜具。「へだてにも」その僅かな隔てによつてさへも。「かはる」遠くなる、幽かになる、或は音色の變るなど變化するの意。

（八三）　あけ方の灰のしたなるうづみ火の殘りすくなく暮るる歳かな（二十八歳）

【字句解】上句は「のこりすくなく」を引き起すための有心の序詞。

【歌　意】歳末の作。夜明け方の火桶の中には、埋火が僅に殘つてゐる。そのやう

に、残る日が少く今年も暮れてゆくよ、の意。

戀　歌

（八四）いかにして如何に知らせむともかくも言はばなべての言の葉ぞかし　（二十歳）

【批　評】二十歳の若き定家は、自分の胸中を表現すべき適切な言葉を發見し得ないと嘆息した。その後不退轉の努力を續けて緣語、懸詞、疊句、序詞、本歌取り等、修辭法の一切を最も自在に驅使した彼れ、殆ど言靈の權化と成りすました彼れは、意外にも

敷島の道に吾が名は辰の市やいさまだ知らぬ大和言の葉　（五十四歳）

と述懷した。名は當今第一の歌人であつても、實のところ大和言葉を知つてゐないと告白したのである。生涯言葉の道に苦心して、末世のわれ等から口幅つたい批評を受

けてゐる。さうしてこれはやがて古今大方の歌人の運命なのだ。

ついでに誌す。定家の戀愛に就いて好奇心を持ち、「明月記」から何か資料を獲られぬかと探して見たが、どうも手掛りが見當らぬ。それもその筈で、幾ら克明な定家でも人に見せ度くない事は書かなかつたかも知れないからである。では、歌の中に告白されて居らぬかと思つて、その眼で家集を通讀して見ても、やはり具體的の事はわからない。詞書の無い題詠形式の百首歌中には勿論手掛りは無い。唯僅に愚草下卷戀の部の中に女との贈答の歌や、「遠き所にて行き別れにし人に」とか「久しくかき絶えたる人に」などいふ詞書の歌が少々散見するのみである。日記に出て來る女性では先づ二十七歲の秋九月某日の條に「黃昏殷富門院に參り大輔と淸談、漸亥時に及ぶ、無人寂寞、」とある殷富門院大輔の名に眼が着く。その後此の女歌人の名は日記中に屢々見えるが、好奇心を唆るやうな挿話は全く書かれてゐない。宜秋門院丹後、宮內卿局、二條院讃岐などの名も折々出て來る。謠曲「定家」で美化された式子內親王への悲戀

は架空の小説であるらしい。四十二歳有馬湯治の途中、江口の遊女三位の宅に寢たと書いてゐる。西行の如き野暮な押問答はしなかつたらしい。

（八五）あひみてもなほ行方なきおもひかな命や戀のかぎりなるらむ（二十六歳）

（八六）歸るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月　（二十六歳）

【字句解】「かへるさの」歸る途の。「人の」吾が待つ戀人の。

【歌　意】吾れは斯く戀しき人を待つて、一夜を明しつつ見る有明の月であるが、その人は他の女と逢うて歸る途に、この月を眺めてゐるであらう、の意。

【批　評】待戀の歌なるゆゑ當時の風習から言つても女性に代つての題詠である。かなり複雜な事を何等の滯りも無く表現してゐる。後に出て來る「風つらき」の歌の連作とも觀られ、情景一致の傑作。二十六歳で此の歌あるはさすがに大家と言はねばならぬ。鴨長明の「無名抄」にも此の作を新古今集戀歌の上乘のものとして擧げてゐるが、何人もそれに異存はあるまい。

思ひ出でよ誰がきぬぎぬの曉も吾がまたしのぶ月ぞ見るらし　（四十歲）

ながめつつ待たばと思ふ雲の色を誰が夕暮と君たのむらむ　（四十一歲）

年もへぬ祈るちぎりは初瀨山をのへの鐘のよその夕ぐれ　（三十二歲）

などはいづれも「歸るさの」の異曲同巧であり、それから新古今集中の

いつも聽くものとや人の思ふらむ來ぬ夕ぐれの松風のこゑ　（良經）

は全く同一の句法格調である。

（八七）風つらきもとあらの小萩袖に見てふけゆく夜半におもる白露（三十二歲）

【字句解】「風つらき」風がつらく吹きあたる。「もとあらの」根本の方のまばらなこと。

【批　評】情景一致の上乘品。生命無き美辭の羅列、無用な歌枕の織り交ぜ、緣語、懸詞、さうした遊戲の戀歌ばかりを限りなく見せられては、如何に新古今集の辯護者でも倦勞して來る。それが、愚草上卷の中程で此の一首に讀み當てた瞬間、救はれた

といふ溜息を漏らす。待戀であるから、女性の身に成つて詠むだものと觀る方が適當である。風つらきはつれなく吹くで、主觀を持たせた處に象徵の影さへ見える。叢中に佇立して花影が袖に映つてゐる。夜露の重るは袂の上か花の上か。今宵をわれは待ち明かして、此の照る月の有明を戀人は歸るさのものと眺めるのであらう。萬葉歌人の戀は魂を搖すつて泣き叫び、新古今歌人の戀は面を曇らして靜かに萎折るのである。大和言葉固有の美くしさと宮女（斯く想像する）が崩折れのみやびやかさとは打傾けて此の一首に盛られてゐる。定家の戀歌の世にすぐれた例として此の歌を擧げたのは徹書記の具眼と言はねばならぬ。なほ、「風つらき」の類歌で面白いのが一首。

露をおもみ人は待ちえぬ庭のおもに風こそはらへもとあらの萩　（四十歲）

（八八）　忘れずば馴れし袖もやこほるらむねぬ夜の床の霜のさむしろ（三十二歲）

【字句解】「忘れずば」忘れずに居らば。「馴れし袖」共に寢て重ね馴れたる袖の意。「霜のさむしろ」寒さ身に泌む衾の意。

【歌　意】あの人も忘れず居らば、今夜あたりは袖も涙に氷つてゐるだらう。自分は寒さ身に泌む衾に、寢もやらず明かしてゐる、の意。

（八九）かきやりしその黑髮のすぢごとにうち臥すほとは面影ぞ立つ（歳末勘）

（九〇）こひしさを思ひしづめむ方ぞなきあひ見し程にふくる夜每は（歳末勘）

【歌　意】逢ひ見た時と同じ頃に夜が更けて來ると、必ず思ひ出す。その戀しさは押へるのに方法がない、の意。

（九一）色かはる美濃の中山秋越えてまた遠ざかる逢坂の關（七十一歲）

【字句解】「色かはる」紅葉する。人心の變化の意味を含むでゐる。「みのの中山」美濃の地名。「あきこえて」秋に越えて。「あふさかの關」近江國逢坂の關所。逢ふの意味を含むでゐる。

【歌　意】遇不會戀と題する歌。かつて相思の仲であつた人が、互の心に變化が來た結果、中絕して、逢ふ機會が遠ざかつた。この意を名所の名に寄せて詠むだものて

ある。

【批　評】　これでも戀歌なのかと現代の人は驚くかも知れぬが、疑も無い戀歌、しかも當時の傾向と風尙とを完全に表はした代表的戀歌の一つなのである。又

消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露　（四十歳）

白妙の袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く　（四十一歳）

神無備のいはせの杜の言はずとも知れかし下につもる松葉を　（五十四歳）

暮るる夜は衞士の焚く火をそれと見よ室の八島も都ならねば　（五十四歳）

などの戀歌は實感が溢れてゐないから共鳴出來ぬと現代の我等は言ふ。乍併、ここで「何が實感であるか」を考へて見る必要がある。戀愛は萬葉人と現代人との獨占物で無い事は明らかだ。

戀せずば人は心やなからましもののあはれもこれよりぞ知る　（俊成）

新古今人も人間である以上戀愛を經驗したに相違ない。前掲數首のやうな間接的、

微温的、遊戯的な戀歌に彼等の實感を擽ぐられつゝ、接吻もし、乳繰り合もし、泣きもし、笑ひもしたのであらう。斯樣な取り繕つた戀歌の贈答が澎沛たる感情の波の媒介をした事でもあらう。「實感が足りない」と後世の我等がおせつかいな心配をする事で無い。彼等の感情は我等のそれよりも洗練せられたもので有つたかも知れない。かう言へばとて予は新古今時代の戀歌を絶對に良いと辯護するのでは無い。唯、古典の鑑賞は史的同情の上に於いて爲されねばならぬ事を强調した迄である。

雜歌

（九二）　形見とて幾日もあらぬ秋の日にうつろひまさる白菊の花　（歳末勘）

【字句解】「形見」亡き人を思ひ出す種となるもの。「うつろひ」色が褪せる。

【歌　意】　母を失つた忌中の人に贈つた歌。その母なる人はこの秋病歿した。思出のたよりとなる秋の日もだんだん殘り少くなつて、その秋を象徴する白菊の花も、日

毎に色褪せてゆく。それで貴方は何を形見として、亡き母君を偲び給ふかと、同情し慰めてやつた歌。

【批　評】とりしづめた、心深い挽歌。一體當時の哀傷歌は戀歌の場合と同樣に、美辭を連ねたり、間接的の言ひ廻しをしたりして、萬葉集の如く惻々として人に迫るものは稀なのである。例へば定家がその母を哭する作

たまゆらの露も涙もとどまらず亡き人戀ふる宿のあきかぜ

の如き實感の稀薄な麗句が代表的の秀歌と思はれたらしい。乍併、さすがに「形見とて」のやうに時代を超越した佳作も時に無いではない。俊成がその妻の墓に詣でた時の

まれに來る夜半も悲しき松風をたえずや苔の下に聽くらむ

なども各時代を通じて最上品の一つである。

（九三）　つくづくと寢ざめて聽けば浪まくらまださ夜深き松風のこゑ（二十歲）

【字句解】「浪まくら」船路の旅行。

【批　評】拾遺愚草中にも旅の歌は數多あるが此の一首などは餘程自然で實感味のある方だと思ふ。

旅衣袖ふく風やかよふらむ別れて出でし宿のすだれに（三十五歲）

都とて雲のたちゐに忍べども山の幾重をへだてきぬらむ（三十五歲）

いづこにかこよひは宿をかり衣日も夕ぐれの峰のあらしに（三十八歲）

袖に吹けさぞな旅寢の夢も見じ思ふかたよりかよふ浦風（四十一歲）

都にもいまや衣をうつの山夕霜はらふ蔦のしたみち（四十四歲）

宇津の山吾が行くさきもほど遠き蔦の若葉に春雨ぞふる（五十四歲）

馴れぬ夜の旅寢なやます松風にこの里人や夢むすぶらむ（歲未勘）

右に揭げたのは皆相當に巧みな歌ではあるが、惜しい哉迫力が乏しい。机上の旅行歌なるが故である。定家の足跡は非常に狹かつた。最も遠出したのが熊野御幸の供奉

と伊勢勅使の隨行とであつた。南都や有馬に行つた事が明月記に美文で誌るされてゐるが、それ等も相當遠出の方である。その他は住吉、宇治、水無瀨、大原、比叡の坂本ぐらゐなもの。足跡の狹い事は亂世の大宮人として已むを得なかつた。父の俊成などは一層の旅行不知で、多分畿內の外は見なかつたのであらう。それでも、

たちかへりまたも來て見む松島や雄島の苫屋波に荒らすな

なんどと口誦さむでゐる。新古今集時代の歌人で本當の旅行をしたのは西行法師以外には無い。それだから當時の羇旅歌は、いくら美辭を列ねてあつても、當時の戀歌程も面白くないのである。戀歌の方は、たとひ百首歌中の題詠の形で發表されてあつても、それが一から十まで無眞實の空想に過ぎなかつたとは斷言出來ない。いくら無氣力な當年の貴族でも本能まで失つた譯(わけ)ではあるまいから。

（九四）鷺のゐる池のみぎはに松ふりて都のほかの心地こそすれ　（二十六歲）

【歌　意】鷺の居る池の汀に茂つてゐる松は老松である。斯樣な景色の中に居ると、

都の眞中に住み乍ら、田園にでも住むでゐるやうな心地がする、の意。

（九五）　けふ見れば弓きるほどになりにけり植ゑし岡べの槻のかた枝　（三十歳）

【字句解】「弓きる」切つて弓に作り得る位に成長した意。「植ゑし」は作者が昔植ゑたの意。「槻」梓や槻は弓を作る用材。定家は馬術は勿論、弓術にも堪能であつたから、自然槻の樹にも興味を持つたのであらう。

（九六）　わくらばに訪はれし人も昔にてそれより庭の跡は絶えにき　（三十七歳）

【歌　意】たまさかに人が尋ねてくれたのも遠い以前の事であつて、吾が庭にはそれから久しく訪ふ人の跡も絶えた、の意。

【批　評】閑庭の幽趣。下句散文的の形ですらすら書き下したのも却つて味が深い。

同じく閑居を歌つたもので、

家居してまだかばかりも知らざりきみ山の里のこがらしの聲　（二十八歳）

蓬生のまがきの蟲のこゑ分けて月は秋ともたれか訪ふべき　（二十九歳）

跡絶えておちし木の葉に雪ふりぬ誰ればかりはと待つ人もなし（三十歳）

瀧の音にあらし吹きそふあけがたはならはず顔に夢ぞ驚く（三十五歳）

など惡くは無いけれども「わくらば」の一首とは比べ物にならぬ。一體此の時代の山家とか閑居とかいふ題の歌には世相を背景とした特殊の持味がある。それは僧侶が寺に籠つてゐるのでも無く、仙人が霞を食らひ露を吸つてゐるのとも違ふ。捨てたつもりの浮世を捨て切れず、花月への愛着は勿論として、京洛の人寰を始終夢見る。庭の苔を踏むで誰れか來てはくれぬかと心待ちにする。西行でさへも或る時は獨りは棲み切れずに「庵を並べむ」と歌ふ。つまり彼れ等の生活には無常厭世觀と人間思慕とが常に相剋してゐる。其處に特殊の寂寥味が潜むでゐるのである。此の種の歌の上乘のものは山家集に最も多い事はおのづから想見されるのであるが、他の歌人にも相當にある。

（九七）つくづくと明け行く窻の燈火のありやとばかり問ふ人もなし（五十八歳）

【字句解】「つくづくと」つくねむと、物寂しく暇あるさまにいふ副詞。上句は有心の序。

【歌　意】作者は書見か、作歌か、或は世路のことを考へてか、夜通し起き明して坐つて居た。その側にありなしの燈火が殘つて幽にまたたいてゐる。斯樣に侘しく暮らしてゐる自分の存在などは、心に掛けて問うて呉れる人も無い、の意。

（九八）さまざまに春のながめぞあはれなる西の山の端かすむ夕日に（三十五歲）

【歌　意】西の山の端にかすむ夕日を眺めていろいろと春の景色のあはれさが、身にしみて感じる、の意。時代思想として西方欣求の心が暗示されてゐる。

（九九）天地もあはれ知るとはいにしへの誰がいつはりぞ敷島の道（歲末勘）

【批　評】歌道精進の上の苦悶の叫びである。深く打ち込むだ作家の嘆聲である。此の歌を目して、定家が創作慾を減退した時代の無氣力な告白だとする說もあるやうだ。乍併、さやうの說は淺はかでもあり、又定家ほどの人間を觀る上に於いて同情が

足り無過ぎる。少くとも、此の歌が深く籠つた溜息である事は一首の旋律からも明らかだ。この歌以外にも歌道に就いての述懐は拾遺愚草中に澤山見える。眼に觸れた儘を制作時代順に列擧しよう。

見るもうし思ふもくるし數ならでなどいにしへを忍びそめけむ　（二十五歳）

たらちねの心を知ればわかの浦や夜深き鶴の聲ぞ悲しき　（二十五歳）

和歌の浦の浪に心は寄すと聞くわれをば知るや住吉の松　（三十歳）

われをば知るやの一言に自信と抱負とが窺はれるでは無いか。十九歳にして日記の一節に紅旗征戎非吾事と書いた我が定家は、三十歳の時斯様の言擧げするに到つた。

たちかへり思ふこそなほ悲しけれ名は殘るなる苔の行方よ　（三十三歳）

苔の下に埋まぬ名をば殘すともはかなの道や敷島の歌　（三十五歳）

我が道を守らば君を守るらむよはひはゆづれ住吉の松　（四十歳）

いたづらにあたら命をせめきけむながらへてこそ今日に逢ひぬれ　（四十歳）

和歌の浦にかひなき藻屑かきつめて身さへ朽ちぬと思ひけるかな　（四十歳）

四十歳の三首は率讀しては何事も無いやうであるけれども、味はつて見ると其處には失望とほつとした安心と思ひ上がつた心持とがある。四十歳（建仁元年）といふ年は定家に取つて最も意義深い年であつた。それ迄稍もすれば動搖しつつあつた定家の歌人としての地位は、此の年六月千五百番歌合の作者に加へられた事によつて安定し、七月には和歌所寄人を拜命し、ついでその十一月新古今集撰進の院宣を蒙つた事によつて磐石と成つた。

夜の鶴鳴くね古りにし秋の霜ひとりぞ干さぬ和歌の浦人　（四十六歳）

つれもなくなほ住吉に手向草ひき捨てらるるあとの朽葉を　（四十七歳）

かきつめし松のしき浪色わかぬ藻屑なりけり身さへ朽ちぬる　（四十七歳）

雲の上を照らさむ秋も知らざりき敎へし庭の道の月影　（五十三歳）

かたばかりわれは傳へし我が道の絕えやはてぬる住吉の神　（五十四歳）

敷島の道に吾が名はたつの市やいさまだ知らぬ大和言の葉　（五十四歳）

より來べきかたも渚の藻しほ草かきつくしてし和歌の浦浪　（五十四歳）

この年齡に達して反動的懷疑に陷つてゐる。

和歌の浦に鳴きて古りにし霜の鶴このごろ見えつ心やすめて　（五十五歳）

神かけて祈りし道のうもれ水掬びもはてぬ影や絕えなむ　（六十歳）

たらちねの及ばず遠き跡過ぎて道をきはむる和歌の浦人　（七十一歳）

頹齡の定家が得意の最高峯から呼びおろした聲なのである。官位は父俊成にも越えて數年前既に正二位に叙せられ、又此の年（七十一歳、貞永元年）の一月權中納言に任ぜられた。歌道に於いては生涯中に再度まで勅撰集撰進の榮譽を擔ひ、此の年十月新勅撰集の序と目錄とを上奏したのであつた。

（一〇〇）　たらちねの及ばず遠き跡過ぎて道をきはむる和歌の浦人　（七十一歳）

【字句解】「たらちね」は單に親といふことでここでは父の俊成のこと。「及ばずと

ほき」俊成は三位で薨去。定家はこの歌を作つた年には二位であつた。「道をきはむる」歌道の奥義をきはめる。「わかのうら人」は歌人の意。

【批　評】上句には官位昇進の滿足、下句には歌道上の自信といつたやうに對象を二個持ちながら、一首渾然として破綻を示さないのは調子の一貫に因る技巧の手際である。尤も、此の二個の對象物は定家に於いて不可分であつたと觀る説もある。百首歌奏上、歌合、勅撰集撰進と言ふやうな事に沒頭し競爭した當時の歌人達に取つては、權勢や榮達と歌の名譽とが往々平行したであらうから。明月記を見ると、除目の問題と歌道といづれがより多く定家に關心したかが疑問に成らないでも無い。定家と雖も時代の所産である以上、他人の欲求したものは彼れも亦欲求したに相違無い。負けじ魂強く、人間的の弱點を多分に持つた我が定家の事であるから、一層さうであつたかも知れない。されぱとて、定家の歌道は榮達の慾の權道であつたと觀るのは甚しき冒瀆である。生涯の結果から觀るならば、二位中納言と拾遺愚草とは比較にならないで

は無いか。拾遺愚草の歌に內在的價値が無いものと妄斷した場合に於いてのみ定家の權勢慾を非議する論理が立つ。苟めにもさうで無い以上、作者に榮達の慾があらうと、物慾乃至色慾があらうと構つた事では無い。さて、官位昇進の欲求を歌つた作は定家歌集中にも隨所に見られる。例へば、

むれてゐしおなじ渚の友鶴に吾が身ひとつのなどおくるらむ　（二十六歲）

三笠山麓ばかりをたづねてもあらまし思ふ道のはるけき　（三十五歲）

さゆり葉にまじる夏草しげりあひて知られぬ世にぞ朽ちぬと思ひし　（五十四歲）

君が代の雨のうるひはひろけれどわれぞ惠みの身に餘りぬる　（五十五歲）

此の種の歌は人爵の願望を歌つたのだから皆つまらぬものであると言ふならば、それは間違つてゐる。歌の價値を決めるものは「如何に」であつて、「何を」では無い。更に言へば、「如何に深く」だけが問題と成るのだ。「何を」は道德と哲學との關する

處であつて、藝術の問題では無いのである。「何を」を偏重する近代の藝術論は根本に錯誤を持つてゐる。（昭和六年十二月稿）

昭和七年七月一日印刷
昭和七年七月五日發行

新古今集の鑑賞

定價壹圓五拾錢

著作者　川田順

發行者　東京市京橋區銀座西二ノ一
立命館出版部
竹上孝太郎

印刷者　東京市京橋區京橋二ノ十三
佐々木恒太郎

印刷　東亞印刷株式會社
製本　小峯製本所

發行所　東京市京橋區銀座西二ノ一
立命館出版部
電話京橋五六〇六番
振替東京七五參六貳番

川田順著書目錄

第六歌集	第七歌集	詩集	研究	雜筆
夜月集（未刊）	題未定（未刊）	春の木がくれ	新古今集の鑑賞	山海居歌話（未刊）
昭和二年乃至六年の制作にして近畿遊行、山海居雜詠、四季風物、身邊雜唱等四百三十四首を收む	大正末より昭和六年に亙る間の主觀の作凡三百首を收む。	著者學生時代の詩を集成したるものにして、歌集「陽炎」の姉妹篇と觀るべきもの。 東京 竹柏會出版部發行	新古今集とその時代に關する研究にして新古今集の鑑賞、新古今時代の諸歌人、雜稿十一種、藤原定家歌集講話の四篇を收む。 東京 立命館出版部發行	大正中期以來執筆したる歌論、隨筆、評傳等數十種を收む。

吉澤義則著

國語説鈴

吉澤博士は國語國文學界の最高權威として其の研究の斯界に寄與せる多大の貢獻は枚擧にいとまがない。本書收むるところ國語國文學の全般に亘り其研究諸論はつきせぬ興趣の泉をなし、全篇にわたり高雅なる著者の全風貌を彷彿せしめてゐる。

價 三、八〇　送料 二二

吉澤義則著

國語史概説

本書は國語學の一部門としてその歴史的研究の方面を受持つた我國最初の研究書にして國語の音韻、語彙、語法等の上に如何なる變遷を經て現代に至れるかを明かにしたものである。

價 一、五〇　送料 一〇

吉澤義則撰

増註校訂 徒然草諸抄大成

古來幾多の諸抄により異説多く解説多岐に分れ是非定まらず今諸抄大成により、現代の諸説をも網羅して正解を與ふ。徒然草解義の最高權威であり解釋の最後のものたるを斷言す。

價 五、三〇　税 二二

吉澤義則著

異本徒然草

本書は久原文庫藏嵯峨本をそのまゝ活字に改め傍に光廣本を以つて校合し、上欄に延德寫本及び正徹自筆本を抄錄して本文との異同を示せり。上卷は延德本、正徹本及び神宮文庫藏正徹本傳寫本の識語を、又下卷に光廣本、正徹本及び神宮文庫本の各識語を收め、卷頭に詳細なる索引を附せり。

價 一、二〇　送料 一二